念仏林遺跡

ねんぶつりん

－石川県土地開発公社串町用地整備事業に係る発掘調査報告書－

1993

石川県立埋蔵文化財センター

念仏林遺跡

ねんぶつりん

－石川県土地開発公社串町用地整備事業に係る発掘調査報告書－

1993

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は石川県小松市四丁町に所在する念仏林（ねんぶつりん）遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡の発掘調査は、石川県土地開発公社の串町用地整備事業に関係し、同公社の依頼により、石川県埋蔵文化財センターが1989（平成元）年度に実施したものである。
なお、本遺跡については、小松市教育委員会が短期大学建設や市道拡幅に係り、1985年から88年の4年次にわたって発掘調査を実施しており、県立埋蔵文化財センターによる1989年の調査は第5次の発掘調査にあたる。

3　1989年の発掘調査及びその出土遺物の整理、報告書刊行に係わる費用は、石川県土地開発公社が負担した。

4　発掘調査の実施、報告書の刊行にあたっては、下記の機関、個人の御協力を得た。記して感謝の意を表する。
石川県土地開発公社、小松市教育委員会、石川県立小松児童会館、小松市シルバー人材センター、セントラル航業株式会社、石田和彦、樫田誠、加藤三千雄、久田正弘、藤田邦雄、本田秀生、望月精司（個人名五十音順、敬称略）

5　石器の石質同定については関戸信次氏より多くのご教示を得た。

6　現地調査は石川県立埋蔵文化財センター専門員平田天秋の指導の下、同センター主事松山和彦が担当し、調査員中村繁和の助力を得た。調査期間及び面積は以下のとおり。
　　調査期間　1989年5月12日～同年11月17日
　　調査面積　約4200㎡

7　出土遺物の整理は、1990年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。担当は次のとおり。
浅野豊子、松田智恵子、横山そのみ、竹内弘美

8　報告書の編集、執筆は松山和彦が担当した。報告書作成にあたっては以下の助力を得た。
　　遺物写真撮影　大藤雅男
　　図版作成　　大藤雅男・中村繁和・端　猛

9　本書では遺構・地図等の方位はすべて真北を表示し、水平基準は海抜高で表示する。

10　1989年の念仏林遺跡の発掘調査で得た記録資料、出土資料は石川県立埋蔵文化財センター収蔵庫に一括して保管してある。

目　　次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 1
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 3

第２章　調査に至る経緯と調査の経過 …… 10
　（１）　調査に至る経緯 …… 10
　（２）　既応の調査 …… 10
　（３）　調査日誌（抄） …… 10

第３章　遺構の配置と層序 …… 13
　（１）　調査区におけるグリッドの設定 …… 13
　（２）　遺物の取り上げ方法 …… 13
　（３）　遺構の配置 …… 13
　（４）　層序 …… 13

第４章　遺構と遺物 …… 18
　第１節　縄文時代の遺構と遺物 …… 18
　　１．竪穴・竪穴住居 …… 18
　　Ｋ１号竪穴 …… 18
　　Ｋ２号竪穴住居跡 …… 18
　　Ｋ３号竪穴住居跡 …… 37
　　２．遺物集中 …… 47
　　Ｋ１号遺物集中 …… 47
　　３．包含層出土資料 …… 52
　第２節　古墳時代以降の遺物 …… 61

第５章　まとめ …… 67
　（１）　縄文集落の構成について …… 67
　（２）　石器組成について …… 68
　（３）　土器について …… 69

第１章　遺跡の位置と環境

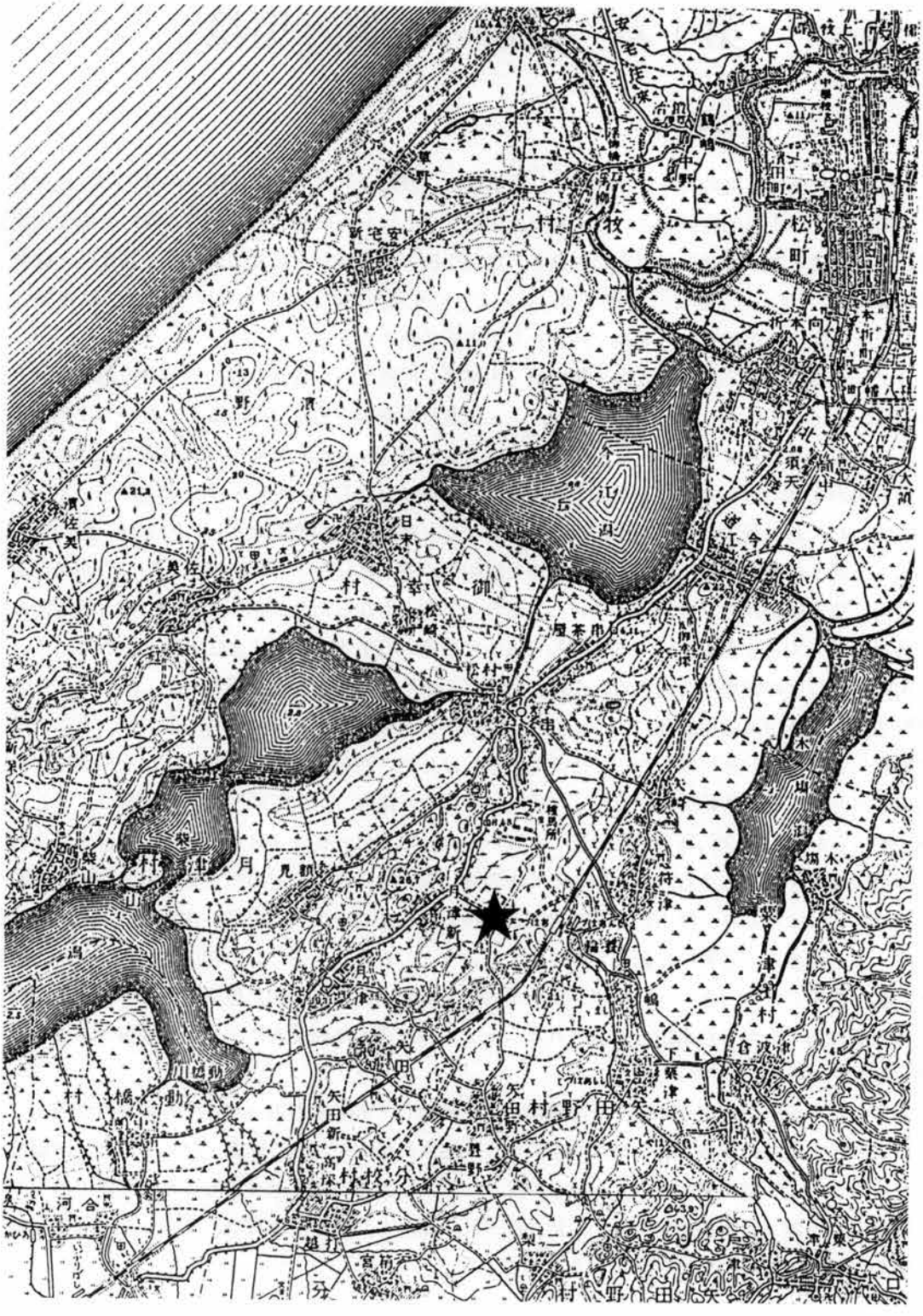
第１節　地理的環境

石川県小松市四丁町地内に所在する念仏林（ねんぶつりん）遺跡は、県都金沢につぐ県下第二の都市で、南加賀の経済・文化の中心的位置を占める小松市の市街地からは南西に約６㎞を測る。西には旧北国街道が、東にはそれを継承した現在の国道８号線が小松と大聖寺とを結んでおり、ＪＲ北陸本線粟津駅も東方約700ｍに近接して所在する。このように交通の便に恵まれた地ゆえに周辺は短期大学・児童公園・厚生施設など文教ゾーンとしての変貌がめざましい。

さて、遺跡は加賀三湖（今江潟・柴山潟・木場潟）に囲まれた月津台地の一角を占地しており、標高は約８ｍと低い。これらの潟は干拓が進んで昔日の面影が消えつつあるが、かつては動橋川・八日市川水系の水は柴山潟、今江潟を経て梯川最下流部に合流して梯川河口の安宅で日本海へ、また日用川水系の水も木場潟を経てより上流側で梯川に合流したのちにやはり安宅から日本海へ注いでいた。西を柴山潟・今江潟、東を木場潟・北を梯川などの豊かな水辺に囲まれ、標高も30ｍ以下で低平な月津台地ではあるが、台地上は用水に恵まれなかったため農地としての開発が遅れ近代以降も広範囲に森林が残っていた。遺跡の名称ともなった念仏林もその一つで、欝蒼として昼なお暗い大きな森を通過するに際して人々は恐怖心のあまり思わず念仏を唱えたともいう。

次に遺跡付近の微地形を眺めるならば、遺跡は柴山潟の水系と密接な関連を有していたことが理解される。柴山潟は南東部において長さ約１㎞の南への張り出し部分を有しており、その南端に動橋川と馬渡川が注いでいた。このうち馬渡川は月津台地を開析した小河川で、その開析谷は南東から北西へと長さ約２㎞にわたって続く。谷口の月津町・矢田町の間では幅約500ｍの谷底低地がみられるが、念仏林南遺跡付近で二枝に分岐して本流の谷はＪＲ粟津駅付近を、また支谷は本遺跡西方を谷頭とする。以上のごとく本遺跡は柴山潟に注ぐ小河川の支谷の谷頭に接して営まれているわけであり、柴山潟水系に含まれるゆえに遺跡周辺が旧江沼群に含まれる点も首肯できる。本遺跡西方の谷奥には湧水があり、それより下の谷部は水田として利用されていたが、排水の悪い深田であったという。洪水がなく旱害にも影響されない反面、農作業の労がかさみ生産性も決して高くなかった水田と想像される。そして谷の湧水は縄文人にとっても貴重な水場を提供したはずである。

ところで本遺跡から東へ１㎞余りで月津台地を横断して木場潟周辺へ到達することもできる。このことは本遺跡の立地が縄文時代中期において海水が侵入してくる内湾となっていた柴山潟のみならずさらに広域の鹹水・汽水・淡水の様々な水面に容易にアクセスすることが可能であった事情を示しており、本遺跡を漁撈への依存度が高い集落と判断するならは、すぐれて有利な立地条件を兼ね備えていたこととすることができよう。



第１図　念仏林遺跡周辺の地形（１／50,000）　（星印＝念仏林遺跡）

第2節　歴史的環境

月津台地周辺のこの点に関しては石田和彦・樫田誠の両氏がすでにまとめられている（[樫田・望月・石田　1988] 及び [樫田　1992]）。ここでは筆者の関心のあるテーマに沿って概観するに留めたい。

1．石器時代の先住者

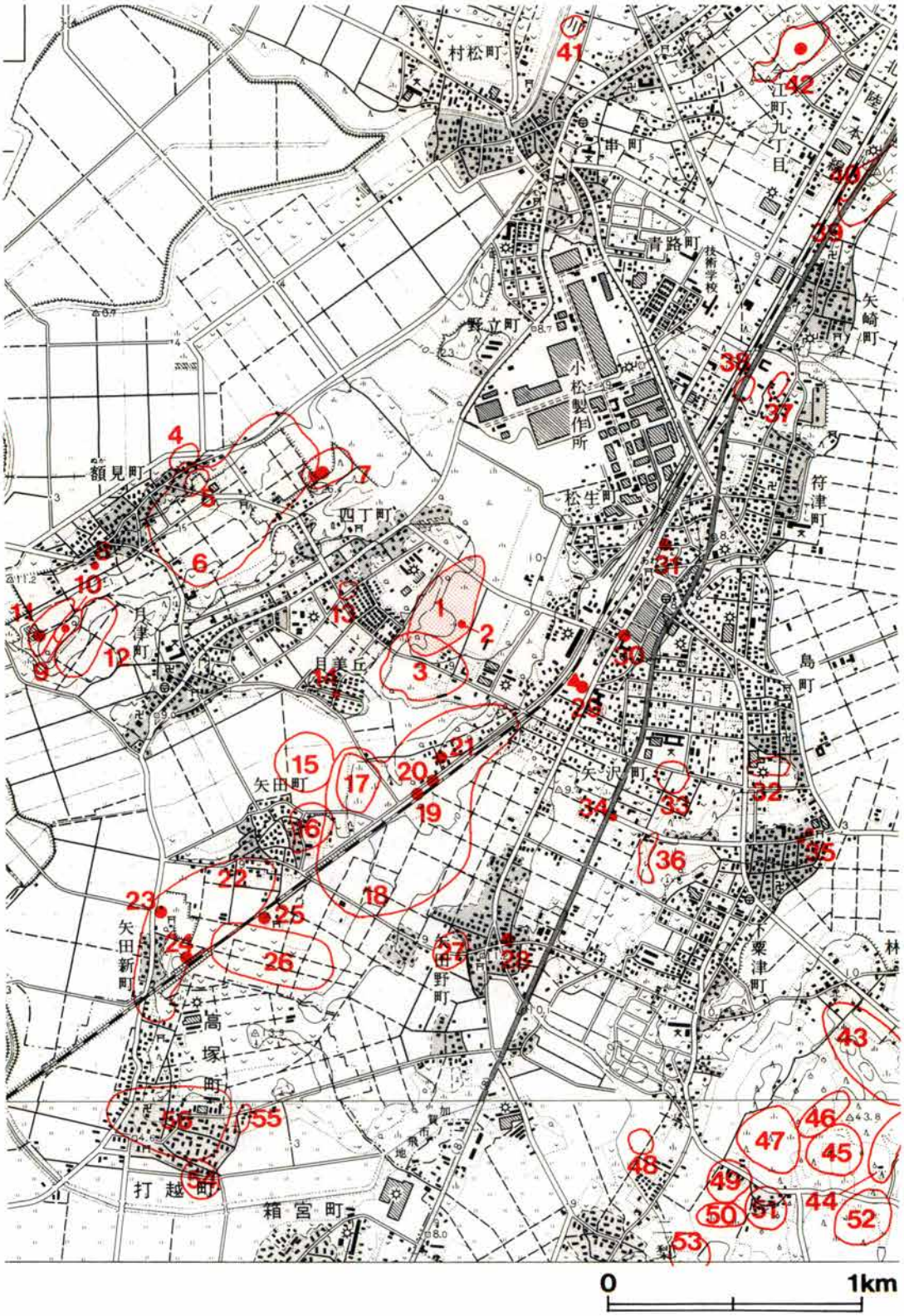
月津台地に残された人類の最初の足跡は矢田野エジリ古墳周溝出土の削器 [樫田　1992] や念仏林遺跡出土の石槍 [樫田・望月・石田　1988] に求めることができ、旧石器時代に遡り得る資料といえる。周辺で本格的に集落の形成が本格化するのは縄文時代中期で、本遺跡をはじめ月津新・茶臼山A・額見神社前A・矢田A・符津A・符津Bの各遺跡が知られる [樫田・望月・石田 1988]。本遺跡の既応の調査において石器組成を分析した樫田誠氏は、本遺跡が生業面において漁撈、とりわけ内湾における漁撈にウェイトを置く集落であったことを指摘している [樫田・望月・石田　1988] が、1989年の調査を担当した筆者も基本的に氏の見解を支持したい。柴山潟北部の柴山台地上には縄文時代中期後葉を中心に営まれた柴山貝塚が立地し、その貝層から多量のヤマトシジミ（汽水性）のほか、ハマグリ・カキ・サザエが検出されている [藪谷　1978]。このことは本遺跡が所在する月津台地の西方、今江潟・柴山潟への海水の流入を物語るものである。加えて10世紀にまとめられた『延喜式』の兵部省に関する部分（巻二十八）に北陸道の駅名として「潮津駅」がみえ、その所在地を柴山潟西縁の加賀市潮津町付近にあてる説に異論はないが、潮津の地名が古代にまで遡るものであるならば縄文時代以降かなり遅くまで柴山潟に潮すなわち海水の流入が続いたことになる。

2．古墳時代の開拓者

石川県をはじめとする北陸地方の弥生文化の生成・展開は、かつて柴山出村式→小松式→猫橋式という大きな流れのなかで語られていた [橋本　1966]。これらの標識遺跡はいずれも9世紀の加賀国立国以前以前には越前国江沼郡に包摂されていた加賀三湖周辺の低地に立地しており、その“江沼”なる地名からも想起される水郷的景観が、初期の稲作農耕文化にとっての必須の条件の多くを提供したことは想像に難くない。

しかしながら、加賀三湖に囲まれた月津台地の一角を占める本遺跡周辺においては、弥生時代を通じて集落の形成は低調であったと考えられる。本遺跡に近接する念仏林南遺跡で竪穴住居跡群の構築がみられるのはその終末ともいえる法仏・月影式期まで待たねばならない。そして、同遺跡は古墳時代後期にピークを迎え、竪穴住居跡21軒、掘立柱建物17棟と急激に拡大する [樫田・望月・石田　1988] が、それを軌を一にするかのように馬渡川の開析谷の左岸にもこの時期に比定される矢田野・矢田B・刀何里の各遺跡が出現してくる状況が窺える [樫田　1992]。このことと馬渡川流域をはじめとする地域がのちに平安時代の『和妙類聚抄』にみえる江沼郡“矢田郷”に比定される点を考えあわせるならば、古墳時代後期をもってエヌマのクニを構成するヤタ小地域の胎動期と位置付けて大過ないだろう。

次に目を転じて古墳についてみてゆくならば、やはり集落跡の動態と同じ傾向が指摘でき、月



第２図　念仏林遺跡周辺の遺跡（１／25,000）

第１表　念仏林遺跡周辺の遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	県遺跡番号	所　在　地	種別	立　地	時　代	出　土　品
1	念仏林遺跡	03097	小松市四丁町	集落跡	台地	縄文中期～古墳	縄文土器・石器・弥生土器・須恵器
2	念仏林古墳	03098	小松市松生町	古墳	台地斜面	古墳後期	須恵器（提瓶、杯、高杯）、鉄鏃、鍬先、直刀、鉄斧、金環、勾玉、管玉など
3	念仏林南遺跡	03099	小松市月津町	集落跡	台地	縄文中期・古墳	縄文土器、石器、土師器、須恵器
4	額見神社前Ａ遺跡	03087	小松市額見町	散布地	台地	弥生～古墳	土師器
5	額見神社前Ｂ遺跡	03088	小松市額見町	散布地	台地	縄文	土器、打製石斧、石鏃
6	額見町遺跡	03089	小松市額見町	散布地	台地	奈良～中世	土師器、須恵器、中世陶器、土師質土器
7	臼のほぞ古墳	03090	小松市額見町	古墳	丘陵	古墳	
8	佐衛門殿古墳	03091	小松市額見町	古墳	丘陵	古墳	円墳
9	茶臼山祭祀遺跡	03092	小松市月津町	祭祀	丘陵腹	奈良	須恵器、土馬
10	茶臼山Ａ遺跡	03093	小松市月津町	散布地	丘陵裾	不詳	須恵器
11	茶臼山古墳	03094	小松市月津町	古墳	丘陵	古墳後期	須恵器
12	茶臼山Ｂ遺跡	03095	小松市月津町	散布地	丘陵斜面	縄文	土器（中期）
13	月津新遺跡	03096	小松市四丁町	散布地	平地	縄文	土器、石斧、石錐、石鏃
14	念仏塚古墳	03100	小松市月美丘町	古墳	台地	古墳	
15	矢田Ａ遺跡	03101	小松市矢田町	散布地	台地	縄文	土器、打製石斧、磨製石斧
16	矢田Ｂ遺跡	03102	小松市矢田町	散布地	台地	古墳	須恵器
17	借屋古墳群	03103	小松市矢田町	古墳	丘陵	古墳後期	須恵器、直刀、鉄鏃、刀子、勾玉、丸玉、同筒埴輪など
18	矢田野遺跡	03104	小松市矢田野町	散布地	平地	古墳後期	土器
19	矢田野１号墳	03105	小松市矢田野町	古墳	平地	古墳	
20	矢田野２号墳	03106	小松市矢田野町	古墳	平地	古墳	須恵器
21	百人塚古墳	03107	小松市矢田野町	古墳	台地	古墳	須恵器
22	矢田新遺跡	03108	小松市矢田新町・加賀市高塚町	集落跡	台地	奈良後期・中世	須恵器、土師器、加賀焼
23	丸山古墳	03109	小松市矢田新町	古墳	台地端	古墳	石棺、須恵器
24	無名古墳群	03110	小松市矢田町	古墳	丘陵	古墳	
25	狐森塚古墳	03111	小松市矢田野町	古墳	平地	古墳	須恵器、金環
26	刀何理遺跡	03112	小松市矢田野町	散布地	平地	古墳後期・中世	須恵器、加賀焼
27	矢田野神社前遺跡	03113	小松市矢田野町	散布地	台地	平安	土師器
28	中村古墳	03114	小松市矢田野町	古墳	平地	古墳	須恵器（提瓶、杯、壺）、土師器（椀、蓋）、刀剣、銀環
29	矢田野エジリ古墳	03115	小松市矢田野町	古墳	台地	古墳後期	円筒埴輪、人物埴輪、馬形埴輪、須恵器、土師器
30	蔵輪塚古墳	03116	小松市島町	古墳	台地	古墳後期	須恵器（杯、壺）、鉄器、小玉
31	石山古墳	03117	小松市符津町	古墳	台地	古墳後期	須恵器、土師器、直刀、刀子、鉄鏃、金環、銀環、馬具
32	島遺跡	03118	小松市島町	散布地	台地	古墳～奈良	須恵器、土師器、陶質土器
33	島Ｂ遺跡	03119	小松市島町	散布地	畑地	奈良・平安	土師器、須恵器
34	島経塚	03120	小松市島町	経塚	台地	不詳	経石
35	下粟津１号、２号横穴	03121	小松市下粟津町	横穴	台地	古墳	
36	下粟津横穴	03122	小松市下粟津町	横穴	平地	古墳	
37	符津Ａ遺跡	03136	小松市符津町	散布地	平地	縄文	土器、磨製石斧、打製石斧
38	符津Ｂ遺跡	03137	小松市符津町	散布地	平地	縄文	土器（中期・後期）
39	薬師遺跡	03138	小松市今江町	散布地	丘陵	不詳	須恵器
40	矢崎Ｂ古墳	03139	小松市矢崎町	古墳	低丘陵	古墳	金環、馬具、鉄鏃、刀子
41	串台窯跡	03140	小松市串町	窯跡	平地	安土桃山	串焼・瓦
42	狐山古墳	03141	小松市今江町	古墳	丘陵	古墳	土師器
43	林遺跡	03004	小松市林町	窯跡、製鉄跡	丘陵	古墳～平安	須恵器、鉱滓、羽口、鋳型
44	戸津シンブザワ遺跡	03007	小松市戸津町	窯跡、製鉄跡	丘陵斜面	平安	須恵器、鉄滓
45	戸津古窯跡群	03008	小松市戸津町	窯跡	丘陵斜面	古墳～中世	須恵器、土師器、瓦、陶製水煙、硯、加賀焼など多数
46	戸津六字ケ丘窯跡	03009	小松市林町・戸津町	窯跡	丘陵斜面	古墳・奈良	須恵器、土師器
47	二ツ梨一貫山古窯跡	03010	小松市二ツ梨町	窯跡	丘陵	奈良前半・平安	須恵器
48	二ツ梨遺跡	03011	小松市二ツ梨町	散布地	平地	奈良・平安	土師器・須恵器
49	二ツ梨豆岡山窯跡	03012	小松市二ツ梨町	窯跡	丘陵	古墳	須恵器
50	二ツ梨殿様池窯跡	03013	小松市二ツ梨町	窯跡	丘陵斜面	古墳・平安	須恵器、埴輪、土師器
51	二ツ梨豆岡山向山窯跡	03014	小松市二ツ梨町	窯跡	丘陵	奈良・平安	須恵器、瓦、硯
52	戸津オオタニ遺跡	03015	小松市戸津町	窯跡、製鉄跡	丘陵	奈良	須恵器、鉄滓
53	二ツ梨丸山窯跡	03023	小松市二ツ梨町	窯跡	丘陵	古墳	須恵器
54	打越Ａ遺跡	06284	加賀市打越町	散布地	平地	縄文前期	土器、石斧、石錘
55	打越Ｂ遺跡	06285	加賀市打越町	散布地	平地	弥生後期	弥生土器、石斧
56	打越城跡	06286	加賀市打越町	城跡	丘陵	安土桃山	

津台地の古墳の大半が6世紀代に築造されたものによって占められている。南加賀の古墳は大聖寺市街地から動橋川流域にかけての江沼低地周辺に展開した江沼古墳群と、梯川流域から能美丘陵西部にかけての一帯を占地す能美古墳群との二大ブロックに分けて理解することが一般的であるが、その中間地帯に位置する月津台地の古墳群については中司照世氏の指摘［中司　1977］以来、江沼ブロックの一部として捉える考え方が主流をなしている。

さらに中司氏は当地域における埴輪・石棺使用の初源とされる加賀市二子塚狐山古墳の被葬者を5世紀後半に江沼地域の統合を達成した首長と考え、その江沼地域首長権の系譜に連なる墓域を月津台地に求めて御幸塚古墳→臼のほぞ古墳→矢田新丸山古墳という変遷を想定している。また、石川考古学研究会による江沼古墳群分布調査の成果を報告した田嶋明人・湯尻修平・梶幸夫氏は、二子塚狐山古墳以降の江沼地域首長墓について、(富塚丸山古墳）→臼のほぞ古墳→矢田新丸山古墳→狐森古墳への流れを推定し、やはり中司氏と同様に6世紀における江沼地域首長墓域の月津台地への東遷の図式を追認している。［田島他　1978］。

しかし、上記の従来の図式に対しては、近年、藤井明夫氏が臼のほぞ古墳の年代をめぐって疑問を提出するところとなった［古墳文化を学ぶ会　1992］。氏は測量調査を実施した同古墳の墳丘形態と奈良県渋谷向山古墳（いわゆる景行天皇陵）のそれとの相似性を根拠に、同古墳を「4世紀後半を上限した古い年代」まで遡らせるべきだとする。それとともにこれまでの研究史に登場した“地域首長”あるいは“広地域首長”なる概念の曖昧さを指摘し、その首長墓の変遷をめぐる図式に関しても「それぞれの首長墓がもつ諸要素の関連の有無については充分に検討しないまま」「想定される年代順に比較的大型の古墳を選んで並べたものにほかならない」といささか手厳しい批判を行っている。全長53mを測る前方後円墳で月津台地で最大の規模を誇る臼のほぞ古墳の年代をめぐる論争については、築造年代を示す確実な資料の出土でもない限り結論をみないと思われる。ただ、藤井氏の行った「臼のほぞ・蓑輪塚両墳が埴輪を備えないことに対する充分な説明が必要」とする問題提起は真摯に受け止められねばならないであろう。全長40mの前方後円墳である後者ではくびれ部において箱形粘土棺の存在が確認されているが、北野博司氏は「後円部の遺物の出土状況から見て、そこに別の中心主体が存在した可能性が強い」とする［北野　1983］。

以上、月津台地における古墳群の出現と展開という事象に対しての研究者各氏の見解の一端を紹介した。続いてその歴史的背景についての私見を述べてみたいと思う。門外漢なので的はずれの部分も多いかもしれないが、その点は後日ご叱正を乞うこととする。

さて、古墳時代後期には月津台地で古墳のみならず柴山潟に注ぐ馬渡川流域の低湿地に臨む台地縁辺に集落が急速に増加・拡大化の傾向にあると指摘し得る点は先述のとおりである。それら集落の歴史的性格を明らかにする前提としてその生業・生産の面から考えてみることにする。まず、農業については本遺跡や念仏林南遺跡の西方にのびる狭隘な谷地形を利用した谷水田経営が考えられる。江沼低地の自然堤防上に立地する集落のコメ作りが生産性がより高いであろう反面、洪水に遭う危険も高かったであろうと予想されるのに対して、ここでのそれは洪水の危険はきわめて稀であるものの排水性に乏しい泥田状態での稲作で収量は期待できない。ゆえに同じエヌマ

地域にありながら自然堤防周辺でのハイリスク・ハイリターン型の稲作と谷水田でのローリスク・ローリターン型の稲作の少なくとも2類型が設定できよう。ただ、後者は耕地面積・収量とも少なく地域のコメ作りに占めるウェイトが低かった点を根拠にその前者に対する補完的価値のすべてまでを過小評価できないと思われる。洪水の危険性や旱ばつによる被害から大きく免れることのできる谷水田からの収穫は生産性は低いながら壊滅的打撃を蒙りゼロとなる心配はきわめて小さく、ゆえに来春に播種する地域全体の種籾の確保には重要な役割を果たすことになる。のちに国家権力から抑圧を受け制度上その私的な形での執行権限を剝脱される在地豪族による出挙行為であるが、それ以前、その権限がいまだ在地豪族側にいまだ留保されつつその勧農機能の中心をなしていた段階を想定すれば、彼らによる領域経営、私富形成の継続の必要からも洪水や旱害などの農業被害に遭遇した翌年における場合も安定した種籾の確保は不可欠であり、そのためにも支配領域における種籾確保を主眼とした稲作のあり方も考慮されてもよいのではないかと思われてくる。すなわち筆者としては上記の2類型は在地首長の勧農機能の掌握下において収量をめざした稲作と経営基盤の安定化をめざした稲作として異なった意味付けがなされており、同じ稲作でも地域内分業的性格を帯びた使いわけがなされていたと評価する立場をとるのである。当時の農業経営の不安定さ、首長が一集落を超越した存在であった点を顧慮すれば、稲作も一集落（遺構からは建物群とその周囲の水田という景観が復原される場合もあるが）内での再生産も含めた自己完結性に拘泥する必要はないように感じられる。

とはいえ、耕地面積等から推して水田経営が本遺跡周辺のエヌマのヤタ小地域の農業生産の主体であったとは考えにくく、やはり洪積台地たる月津台地における畠作も念頭に置かねばならないだろう。月津台地はその地形的・水系的環境、つまり潟湖に囲まれた低平な台地であることから用水を通水させて開田することは現代の技術に待たねばならない。そこで古墳時代後期を中心とする時期におけるヤタ小地域での集落の数的・規模的拡大という現象の内因をなすべき耕地の新たな場所への展開を想定してみても、それは消去法的にも台地の開墾に求めざるを得ないといえる。ここで注意せねばならない点は、台地の開墾・耕起には鉄製農具が必須であることである。ところで月津台地の古墳のすべてが（広域）首長墓ではないことは言をまたない。ことに群在する小円墳にはヤタ小地域の有力家族墓が含まれる可能性が十分に考えられる。そこへのU字形刃先などの鉄製農具の一定量の副葬を指摘できれば興味深いが、残念ながらそれら墳丘の多くは未調査のまますでに失われている。群馬県下においては黒井峯遺跡をはじめ6世紀の火山灰に埋没した畠作の村の姿が生々しく掘り出されており［能登　1991］、そのような姿を月津台地にも投影することは容易だが、それを可能たらしめた新たに造墓層として加わった有力家族層への鉄器の普及について何ら検証できないことは惜しまれる。

続いて矢田野エジリ古墳［樫田　1992］出土の埴輪が提起する問題に移りたい。これらのなかには「飾り馬」と「騎乗する人」がセットをなしている点が注目される。ここで判断せねばならない点は、これが被葬者たる首長層ないしはその身近な従者の乗馬の風習を忠実に表現したものか、他地域より召致された工人が旧地で見た、あるいは製作した姿をここでも再現したものであるかとの点である。埴輪そのものの比較研究と周辺研究での馬具の副葬事例がこれを解く鍵とい

えようが、後者の観点からやや地域を異にするが能美古墳群の西山１・９号墳から轡・馬鐸・鈴杏葉などの馬具が出土している点［吉岡　1987］、越前北端の横山古墳群における椀貸山２号墳の馬具（鞍金具・杏葉・輪鐙など）［青木　1988］の事例からも、遅くとも６世紀前半頃までには江沼地域でも馬の飼育が行われていたとの推定は許されよう。その場合、低平な台地という地形的条件に加え後述する他の新技術との関連においてもヤタ小地域の月津台地周辺に牧の所在を求めることも可能かと思われる。なお、いわゆる洪積台地に属し、全く水利に恵まれぬ月津台地上での農耕が畑作中心であったことを想起すれば、前記の群馬県黒井峯遺跡で検出された牛小屋跡の例のごとくに有畜農業の可能性も一応は考慮されなければならないのかもしれない。

次に須恵器生産についてみれば、ヤタ小地域の東方、小松市二ツ梨地区における６世紀初頭を前後する時期における操業開始が指摘されている。まず、窯跡群を踏査した近間強氏は二ッ梨トノサマイケ窯跡から須恵質の埴輪とともに一部にＴＫ－47型式に遡り得る須恵器の採集を報告しており［近間　1988］、また南加賀古窯跡に出土資料を検討した望月精司氏は、ＴＫ－47型式については辰口町下開発茶臼山古墳群出土品等に明らかに南加賀産と考えられる資料が含まれている点、窯跡の発掘資料の検討では二ツ梨東山４号窯跡１次床を基準とするＭＴ－15型式新相の資料が現時点では最古例であり、この段階から消費遺跡においても普遍的に在地産の須恵器が出土するようになる傾向も併せて考究した［望月　1990］。

一方、窯業と同様に高熱を利用する産業としては製鉄をあげることができる。古墳に大量に副葬されることのある武具をはじめ、馬具や台地の開墾では必需品となる農具がこれによって供給されたことは言うまでもない。南加賀古窯跡が展開した小松市二ツ梨や那谷地区、さらには木場潟東岸にかけての一帯は濃密な製鉄遺跡の分布地帯として知られるが、残念ながら多くの場合その操業年代を明らかにし得ないのが実情である。ただ、当センターが1987年に発掘調査を実施した小松市蓮代寺地内の製鉄に伴う炭窯跡では、窯壁から須恵器杯蓋（内側に退化した“かえり”を伴う）を検出した窯体によって切られる炭窯が存在しており、この地域のおける製鉄が遅くとも７世紀後半のいずれかの時点には開始されていた状況が確実視されてきている（中島俊一氏のご教示による）。

以上の諸点をもう一度総括すれば、エヌマ地域では６世紀には地域全体では前方後円墳の築造が低調となる現象が看取されるにもかかわらず、ひとり領域北東辺の月津台地（広義の三湖台）ではその集中的な築造がみられるようになる。それとともに狭隘な谷部と低平な台地上を主な農業基盤とすると想定される、古墳群周辺の古代にヤタ郷に包摂される地域では集落数の増加あるいは集落そのものの大規模化の動向が生じてくる。エヌマの中核的穀倉地帯からやや離れたこの地域に配された集団は、土木技術をもって墳丘の築造にあたるほか、埴輪や横穴式石室などに対応した新たなイデオロギーをもって葬送儀礼に関与するなど、月津台地における首長層の造墓活動で一定の役割を果たしたものと理解されよう。須恵器生産開始期における埴輪の併焼もこの状況の一端を示しているように思える。加えて遅くとも６世紀前葉頃までにいち早くこの地域で須恵器生産が開始される点、操業開始時期不明ながら加賀における古代から中世にかけての一大製鉄地帯がヤタ郷域の一部を包摂するかたちで分布する点、また潟湖や谷状の低湿地に囲まれた低

平な台地上は馬を飼育する牧に適した地形的条件を兼ね備えている点などを勘案すれば、5世紀後半以降に日本へ渡来した新技術の複合体がエヌマの領域ではヤタ郷域で集中的に実践されたとの解釈も可能といえようか。この際、大聖寺川流域を中心とする西半部をも勢力下に置きエヌマ全域を席巻した観のある首長層にとっては、造墓活動のみならず新技術を担いつつ軍事やとりわけ非農業的生産部門で活躍したヤタ郷地域の集団は、その領域支配の武力的・経済的支配の基盤を構成するうえできわめて重要であり、労働編成のされ方においては首長層の直属的な部民としての色彩が濃かったのではなかろうかと推測される。

エヌマと似たような6世紀代の造墓活動と新技術との関連は越前平野北東部でもみられ、久保智康氏は横山古墳群と鎌谷窯跡（MT－15型式、円筒埴輪併焼）との関係を論じている［久保 1991］。また、周辺の細呂木を中心とする加越丘陵は操業開始年代が未確認ながら、製鉄遺跡の分布地帯として知られる。少なくとも越前平野の北半部を占めると考えられる横山古墳群の被葬者たる越前の大首長の支配領域の広さを念頭に置けば、盆地状をなす江沼低地は余りにも狭く、エヌマを統括する首長の越前に対する従属的地位がしのばれる。

この越前と近江を主体とする勢力に擁立されたヲホド王（継体天皇）をバックアップした勢力としては、文献史学上からも尾張連が指摘されている。尾張では6世紀代に至り大型の前方後円墳が古代東海道に沿いしかも伊勢湾海上交通の要衝である名古屋の熱田台地や庄内川右岸の春日井市味美古墳群などに収斂されていく傾向がみられる。とりわけ全長150mを測る断夫山古墳に代表される前者の地では、5世紀後半以降集落の形成の活発化が認められ、その被葬者の一族の戦略を窺わせるのように尾張型須恵器・尾張型埴輪・宇田型甕・製塩土器などの遺物によって知られる新技術の複合体がほぼ時を同じくして尾張を中心とする地域に定着させられていったことが赤塚次郎氏によって指摘されている［赤塚 1994］。久保智康氏も前記論文中で矢田野エジリ古墳や鎌谷窯跡など加賀・越前出土の埴輪と尾張のそれとの技術的なつながりを強調されている［久保 1991］。

以上のように6世紀初頭を中心とする時期、太平洋側では尾張を中心とする濃尾平野、日本海側では越前北部から南加賀にかけてをはじめとする地域でほぼ時を同じくして生じた諸事象をあくまでも連動したものとして評価すべきであり、畿内東方の北陸・東海のそれぞれの地域での動きはヲホド王擁立という歴史的ムーヴメントに結実していく原動力と考えられる。

ただ、ここで留意せねばならないのは、各領域の首長の系譜の問題であろう。6世紀代における前方後円墳を主体とする古墳群の築造場所の変更は、確かに地域史のなかでは一つの画期をなす大きな出来事であり、それと地域を統括する首長層の系譜を短絡的に結び付けて論ずることは容易といえる。しかしながら、越前北部の例では首長の葬地＝横山古墳群と首長の本拠地＝「高向」（『日本書紀』、坂井郡の旧高椋村にあてられる）の両者は明らかに異なることが指摘されており、エヌマにおいても6世紀代に前方後円墳が集中的に造営された古代のヤタ郷に比定される地区をもって、被葬者たる首長の本拠地とできないことは言をまたない。そこはあくまでも古墳造営や古墳祭祀に携った集団、半島系の新技術を駆使して非農業的部門も含めた諸生産の多くの分野をリードした集団との重層性のうえに理解すべき地域なのである。

第２章　調査に至る経緯と調査の経過

（１）　調査に至る経緯

小松市南郊、ＪＲ北陸本線の粟津駅の西側にはかつて念仏林（ねんぶつりん）と呼ばれる広大な雑木林が広がっていたが、大正の末年頃、川西財閥の経営による川西粟津牧場が開設され、森に囲まれた牧草地という景観が出現した。当時、川西財閥が航空機製造をめざしていたため、この地に飛行場を建設しようという意図をもっていたともいわれている。戦後、牧場は大型農機の導入などで県内農業における先進事例として注目されることもあったが、昭和の末年には公共利用の途に供するため、広大な牧場敷地が石川県及び小松市に譲渡される運びとなった。

牧場跡地内には小松高等学校地歴部の活動により発見・周知されるところとなった念仏林遺跡が所在しており、その現状変更に対する対応としては、市道符津四丁町線以南の遺跡本体部分を粟津運動公園整備事業に係り小松市教育委員会が、また同市道以北の遺跡北端部分を串町用地整備事業に係り石川県立埋蔵文化財センターが、それぞれ事前の試掘及び発掘調査を担当することになる。このうち、前者の経緯については（２）で述べる。

当センターが石川県土地開発公社の依頼を受けて串町用地（牧場跡地の一部）に存在が予想される念仏林遺跡の範囲確認を目的とした試掘が行ったのが1987年４月である。その結果に基き実施されたのが本書で報告する発掘調査で、調査期間は1989年５月から11月にわたり、調査面積は約4200㎡を測る。発掘調査の着手から終了までの経過は調査日誌の項で触れたい。

（２）　既応の調査

小松市教育委員会による本遺跡の試掘及び発掘調査については［樫田・望月・石田　1988］に詳しい。まず、1984年11月の試掘調査で「Ａ地区」とその南の「Ｂ地区」に縄文時代集落跡の分布することが判明し、さらにその南側に古墳時代の散布地「Ｃ地区」が広がることも明らかになった。

粟津運動公園整備事業が小松短期大学建設事業へと計画変更されるなかで、同教育委員会による発掘調査は、グランドとして盛土保存が決まった「Ｂ地区」を除き「Ａ地区」・「Ｃ地区」について1985年から87年にかけて実施された。調査面積は「Ａ地区」が約17700㎡、「Ｃ地区」が約2200㎡に及ぶ。これらの成果は1988年に刊行された前述の報告書ですでにまとめられている。これとは別にその後も1988年に市道拡幅に伴う発掘調査が「Ａ地区」の529㎡を対象として行われた。

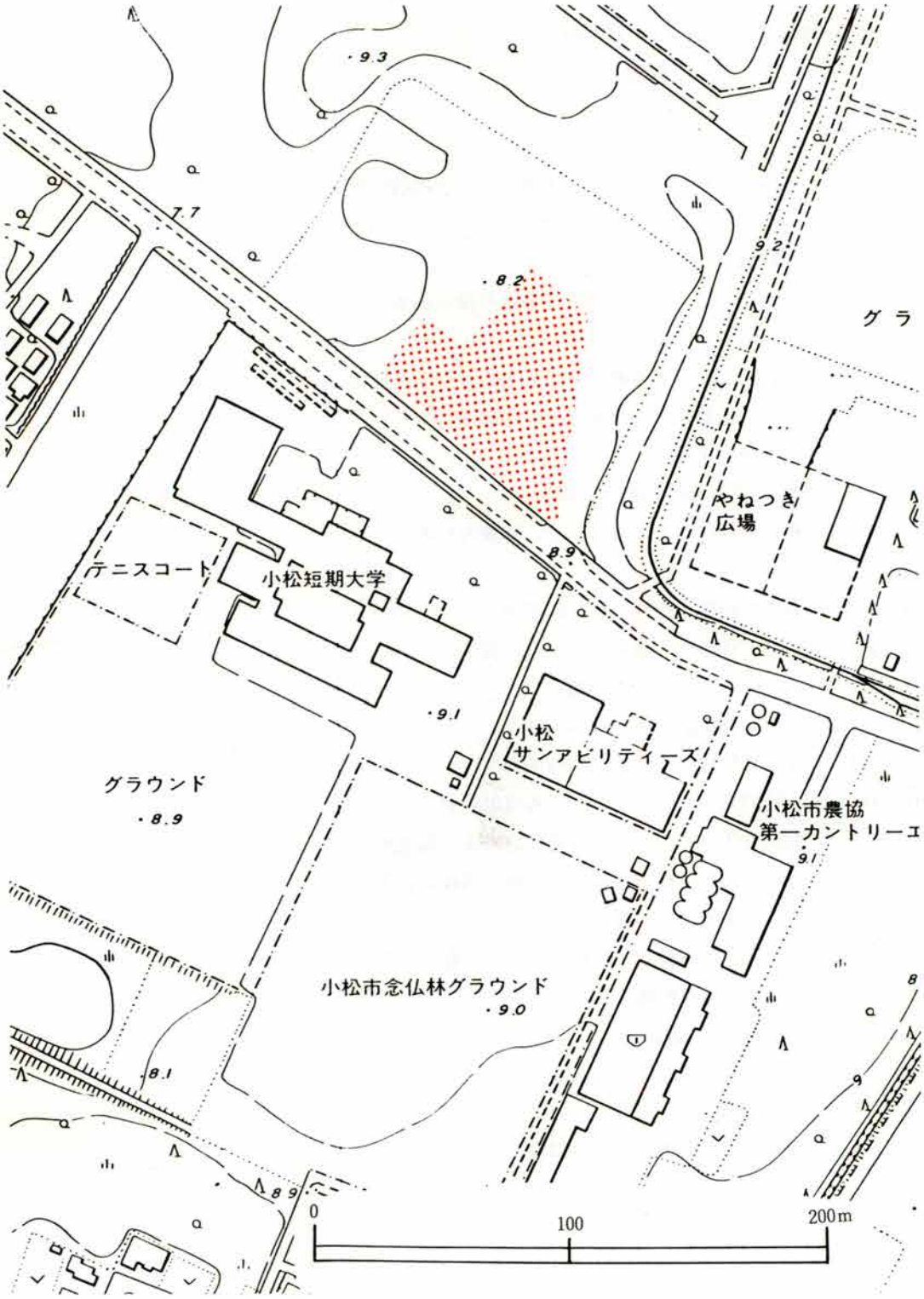
したがって、本書で報告する石川県立埋蔵文化財センターによる1989年の発掘調査は、「Ａ地区」の北端部を対象としたものである。

（３）　調査日誌（抄）

５月10日　　小松市シルバー人材センター、四丁町公民館、串町公民館、月津町公民館へ作業員募集のため赴く

５月12日　　調査範囲を設定する

5月15日	重機による表土除去を開始する（～5月19日）
5月17日	杭打ち開始（～5月23日）
	ベンチマーク設定。
5月22日	作業員出役開始
	北部より掘り下げを行う
5月23日	頼みの中村調査員入院、調査の先行きに暗い影
5月30日	ベルトコンベアー、発電機届く
6月21日	中村調査員、元気に復帰
7月末	梅雨明け、土の乾燥激しく散水の機会が多くなる
8月8日	K1号竪穴の調査に着手
8月17日	東西拡張部分の重機による表土除去（～8月18日）
8月29日	K1号遺物集中の遺物取り上げ開始
9月4日	橋本所長来跡
9月8日	K2号住居跡の調査を開始
9月中旬	秋の長雨のため調査捗らず、焦燥の日々
～10月前半	
9月14日	調査区南壁土層図の作成に着手
9月21日	K2号住居跡の遺物取り上げに着手
9月25日	K3号住居跡の調査を開始
10月2日	K3号住居跡の遺物取り上げ
10月3日	K3号住居跡の土層図を作成
10月18日	土地開発公社幹部一行による現場視察
10月26日	埋蔵文化財センター運営委員会による現地視察
	K2号住居跡柱穴・住居内土坑の調査に着手
10月27日	航空測量のための清掃を開始
11月1日	K3号住居跡柱穴・住居内土坑の調査に着手
11月6日	住居跡の写真撮影
11月8日	住居跡の平面図作成
11月10日	航空測量（快晴に恵まれる）
11月17日	機材撤収
11月21日	埋め戻しを開始（～11月22日）



第３図　念仏林遺跡1989年調査範囲（１／2,500）

第３章　遺構の配置と層序

（１）　調査区におけるグリッドの設定

当初、小松市教育委員会の調査区内で設定されたグリッドを今回の調査区へ延長しようと試みたが、基準杭が見当らず断念せざるを得なかった。そこで調査区のすぐ南側を走る市道の北辺を基準とし、それに平行する任意の東西ラインを設定、10m間隔で北からＡ～Ｈラインとした。これに対して南北ラインについては、遺跡の広がりが予想される範囲の中心を11ラインを決めてそれと10m間隔で平行するものを、西から11～17ラインとすることにした。これら南北ラインは真北に対して36°東へふれている。

以上の東西及び南北ラインに区画されて10mメッシュのグリッドが出来上がるが、各グリッドの呼称（区名）はその北西杭で直交するラインの名称に基くことにした。例えばグリッドの北西杭上でＡラインと11ラインが直交していれば、そのグリッドはＡ11区ということになる。

（２）　遺物の取り上げ方法

遺物の取り上げ方法については、小松市教育委員会にならい１点ごとに平面位置及びレベル高を記録することを基本とする全点ドット法で臨んだが、本書の報告では全くといっていい程にそのデータを分析することができなかった。反省点としたい。

（３）　遺構の配置

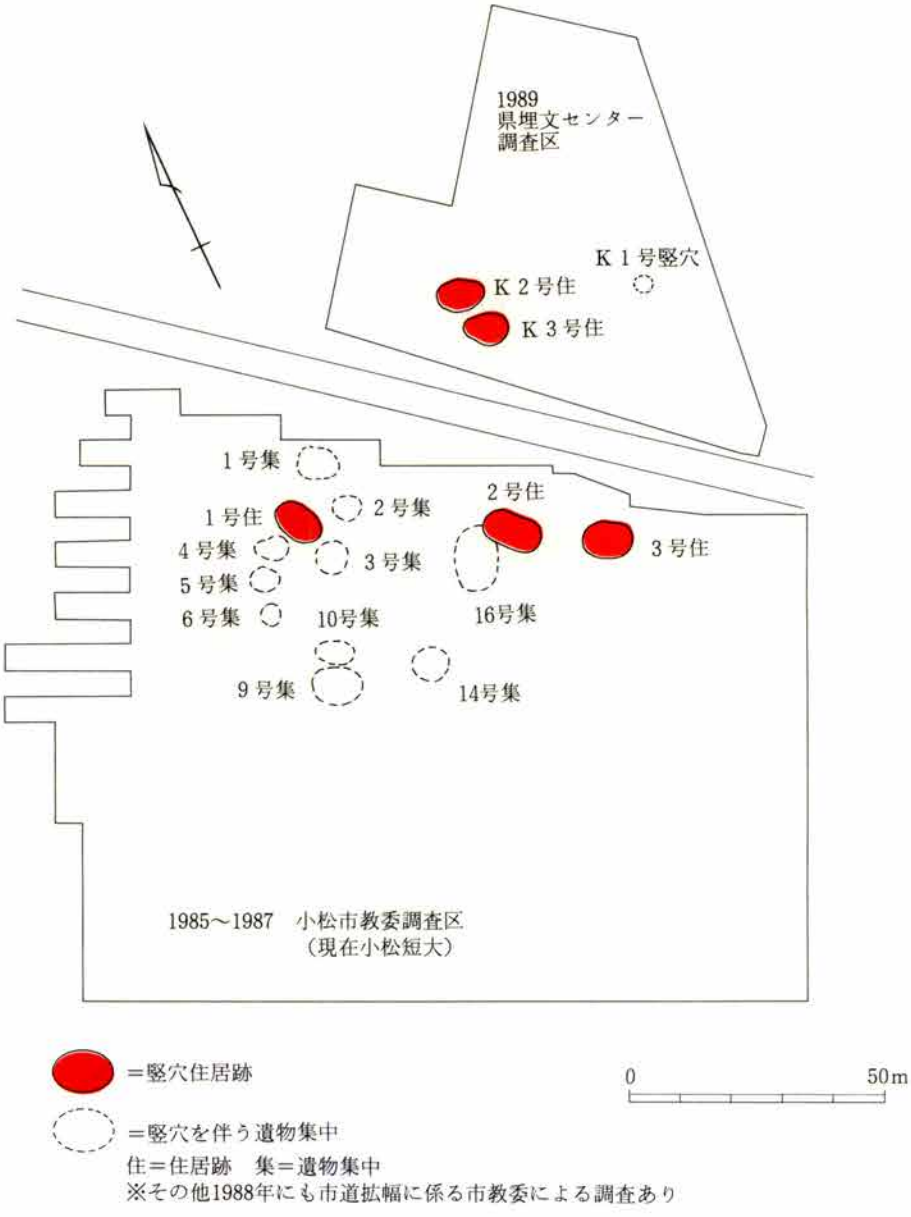
発掘調査は、試掘で遺物の散布が確認された約8000㎡のうちでも遺構の存在が明白な東半分（11ライン以東）から着手された。Ｅライン以北では遺物の散布はきわめて稀薄となり、縄文時代の遺構も皆無である。11ライン以西でも調査区を600㎡拡張してみたが、それよりさらに西側へ遺跡が広がることはない状況が窺えたので、トレンチを設定してその点を確認した。

検出された縄文時代の遺構はいずれも調査区南部中央を占めており、主軸方向がほぼ等しく位置的にも近接するＫ２号及びＫ３号竪穴住居跡、そこから北東30mに孤立するＫ１号竪穴の３基を数えることができる。遺構ではないが、当時の地表の付近と推定されるレベルに遺物が集中する地点が１箇所（Ｋ１号遺物集中）みられる。遺構名に冠した「Ｋ」は小松市教育委員会調査区内の遺構と混同を避けるため便宜上付したものである。

畑の区画と思える幅約40cmの溝、耕作土を覆土とする土坑、昭和初年に埋め戻されたと伝える幅約１mの溝については今回の報告では省略する。また、第５図には土坑状、ピット状の穴が多数みられるが、調査の結果、そのほとんどが木の根に由来することが判明した。

（４）　層序

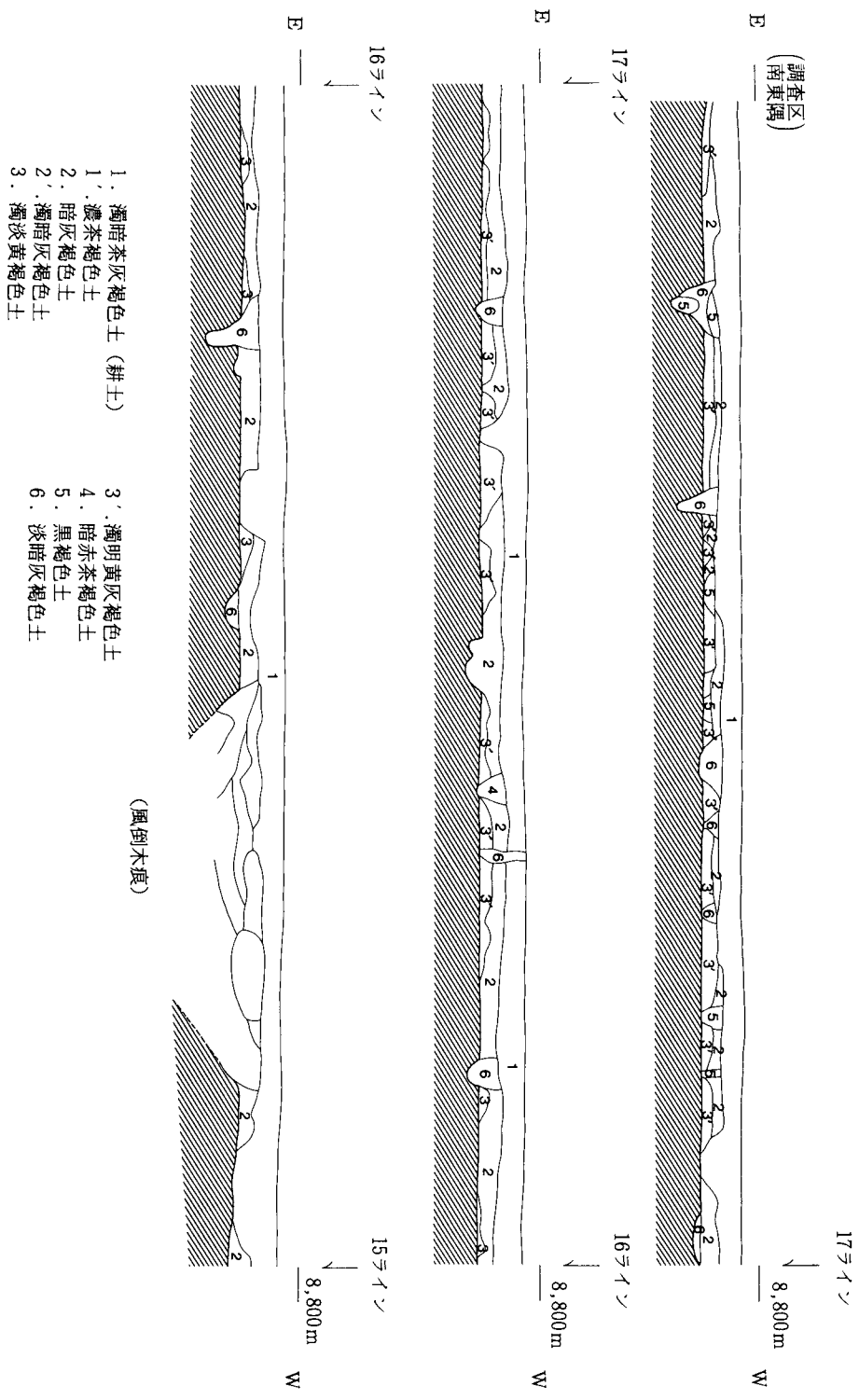
第６図に調査区南壁で記録した土層断面図を30m分掲載した。基本的には地表に厚さ約20cmの旧耕土（濁暗茶灰褐色土）がみられ、その下15cm程の暗灰褐色土になる。そこから地山（いわゆる赤土）に移行する場合もあれば、その間に漸移層として薄い濁明黄褐色土が介在する場合もある。全般に耕作や木の根による影響が顕しい。



第４図　既往の調査における主な検出遺構（１／1,500）

（アミカケ部分はK１号遺物集中）

第５図　調査区全体図（１／400）



第６図　調査区南壁土層図（１／60）

第４章　遺構と遺物

第１節　縄文時代の遺構と遺物

１．竪穴・竪穴住居跡

Ｋ１号竪穴

遺構（第７図）　Ｅ15区西南部に位置し、一部Ｅ14区の東南部に及ぶ。南北に約3.2m、東西に約3.4mを測り、平面形はやや不整な隅丸正方形を呈する。検出面から深さは最大で10cm程度と浅く、壁についても他の竪穴住居跡と同様に立ち上がりが緩い。

柱穴と考えられるピット、貯蔵穴と考えられる土坑、地床炉と考えられる焼土などはいずれも検出されていない。したがってこれを「住居跡」と断定するには問題があるかもしれない。慎重を期してたんに「竪穴」とすべき性格の遺構といえる。かつて念仏林遺跡を調査された望月精司氏もこの種のものを「竪穴状遺構を伴う遺物集中」として扱われている［樫田・望月・石田1988］。本稿においては竪穴を有するものを一括して連番で通し、そのうち柱穴や貯蔵穴とみられる土坑等を検出でいたものについては竪穴住居跡とした。これは遺物が集中的に出土した点よりもむしろ竪穴（状遺構）の存在を重視する立場に立つためである。

遺物（第８図）　まず、１～３とした土器については、いずれも縄文を施すものである。１の口縁部は内屈ぎみに立ち上がる。

４～10は石器である。４は両端部に敲打痕を有する敲石、５・６は打欠石錘、10は粗粒砂岩製の砥石で、７・８は打欠石錘の素材礫と考えられる。残る９については、７・８に比して厚手であり、性格不詳である。これらの属性については後に掲げる属性表に譲る。

以上の出土状況については、５が床面から２cm上で検出された以外はいずれも床面から５～10cm浮いた状態で出土している。

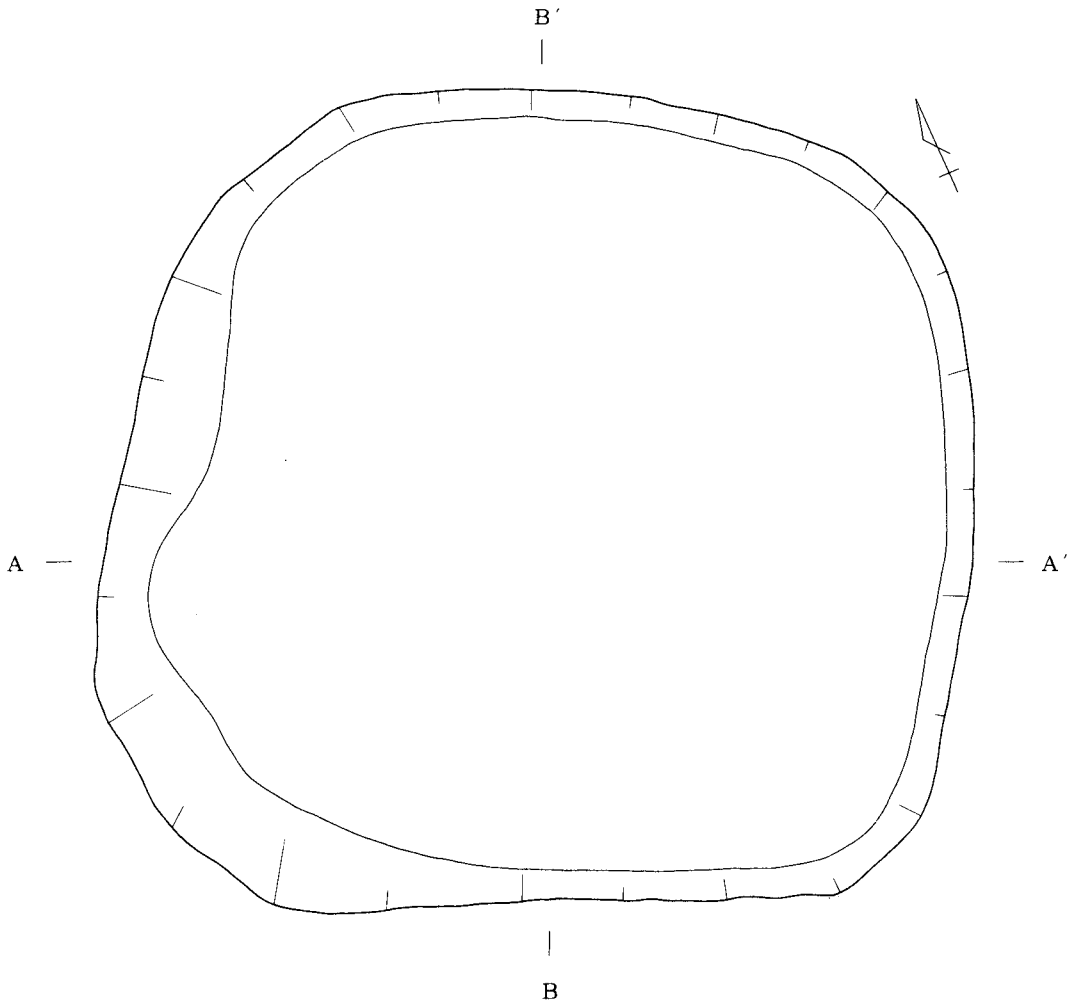
図化しなかったものには、主として縄文・無文の土器小片20点、流紋岩製の剥片12点（総重量449ｇ）が含まれる。剥片には自然面を大きく残すものが４点含まれる。

Ｋ２号竪穴住居跡

遺構（第９～11図）　Ｆ11区の南部を占地し、一部Ｇ11区北端部に及ぶ。長さ約9.15m、幅6.5mの大型の楕円形状の呈し、主軸はＮ－115°－Ｅとなる。以下やや長くなるので項目別に記す。

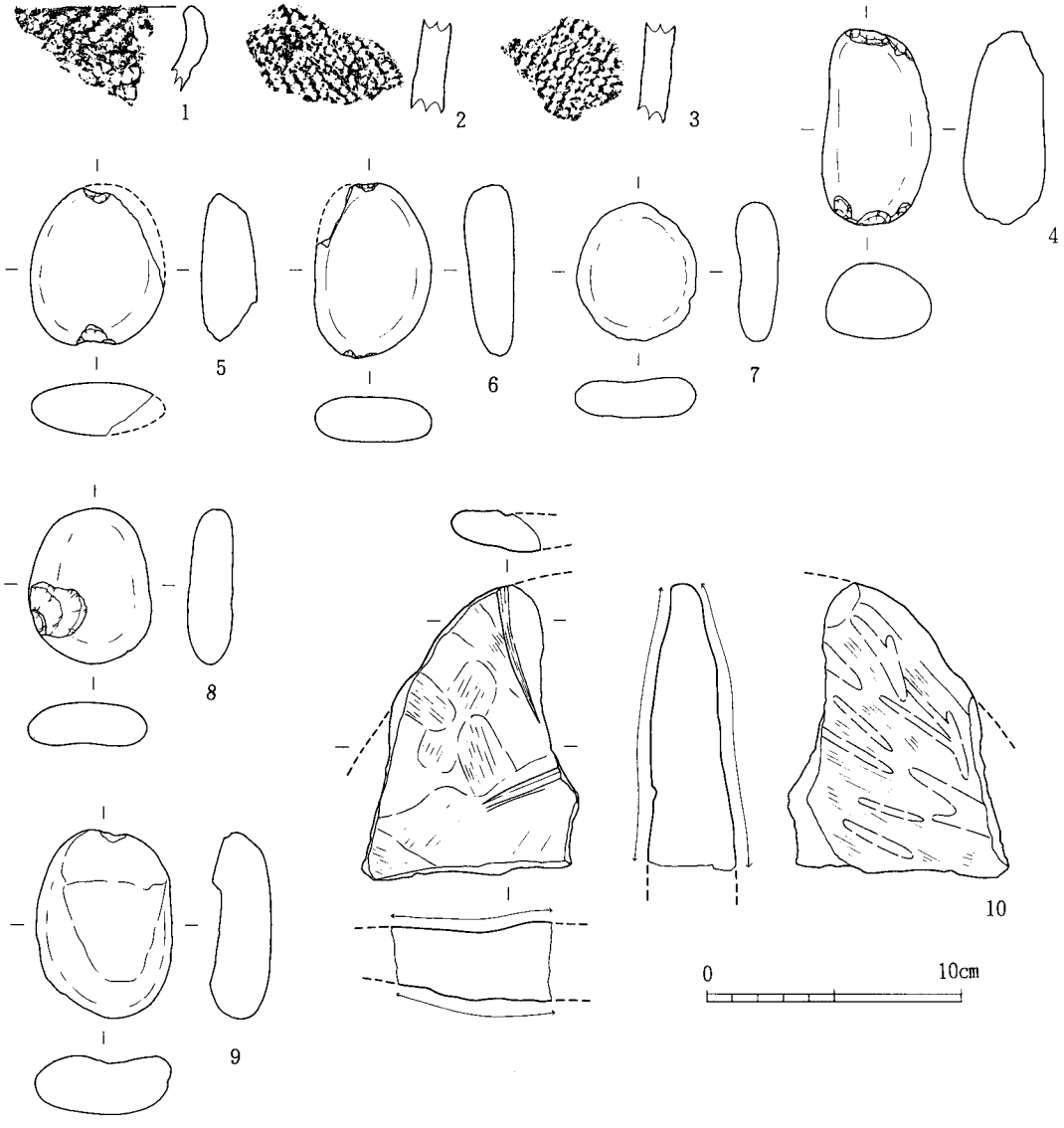
㋑柱穴

これに該当すると思われるピットについては、第９図にてスクリーントーンで表示してある。Ｐ１（深さ42cm、以下数値のみ記す）とＰ６（16cm）を結ぶラインを主軸（概ね建物の棟のラインに相当か）とし、北側にＰ７（64cm）・Ｐ８（60cm）・Ｐ９（39cm）・Ｐ10（53cm）・Ｐ11（41cm）の５基、南側にＰ２（36cm）・Ｐ３（30cm）・Ｐ４（34cm）・Ｐ５（37cm）の４基を配するものと考えられる。Ｐ３とＰ４の中間にももう１基存在した可能性が高いが、ちょうどその



1．暗灰褐色土
2．黒灰褐色土（木の根）
3．濁黄褐色土（地山質多い）
4．暗黄灰褐色土（地山質多い）

第７図　Ｋ１号竪穴実測図（１／30）



第８図　Ｋ１号竪穴出土資料（１／３）

付近が風倒木痕（一点破線で範囲を示した）のなかに含まれるため、検出することはできなかった。Ｐ１とＰ６を結ぶ中間に住居内土坑が所在し、その付近にも柱穴が設けられていた可能性が想定できなくもない。ただし、調査の過程では確証を得るには至らなかった。その他、土坑西端の小ピットの性格が気に懸るところではある。

㋺住居内土坑

柱穴に囲まれた範囲の東寄りに１基が確認されている。最深部の床面からの深さが約60cm、東側小テラスが同じく約20cm、北側テラスが15～30cm、最深部の西南に続く小テラスが同じく約35cmを測る。このように３面のテラスを備えた複雑な形状を呈する点、土坑の主軸方向が住居跡そのもののそれよりも10°近くズレている点から考えて掘り直しによって造り替えられている可能性も十分に考えられるが、調査によりそれを具体的に検証することはできなかった。

なお、これの長径は約1.3m、短径は0.8m程度を測り、平面形は強いていえば不整な楕円形ということになる。覆土中からは浅鉢11をはじめとする遺物が出土しているが、それについては後述する。

㋩覆土

住居跡の土層断面については、第10図に一括した。調査時の所見では概ね住居廃絶後順次埋積していったものと考えられる。住居跡下層の床面付近の土層と住居内土坑の最上層の土層とをうまく整合させて理解できなかった点を反省したい。

㋥炉跡

焼土面などこれに比定できるものは検出されなかった。

㋭家屋構造想像図

これについては第11図として掲載しておいた。宮本長次郎氏の見解［宮本　1988］に基づき、氏のいう「伏屋Ｂ式」に類するものとして、大学で建築学を専攻した端猛君に作図して頂いている。宮本氏の「伏屋Ｂ式」という概念には「土葺き」という点が含まれるが、本遺跡においては「土葺き」が「草葺き」かなど屋根材が何であったかを判断する材料には恵まれておらず、そのことについては保留したい。

まず、Ｐ１とＰ６が棟持ち柱と推定されるが、棟通りが９ｍ以上と長いため、住居内土坑の西端のピットが棟を支える柱の柱穴である可能性が想定されるが、そうである場合、Ｐ１とＰ６のちょうど中間地点を占めることになる。

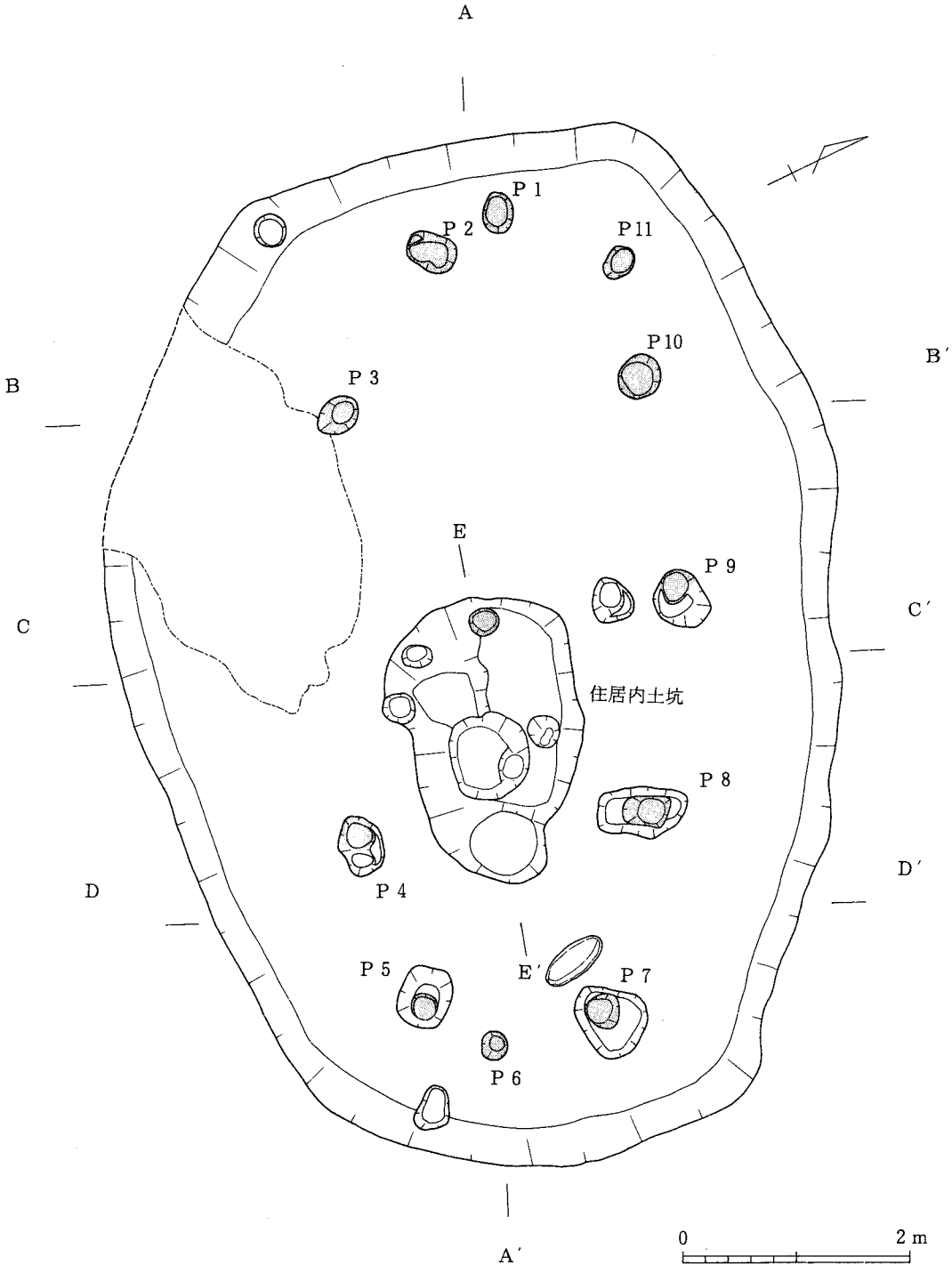
主柱穴と考えるものは、棟通りの北側ではＰ７～Ｐ11の５基、南側ではＰ２～Ｐ５の４基であるが、Ｐ３とＰ４の中間にもう１基存在した可能性が高く、恐らく10本主柱になろうということは先述のとおりである。

遺物（第12～21図）　まず出土状況について、次に個々の遺物について説明を加えていきたい。

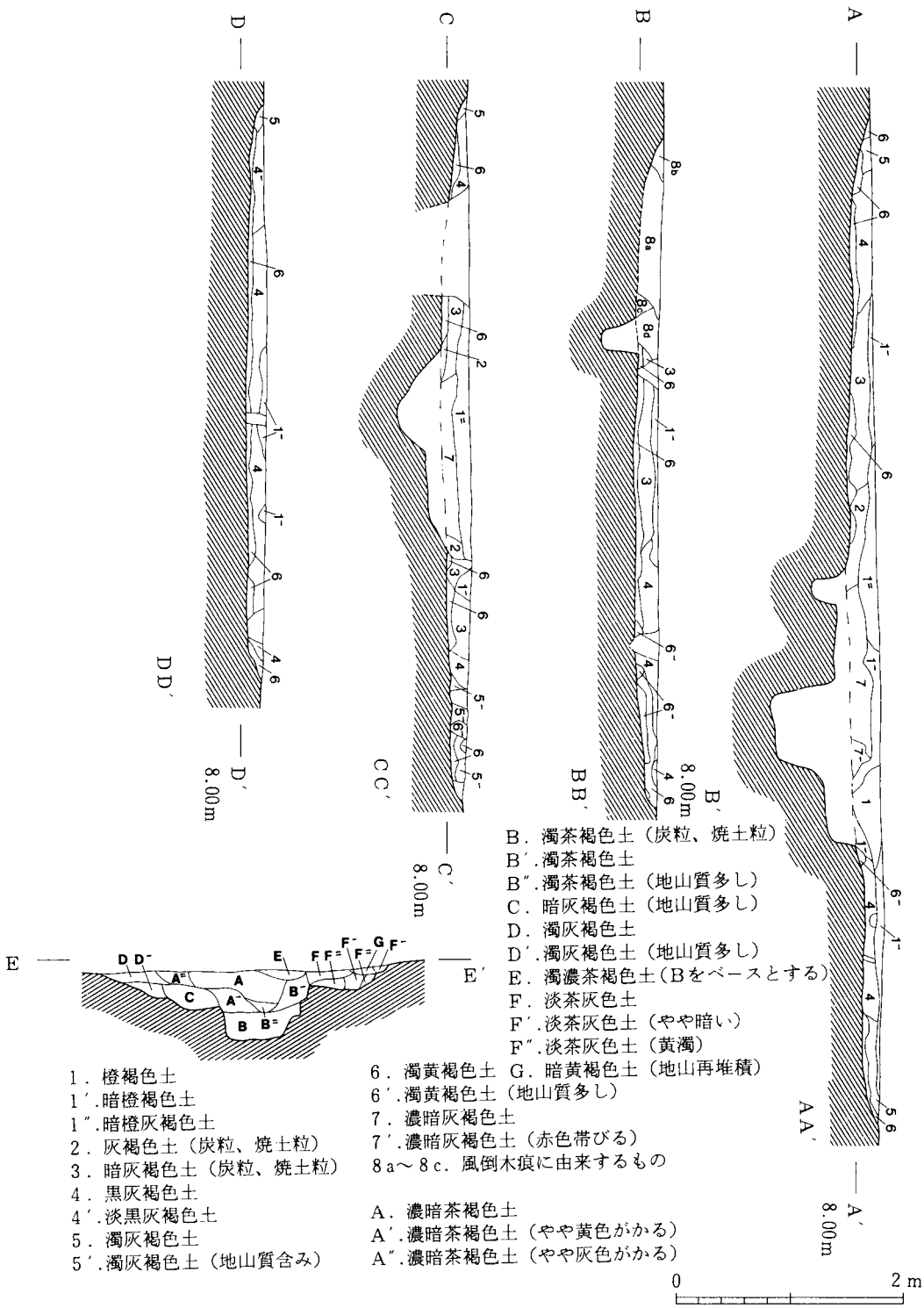
㋑遺物出土状況

主たる遺物の竪穴内における出土位置は第12図に示した。概して床面に遺されたままの状態と判断される資料は少なく、大半が住居廃絶後の窪みへの廃棄行為に伴うと推定される。

まず土器については、ほぼ床面直上から出土したとすることができるのは、図化したものでは



第９図　Ｋ２号竪穴住居跡平面図（１／60）



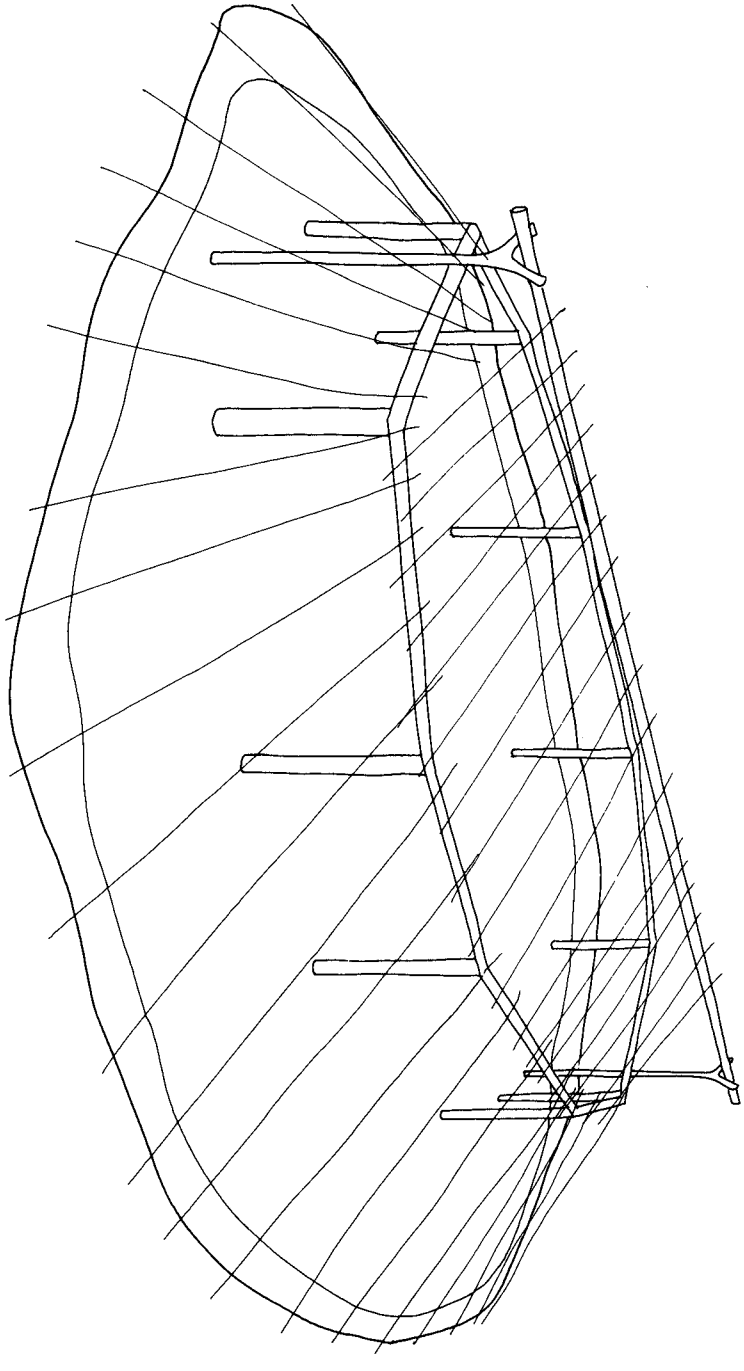
B．濁茶褐色土（炭粒、焼土粒）
B′.濁茶褐色土
B″.濁茶褐色土（地山質多し）
C．暗灰褐色土（地山質多し）
D．濁灰褐色土
D′.濁灰褐色土（地山質多し）
E．濁濃茶褐色土（Bをベースとする）
F．淡茶灰色土
F′.淡茶灰色土（やや暗い）
F″.淡茶灰色土（黄濁）
G．暗黄褐色土（地山再堆積）

1．橙褐色土
1′.暗橙褐色土
1″.暗橙灰褐色土
2．灰褐色土（炭粒、焼土粒）
3．暗灰褐色土（炭粒、焼土粒）
4．黒灰褐色土
4′.淡黒灰褐色土
5．濁灰褐色土
5′.濁灰褐色土（地山質含み）

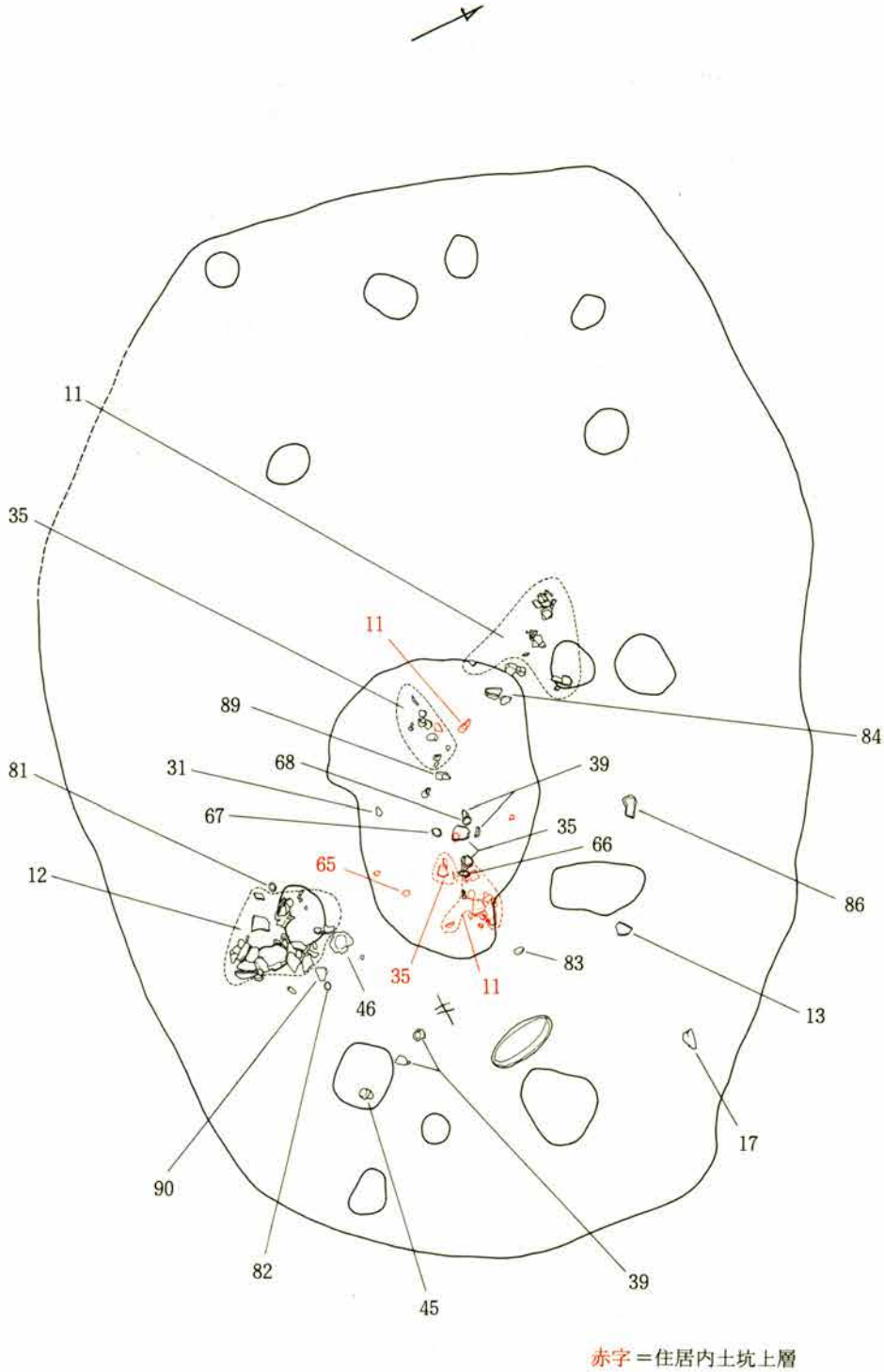
6．濁黄褐色土
6′.濁黄褐色土（地山質多し）
7．濃暗灰褐色土
7′.濃暗灰褐色土（赤色帯びる）
8a～8c．風倒木痕に由来するもの

A．濃暗茶褐色土
A′.濃暗茶褐色土（やや黄色がかる）
A″.濃暗茶褐色土（やや灰色がかる）

第10図　K２号竪穴住居跡土層図（１／60）



第11図　Ｋ２号竪穴住居跡家屋構造想像図



第12図　K 2 号竪穴住居跡遺物出土状況図（1／60）

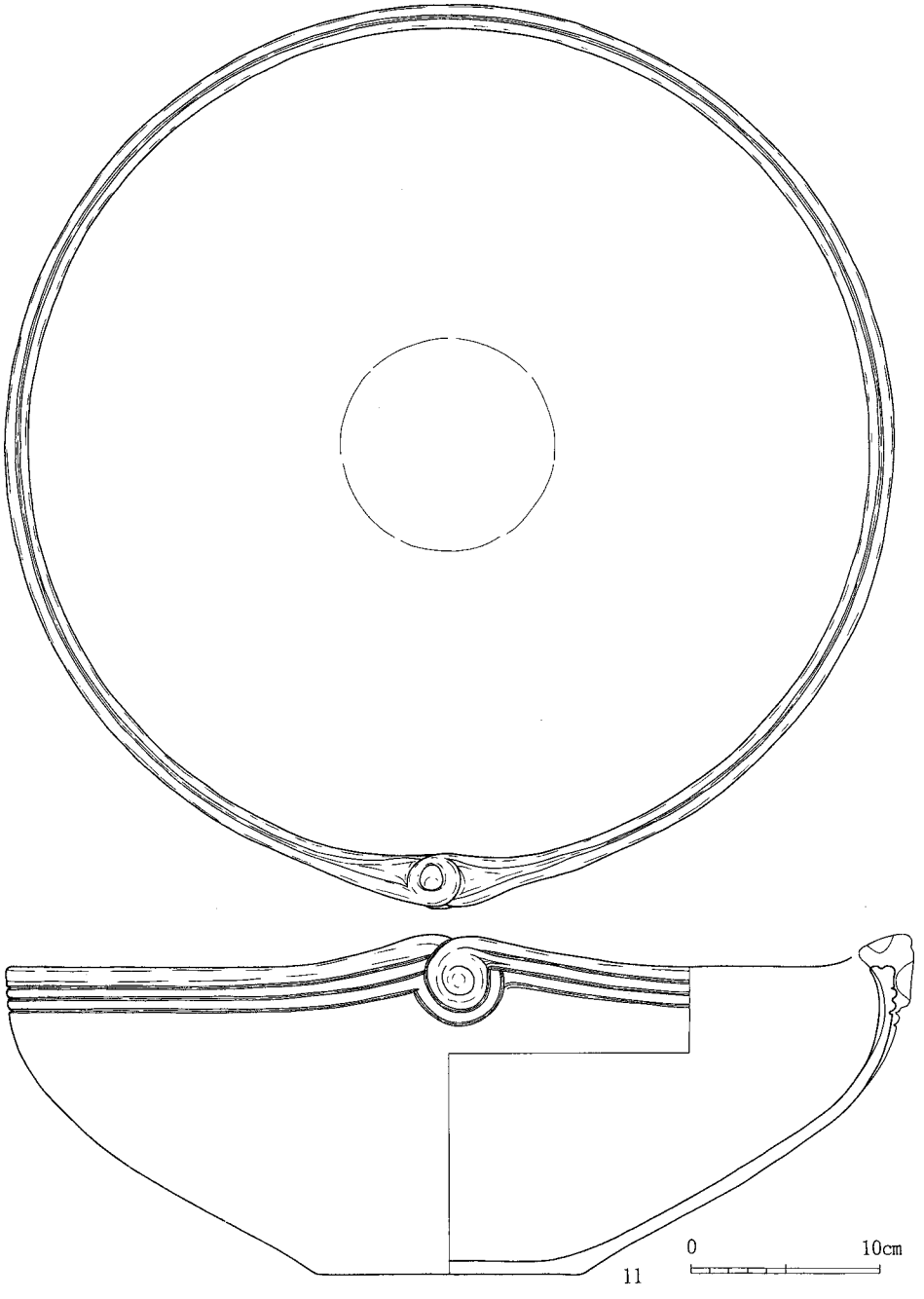
深鉢口縁部40及び同底部46に限られる。住居内土坑から出土したものには11・31・35・39が知られており、このうち11は覆土上層、31・39は同下層を中心に、また35は両者にわたって検出されている。その他、14・45がそれぞれ柱穴Ｐ９・Ｐ５の覆土中より掘り出されている。全体的な傾向としては、床面より10cm以上浮いた状態で検出された資料が大半で、柱穴Ｐ４の上位で床面から５～15cm浮いた位置から浅鉢12がまとまった状態で出土した点も考え併せるならば、やはり先述の見解に至る。

次の石器については、剝片石器のほとんどが覆土上層が検出されたものによって占められており、床面付近からの出土はみられない。床面付近から出土したものとしては石錘74・75・78・80を数えるに過ぎない。床面資料ではないが浅鉢12がまとまって出土した地点の直下、床面から５cm程度浮いたレベルから石錘素材と思われる礫81・82、砥石90、石核91・92が集中して検出されたことは注意されよう。また、住居内土坑の覆土中からは、石錘64～68、その素材と思われる礫83、砥石89などが出土したほか、柱穴Ｐ９から南に約60cmを測るピット内からは砥石85が出土している。

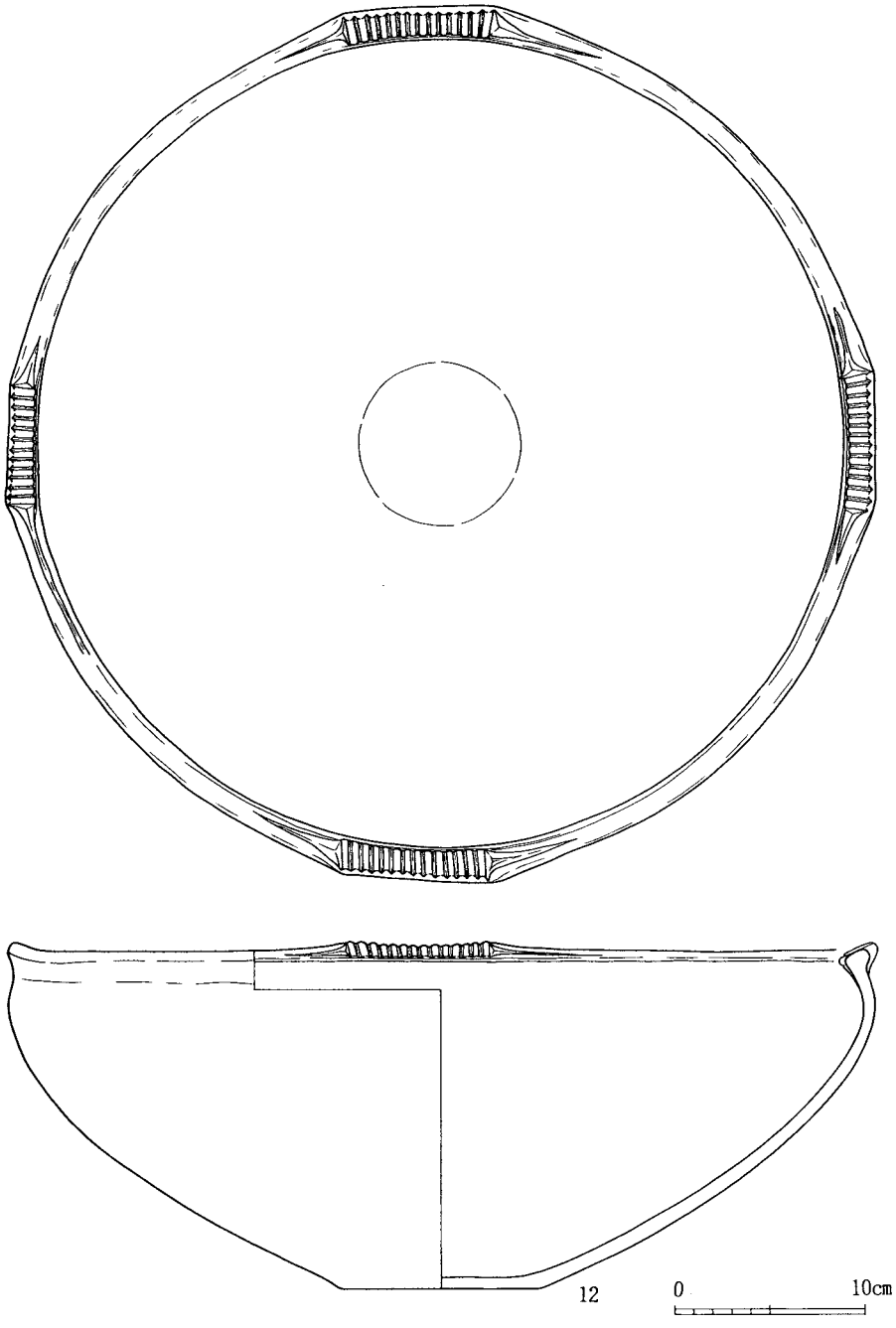
㋺土器

11～18は浅鉢で、なかでも11・12は全形を知り得る完好品である。口縁が内湾ぎみに立ち上がる11は、口径約48cm、底径14.6cm、器高16.7cmを測り、口辺部外面には２条の半隆起線が廻る。しかし、双頭の波頂部を伴う１箇所においては、口唇部から続く反時計回りで巻き込みの弱い円環状の渦巻文が貼付されており、下段の半隆起線はそれを迂回するためＵ字状となる。この波頂部については、遺存状態からみても１箇所として間違いない。また、口縁端部には幅１cm強の面がみられ、その中央を１条の沈線が走る。これに関しても幅広となる波頂部上面において、外側から反時計回りに巻き込む円環状の浮文が施され、それを両端から取り囲むようにして先述の沈線が三叉状に拡がっている。概して橙褐色系のやや明るい色調を呈しており、内面は丁寧なヨコナデによって調整される。続く12もやはり大型の浅鉢であるが、口径46.0cm、底径10.5cm、器高18.5cmと11に比してやや小ぶりである。器形は口縁部に向けて一旦内湾したのちに短く外反する部分が伴う。口縁部には低平な山形の突起２個を１単位するものが４単位付属する。文様は口縁内面の内傾する面のそれも突起部付近に限られる。まず、セットをなす山形の突起間に長さ１cm余りの短い半隆起線を12～14条縦走させ、それを左右から挟むように三叉状の彫去文を配している。全体に黄橙褐色を呈し、器面の調整はヨコナデによる。口径が45cm前後と推定される13では口縁部外面に２条の半隆線、口縁端面に１条の沈線がみられ、前者の下端には工具のカドを用いたと思える連続的な三角形状の刺突が施されている。遺存部が少なく他の文様については知る由もないが、内湾する口縁部の内面から口縁端部にかけて黒漆状のものを塗布し、その上から赤彩している点は注目に値する。14は口縁上端の文様において11と類似するが、突起部が低平な入字状となること、反時計回りの巻き込みの弱い渦巻き状の貼付文（すでに剝落）の内側において右側の２条の半隆起線の先端が入組状となることにおいて相違する。15・16は口縁部の小片で、後者には三角形彫去による文様もみられる。残る17・18は同一個体の体部及び底部である。

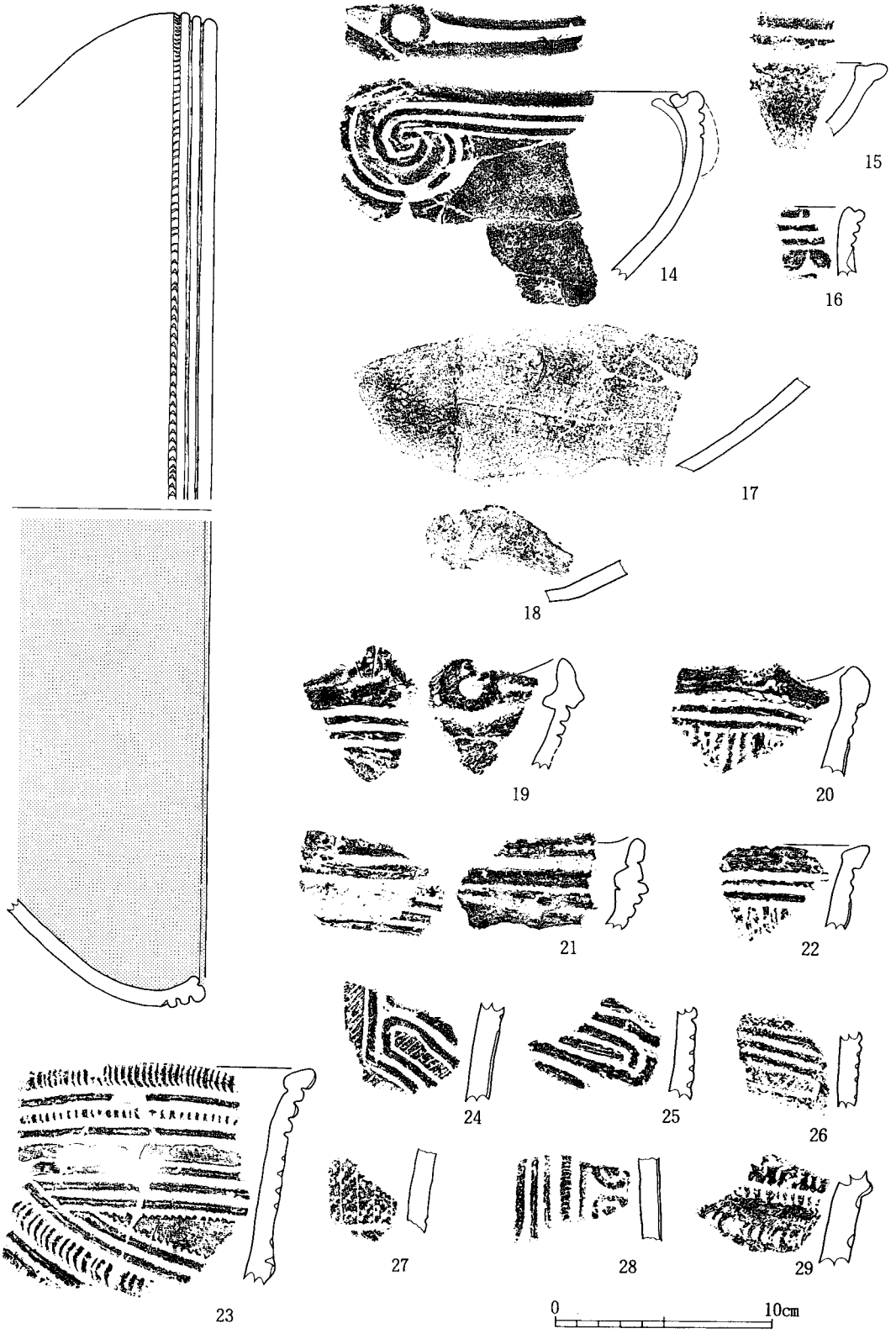
19～34は有文の深鉢。19～22は口縁部の小片で、19・20に小さな入字状突起が伴う。前者の内



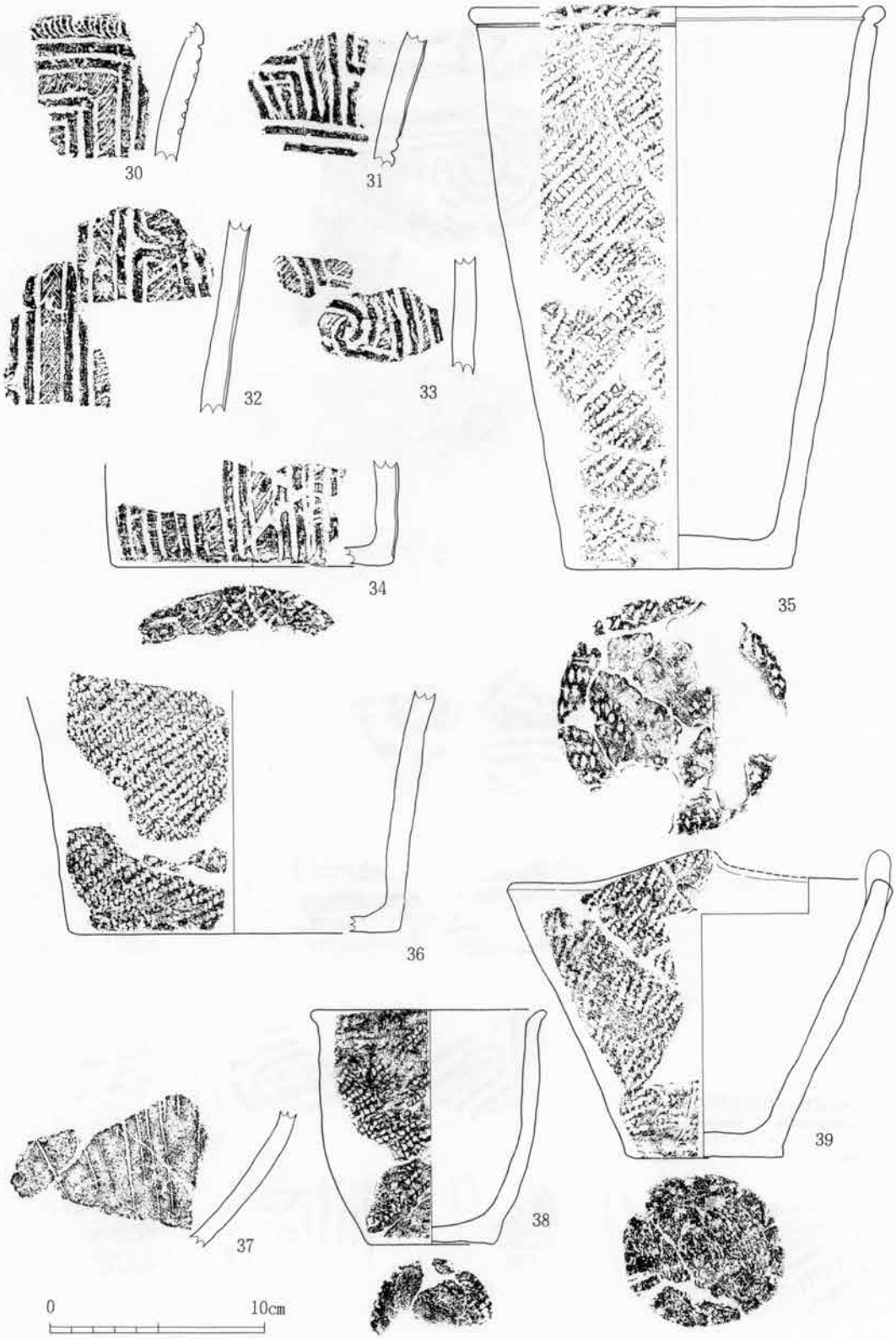
第13図　Ｋ２号竪穴住居跡出土資料１（１／４）



第14図　Ｋ２号竪穴住居跡出土資料２（１／４）



第15図　Ｋ２号竪穴住居跡出土資料３（１／３）



第16図　K２号竪穴住居跡出土資料４（１／３）

面には反時計回りの巻き込みの弱い渦巻状のものが貼付によって表現されている。後者の頂部にも貼付文がみられたようだが、すでに失われている。また、21の左側も突起へと続く可能性が高い。22は口縁直下に半隆起線２条が横走する点で20と共通するが、胎土・色調から考えて別個体とすべきであろう。下端には縄文地文上に粗雑なタッチの蓮華状文が描出される。23は口辺部を中心とする大きな破片である。上から爪形文と半隆起線を交互に配し、著しく幅狭な無文帯を挟んで３条の半隆起線が横走し、それより下位は胴部となる。口辺部と胴部を結ぶようにして爪形文を施した基隆帯が斜行する。これによって口辺部の文様はそのヨコ方向の構成を崩すことはないが、胴部ではこれに併走する少なくとも２条の半隆起線がみられ、その結果生じた三角形の無文部縁辺には楔形刻目文が伴う。24～29は頸部～胴部片。このうち24～26は半隆起線間の残部を斜行沈線で充塡するもの、27は縄文地文上に縦格子目状の文様がみられるものである。胴部片28では半隆起線のほかに爪形文を施した隆帯が伴い、同一個体片には刻目文を施した縦位無文帯も確認できる。その他、29では隆帯上やその付け根などで幅広の爪形文が施される。残る30～34は同一個体で、全体を復原できなかったため個別に図示した。31の下端にみられる横位の半隆起線が胴部とを区画するものであろう。まず口辺部付近では直線的な半隆起線及びその間を斜行する平行沈線によって文様が構成され、30ではその上部に爪形文もみられる。32・33は胴部文様の一部で、前者では半隆起線によるＢ字文を描出し、その間を斜行沈線や綾杉文風の斜格子目文で充塡している。これに対して後者では曲線的な半隆起線により入組文を表現する。底径約13cmに復原される34の外底面にはスダレ状圧痕が残る。

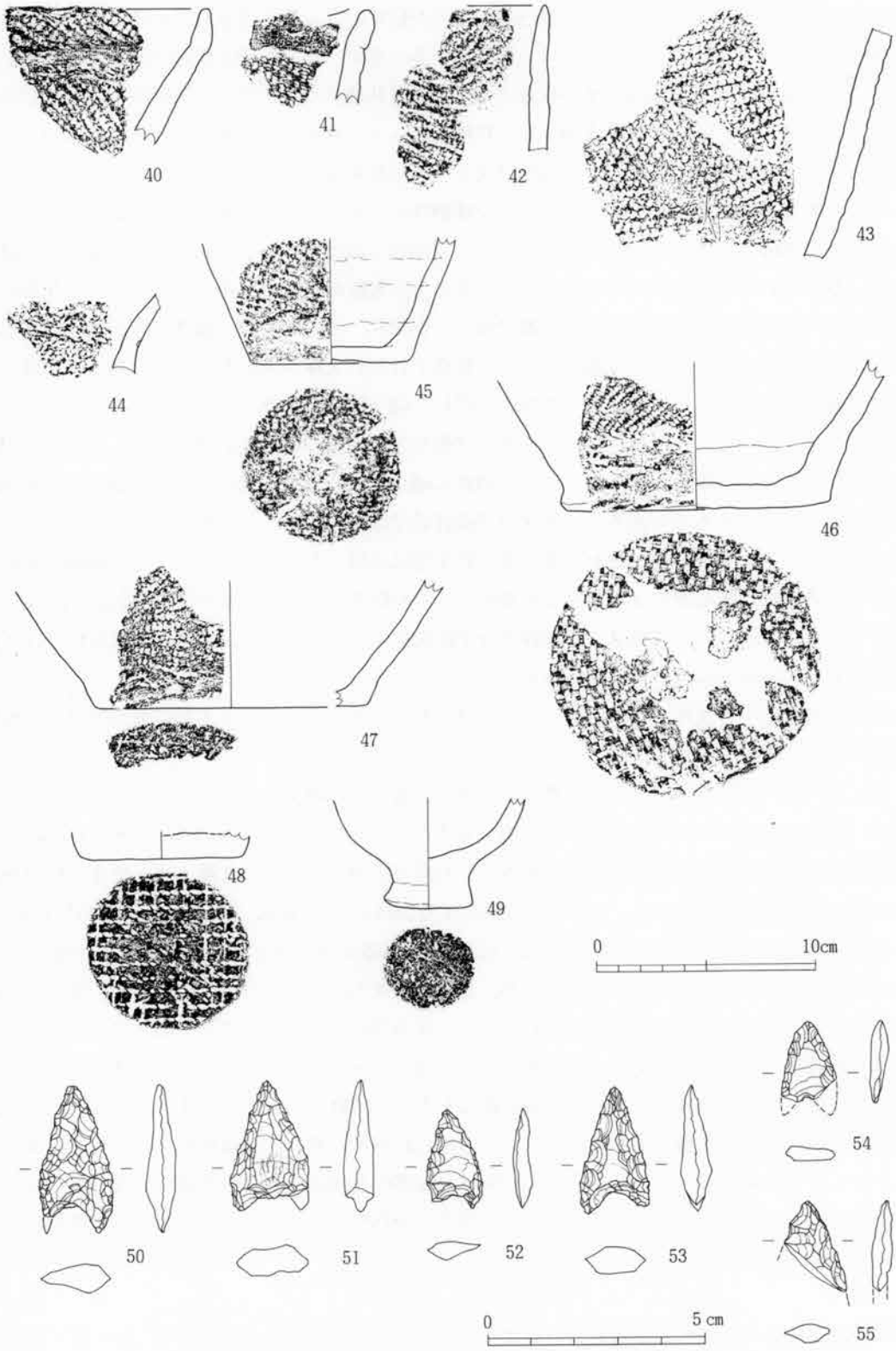
外面に縦位の平行沈線を有する37については、かなり開きぎみとなるようで他の深鉢とは器形を異にする印象を受ける。

35・36、38～47は深鉢のうちでも縄文のみ或いは遺存部に縄文しか確認できないものである。まず、全形が明らかな35・38・39から説明を加えたい。円筒器形で口径19.1cm、底径10.6cm、器高25.6cmを測る35は、口縁端部が丸く肥厚しその直下に内外面ともに沈線１状が廻る。底部外面には網代状圧痕が観察される。口縁が短く外反する38は口径10.8cm、底径6.0cm、器高11.1cm、また単純に外反する器形の39は口径16.4cm、底径7.5cm、器高14.5cmを測り、いずれも小型品である。後者では入字状突起が１頭遺存するが、元来の数は不詳。40～42は口縁部片で、40では口縁の屈曲、41では肥厚した無文帯がみられ、42の口縁端部は先細り状になる。43・44は胴部。後者では口縁部との境には押圧縄文が１条横走する。残る45～47はいずれも底部で、46の底部外面では明瞭な網代状圧痕が観察できる。上記の縄文を有する深鉢については、すべて橙褐色系の色調を呈し、胎土中に焼土塊を含むものによって占められるのに対し、36は砂粒を多く含み底部外面もナデによって調整されている。恐らくは36は口縁部に文様帯を有する深鉢の底部であろう。

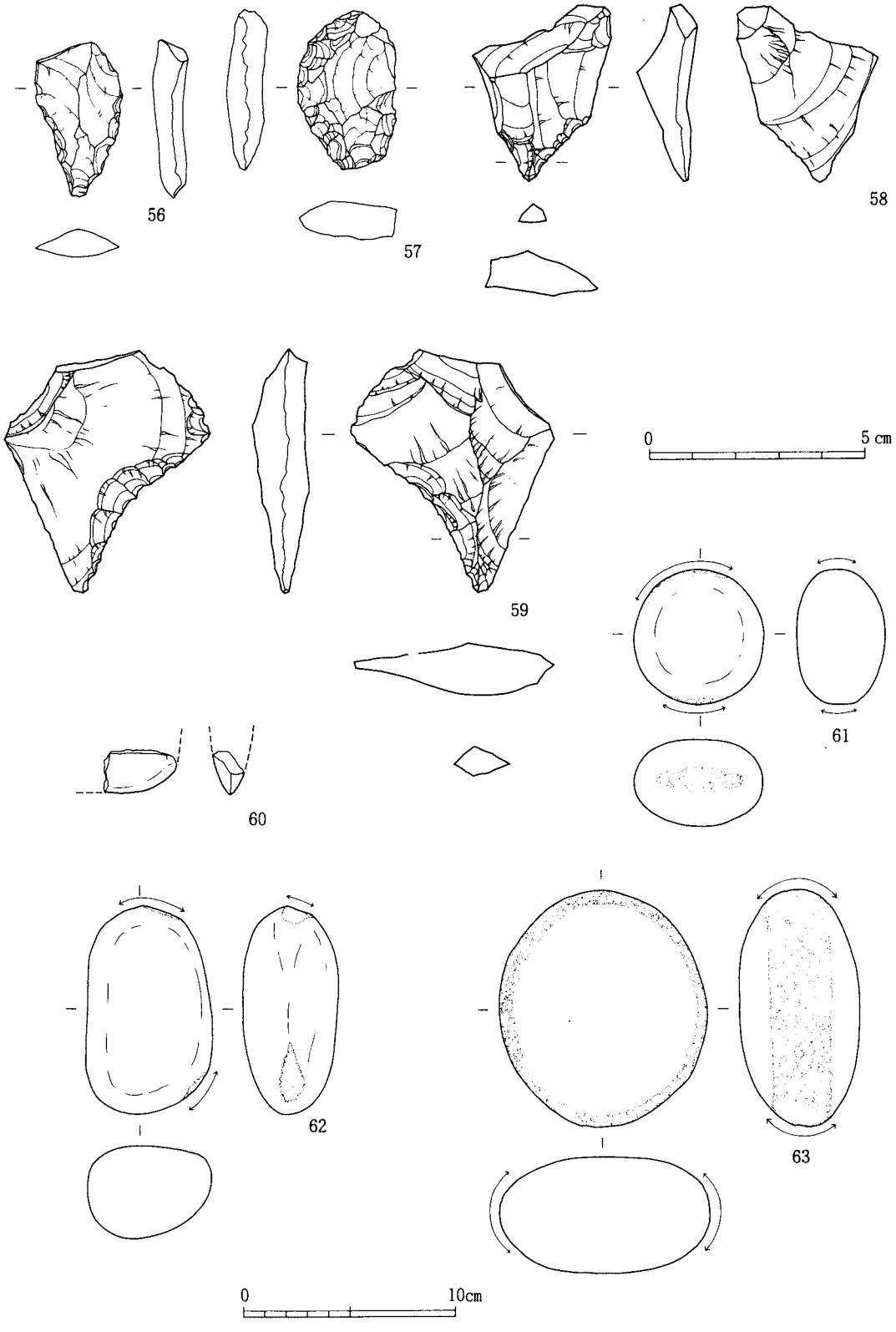
これら以外にも、外底面にスダレ状圧痕が残る底部48や小型で脚台を有する特異な器形の49などが出土している。

㈥石器

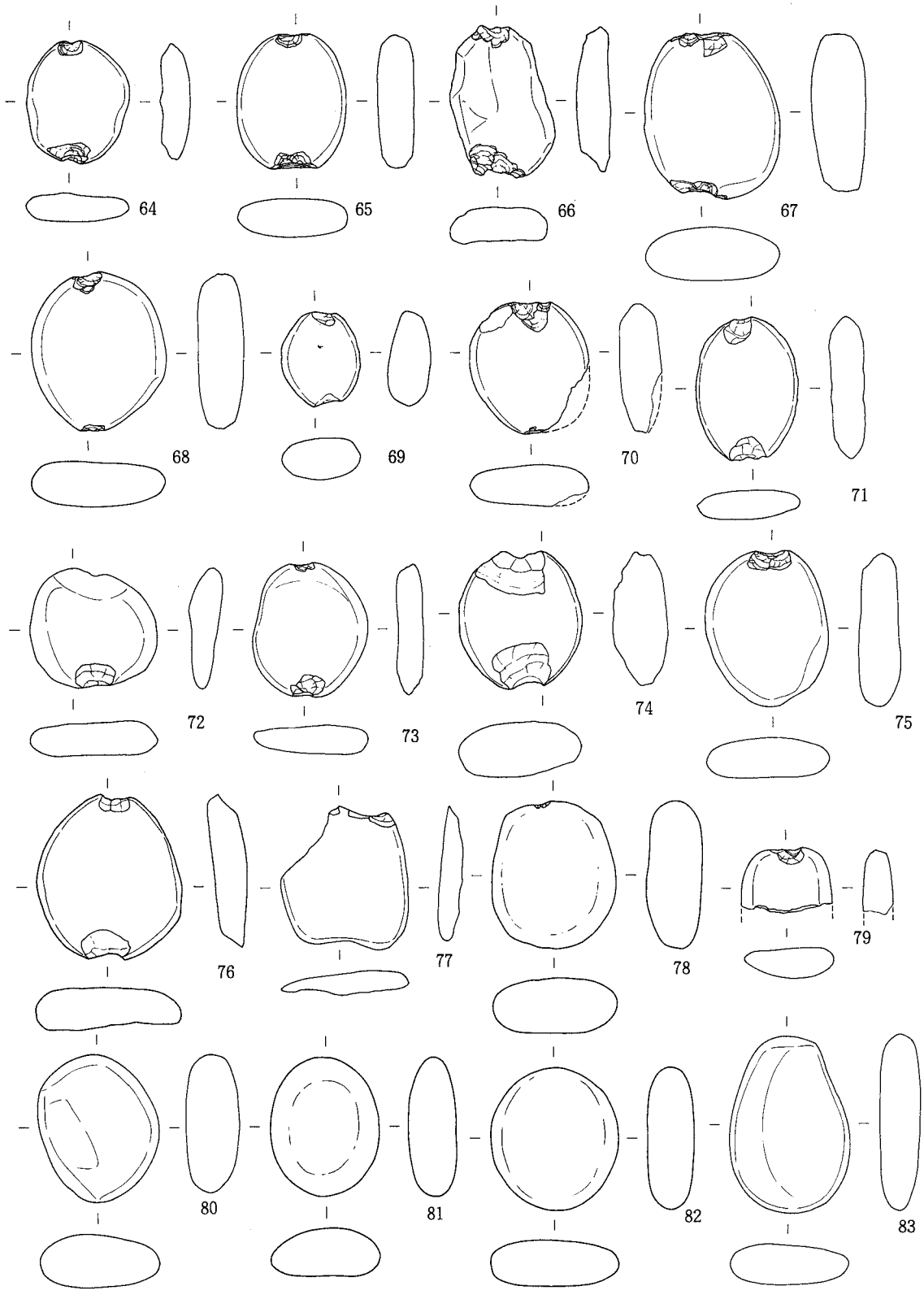
50～55は石鏃で全形のわかるものはいずれも凹基無茎。51は蛋白石製である。50・51・53などから部厚くゴロゴロした印象を受ける。



第17図　K２号竪穴住居跡出土資料５（１／３、２／３）

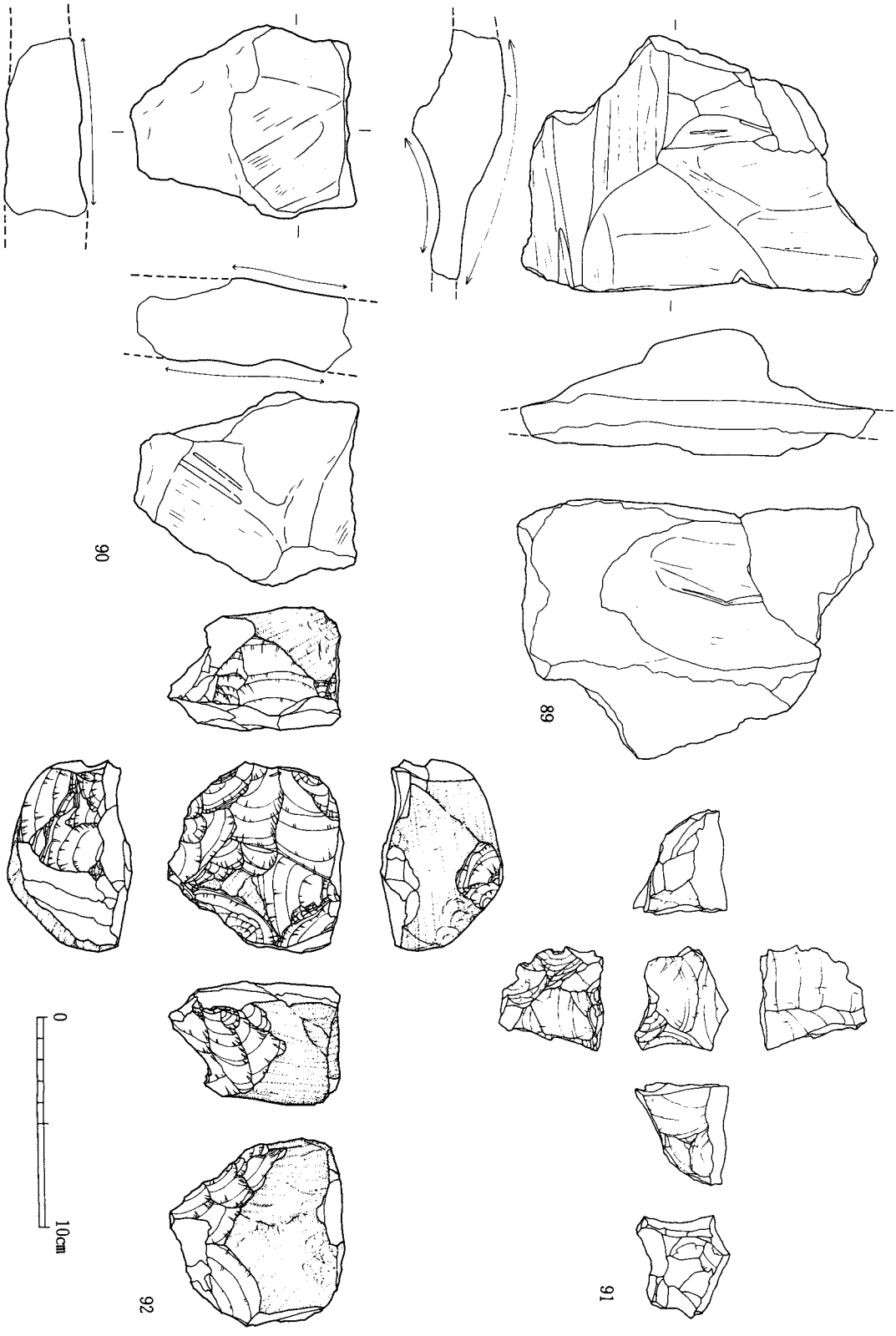


第18図　Ｋ２号竪穴住居跡出土資料６（２／３、１／３）



第19図　Ｋ２号竪穴住居跡出土資料７（１／３）

第20図　Ｋ２号竪穴住居跡出土資料８（１／３）



第21図　Ｋ２号竪穴住居跡出土資料９（１／３）

56～59は二次加工を有するもので、56・58は石錐、57は両面加工石器となろうか。比較的扁平で、尖端部の断面が菱形となる59については器種不詳。

60は磨製石斧の刃部の細片。61～63は敲石であり、61・62の両端、63で側縁全周敲打痕を有するが概して弱いものである。

64～79は礫の両端を打欠く石錘である。このなかには小型品の69、横長ぎみの72、扁平な77、打欠きが一端のみに留まる75・78が含まれる。80～83は同器種の素材礫と思われる。

84～90は粒子間に隙間の目立つ板状の砂岩を用いた砥石で、樫田誠氏はこれについて「銛等の骨角器の製作を想起させる部分もある」[樫田・望月・石田　1988] と評価している。図示した資料には周辺が破断面となるものが多く、おおよその全形を知り得るのは84・86・88などである。84では両面、86では片面が凹面となり、それぞれにおいて顕著な使用痕がみられる。小型で円形の88では筋状の溝が走る。小さく板状の85・87では使用痕はほぼ片面に限られるが、前者でそれが不明瞭なのに対して、後者では明瞭といえる。２点が接合する89では表面の使用痕は破断前に残されたものと判断されるが、裏面では破断後に大きい方の破片の一部にのみ凹面をなす磨痕が形成されたようだ。

91・92は石核で前述のとおり、ともに浅鉢12を取り上げた下から出土している。樫田誠氏の石核の分類（[樫田・望月・石田　1988] に示された分類、以下“樫田分類”と略す）に従えば、92はＤ類に含まれ、残核に近い状態と思われる91の一部に遺された剝片技術はＣ類のそれに通じよう。

その他、図示しなかったもののなかに石核４点、剝片約120点（いずれも流紋岩）・石錘片２点・同素材と思われる礫12点を数えることができる。石核の内訳は樫田分類Ｄ類が１点、同Ｉ類が３点となる。

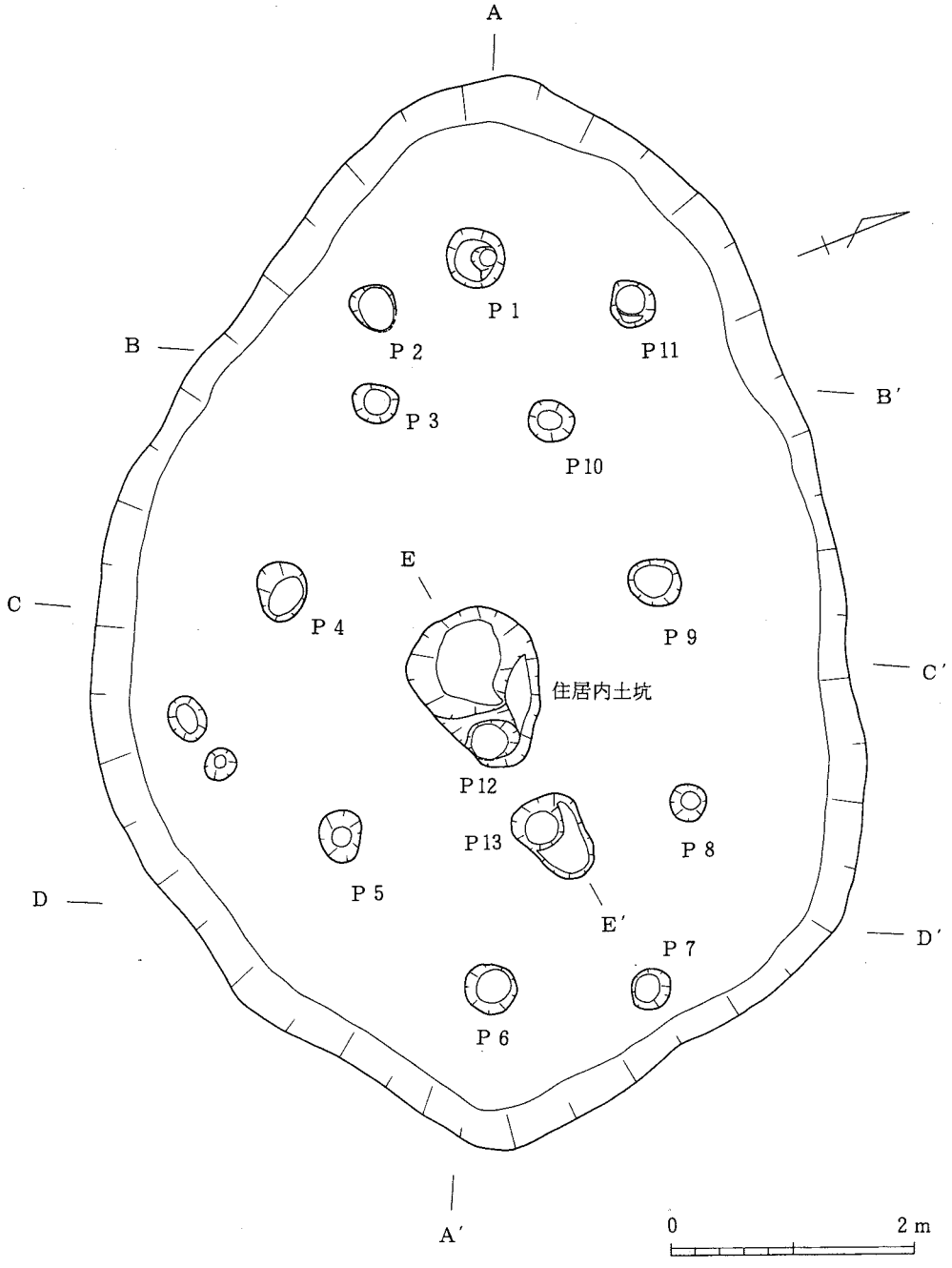
Ｋ３号竪穴住居跡

遺構（第22～24図）　Ｇ12区の北西部を中心に占地し、西端はＧ11区に及ぶ。本住居跡北西部とＫ２号竪穴住居跡南西部とはわずか約1.6ｍの距離でもって近接する。検出されたプランは長さ約8.9ｍ、幅約6.35ｍの不整な楕円形を呈し、主軸方向はＮ－113°－Ｅとなる。しかし、後述のごとく本住居跡には建替えが想定され、いま示したのは恐らく建替え後の姿であろう。

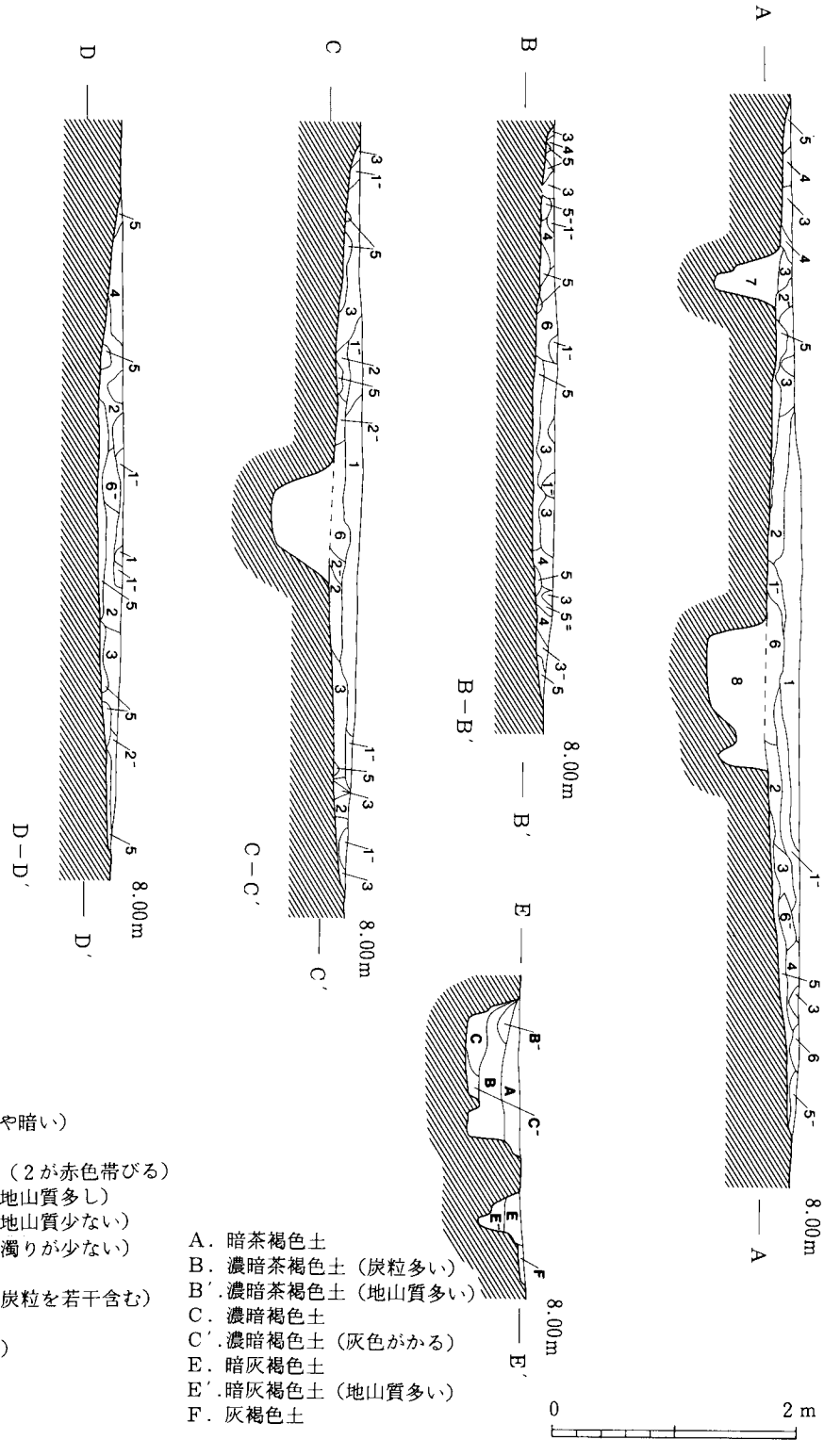
㋑柱穴

これに該当すると思われるものは、第23図においてＰ１～Ｐ12としたものである。まず、平面プランを考慮して、Ｐ１（深さ30cm、以下数値のみ記す）、Ｐ12（住居内土坑に隣接、45cm）、Ｐ６（51cm）を結ぶラインを棟通りとし、南にＰ２（24cm）・Ｐ４（31cm）・Ｐ５（59cm）、北にＰ８（59cm）・Ｐ９（62cm）・Ｐ11（50cm）のそれぞれ３基を弧状に配置する柱穴のあり方を考えることができた。これが第24図で「Ｂ」としたものである。

しかし、こうした場合にはＰ３・Ｐ７・Ｐ10などの柱穴になり得るピットの扱いが問題となるわけで、机上でもう一度検討してみた結果、先の配置との別のもう一つの柱穴配置が浮かび上がってきた。その棟通りと考えられるのはＰ３（41cm）とＰ７（50cm）を結ぶラインで、そ



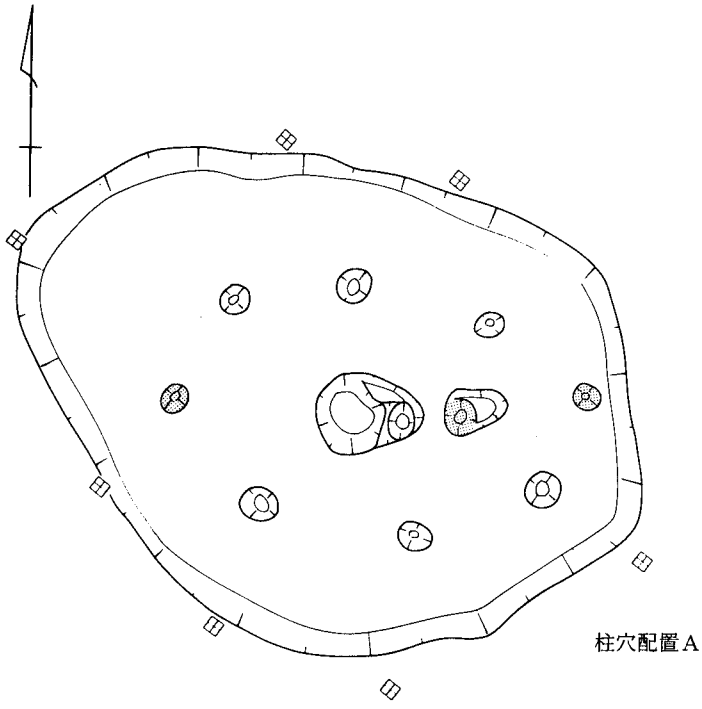
第22図　Ｋ３号竪穴住居跡平面図（１／60）

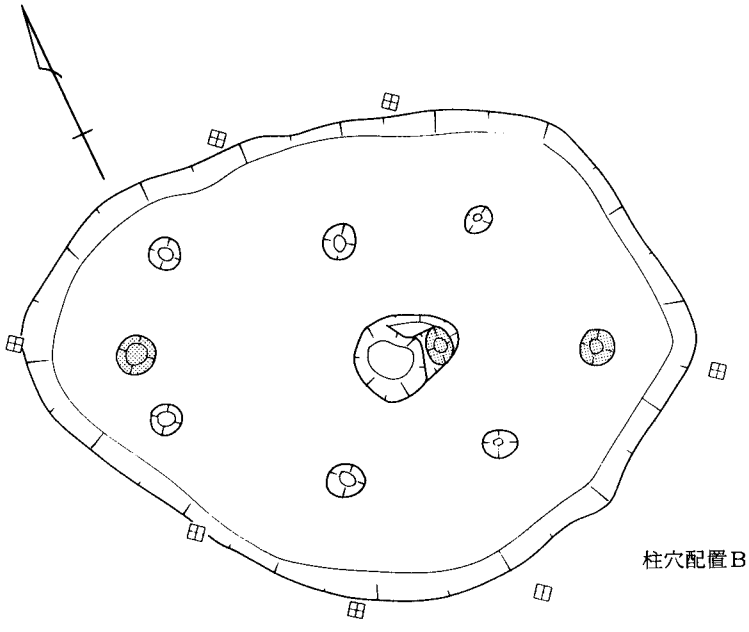


1．橙褐色土
1′.暗橙褐色土
2．灰褐色土
2′.灰褐色土（やや暗い）
3．暗灰褐色土
4．淡茶灰褐色土（2が赤色帯びる）
5．濁黄褐色土（地山質多し）
5′.濁黄褐色土（地山質少ない）
5″.濁黄褐色土（濁りが少ない）
6．黒灰褐色土
6′.黒灰褐色土（炭粒を若干含む）
7．柱穴覆土
8．（E－E′参照）

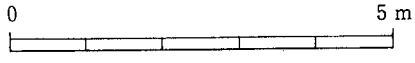
A．暗茶褐色土
B．濃暗茶褐色土（炭粒多い）
B′.濃暗茶褐色土（地山質多い）
C．濃暗褐色土
C′.濃暗褐色土（灰色がかる）
E．暗灰褐色土
E′.暗灰褐色土（地山質多い）
F．灰褐色土

第23図　K 3 号竪穴住居跡土層図（1／60）

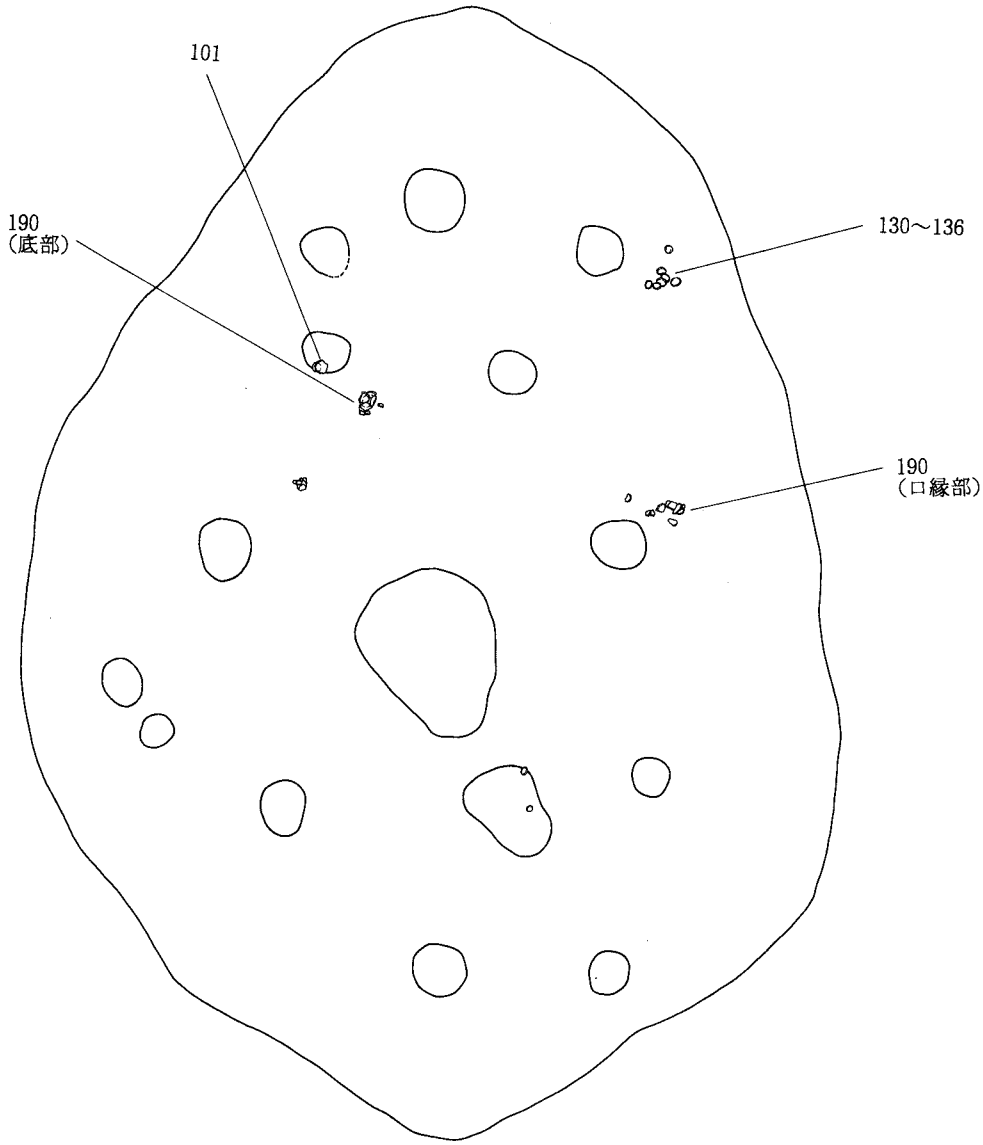




アミカケは棟を支える柱と考えられるもの



第24図　K３号竪穴住居跡建替え推定図（１／100）



第25図　Ｋ３号竪穴住居跡遺物出土状況図（１／60）

れからややはずれるが中間に位置するP13（39cm）もこのラインに沿ったものと判断される。これを挟んで南にP４・P５・P６、北にP８・P９・P10（49cm）とそれぞれ弧状に配された３基が向い合うことになる。これが第25図で「A」とした柱穴配置であり、本住居跡で「A」・「B」２通りの柱穴配置を想定するならば、P４・P５・P６・P８・P９の５基は両者に共通して用いられたことになる。

さて、１棟の竪穴住居跡で２種類の柱穴配置が想定される場合、当然その両者の関係が問題になる。検出された平面プランは明らかに「B」に伴うものである。多くの柱穴を共有する点から「A」・「B」の両者が近接した時点における建替えの結果生じたとするのが最も自然といえようが、「B」→「A」の順で建替えがなされたとすれば第24図に示した土層断面図にプラン縮少に伴う何らかの埋戻しの痕跡があってもよいはずである。しかし積極的にそれを裏付ける根拠はなく、現時点では「A」から「B」へと、すなわち相似する柱穴配置でもって拡張するようにして建替えたとする方がより蓋然性が高いのではなかろうか。

また、柱穴配置「A」の場合は主軸方向がN－88°－E、「B」の場合はN－113°－Eと両者の間に大きな隔たりが認められる。因みに近接するK２号竪穴住居跡のそれはN－115°－Eであって、「B」との間に顕しい近似が認められる。

㋺住居内土坑

１基が確認でき、その柱穴に囲まれた範囲における位置は、柱穴配置「A」の場合はほぼ中央、「B」の場合は東寄りになる。長径110cm、短径88cmの寸づまりな楕円形で深さ44cmを測る本体の北東に浅いテラス部分が付属し、東側の柱穴P12との境は不明瞭である。

㋑で想定したように柱穴配置「A」→「B」の順で建替えられたとするならば、第23図の土層断面図から推定される埋積状況は、P13の柱が抜き去られたのちに土坑とともに順次埋積していったというものである。したがって「B」の段階では開口して機能していた可能性が高いが、「A」の段階での状況は不明。

㋩覆土

第23図の土層断面図から判断して基本的には順次埋積していったものと思われる。覆土上層から中期末から後期初頭に比定される土器も出土しているが、それに伴う遺構（掘り込み）の存在は確認できなかった。

㋥炉跡

焼土などこれに該当するものは確認されなかった。

遺物（第25～28図）

㋑遺物出土状況

土器については床面出土資料として101・104・106・109をあげることができる。また、３～４cm浮いた状態のものとしては93・95・96があげられる。住居跡の年代に直接関係がないと思われる102・103は20cm近く浮いた状態で出土している。

石器では砥石107・石鏃111・石錘115・119、石錘素材礫128～136が床面出土資料で、このうち130～136が北西部から集積された状態で検出されている。また、住居内土坑からは石錘122・123

と石錘素材礫124～126が、柱穴Ｐ11からは石錘素材礫127が出土した。

以上のように本住居跡では比較的床面出土資料に恵まれる反面、覆土上層への多量の遺物廃棄といった現象は認められない。この点は床面資料がほとんどみられぬにもかかわらず、上層で多量の遺物廃棄が行われているＫ２号竪穴住居跡の状況とは対照的といえる。隣接する住居跡２棟から抽出される遺物廃棄の２類型は、集落の動態、遺跡の構造を考えるうえでも重要である。

なお、主な遺物の出土地点は第25図に示した。深鉢101についは一部床面にかかるものの、Ｐ３の覆土とした方がよいかもしれない。

㋺土器

93～95、それに恐らく98も浅鉢である。93では入組文等を半隆起線で表現するとともに左端の横長の楕円区画内には楔形刻目文を伴う。口縁端部では玉抱き三叉文風の文様とともに12と同様の短い平行半隆起線がみられる。94・95は無文、98では爪形文が施される。

96・97、99～101は有文の深鉢で、口縁部である96・97はともに山形の波頂部である。96の内面、97の外面ではともに円形の浮文が貼付されており、その他に前者では口縁の形に沿った平行半隆起線、後者では爪形文を伴う。頸部付近と思われる99でも半隆起線とともに爪形文が施されている。残る100・101は胴～底部で、いずれも半隆起線間を斜行する平行沈線で充塡する。101の半隆起線の断面形は丸味帯びたカマボコ形ではなく角張ったものであり、外底面にもナデ調整が施されている。

102・103（同一個体）もやはり有文の深鉢であるが、他の出土土器とは異なり中期末から後期初頭頃に位置付けられるものである。口縁部の前者では縄文地文上に幅５㎜の太い沈線でクランク状の文様を描く。胴部の103でも縄文地文上に太い沈線で文様を表現しており、垂下する部分の先端が丸くおさめられている。本資料の胎土を手取川南岸の辰口町の諸遺跡のそれと比較すれば、明かに大杉谷式系とは異なり前田・中津式系に近い。なお、本資料と近接した時期の遺物は包含層からも出土しており、221～223がこれに当たる。

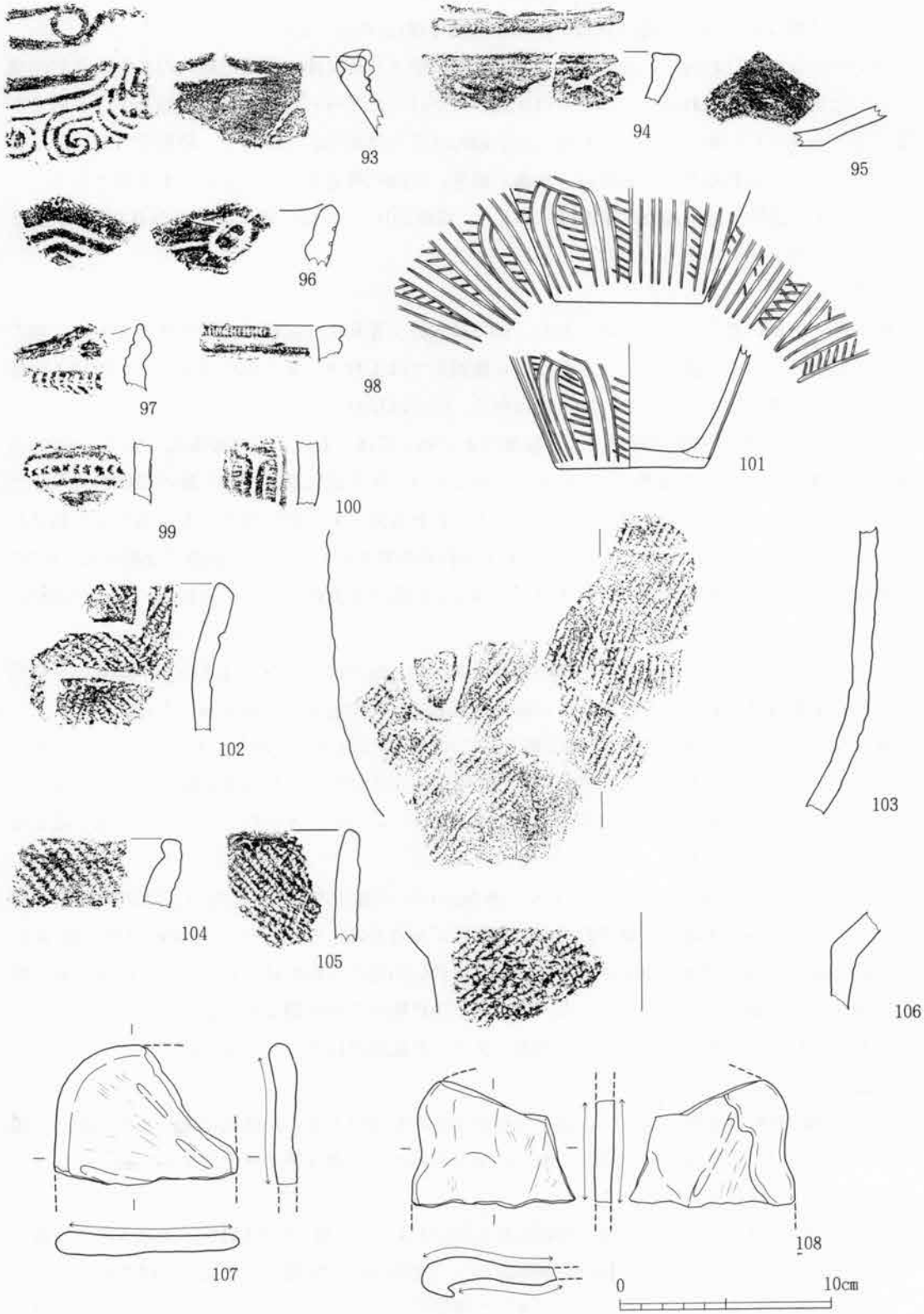
104～106、109は深鉢で縄文のみのものである。104は口縁が内屈ぎみとなり、106の口辺部と胴部の境には横位の押圧縄文が施されている可能性があるがはっきりしない。109は口径が26.0㎝、底径10.3㎝、器高30.7㎝に復原される。口縁には低い山形の突起が付され、１頭しか遺存せず頭数不明ながら４頭と推定して図化した。口辺部下方に横位の押圧縄文が１条みられ、その付近では成形時の粘土紐の積み上げの痕跡が明瞭である。外底面には網代状圧痕が残る。

㋩石器

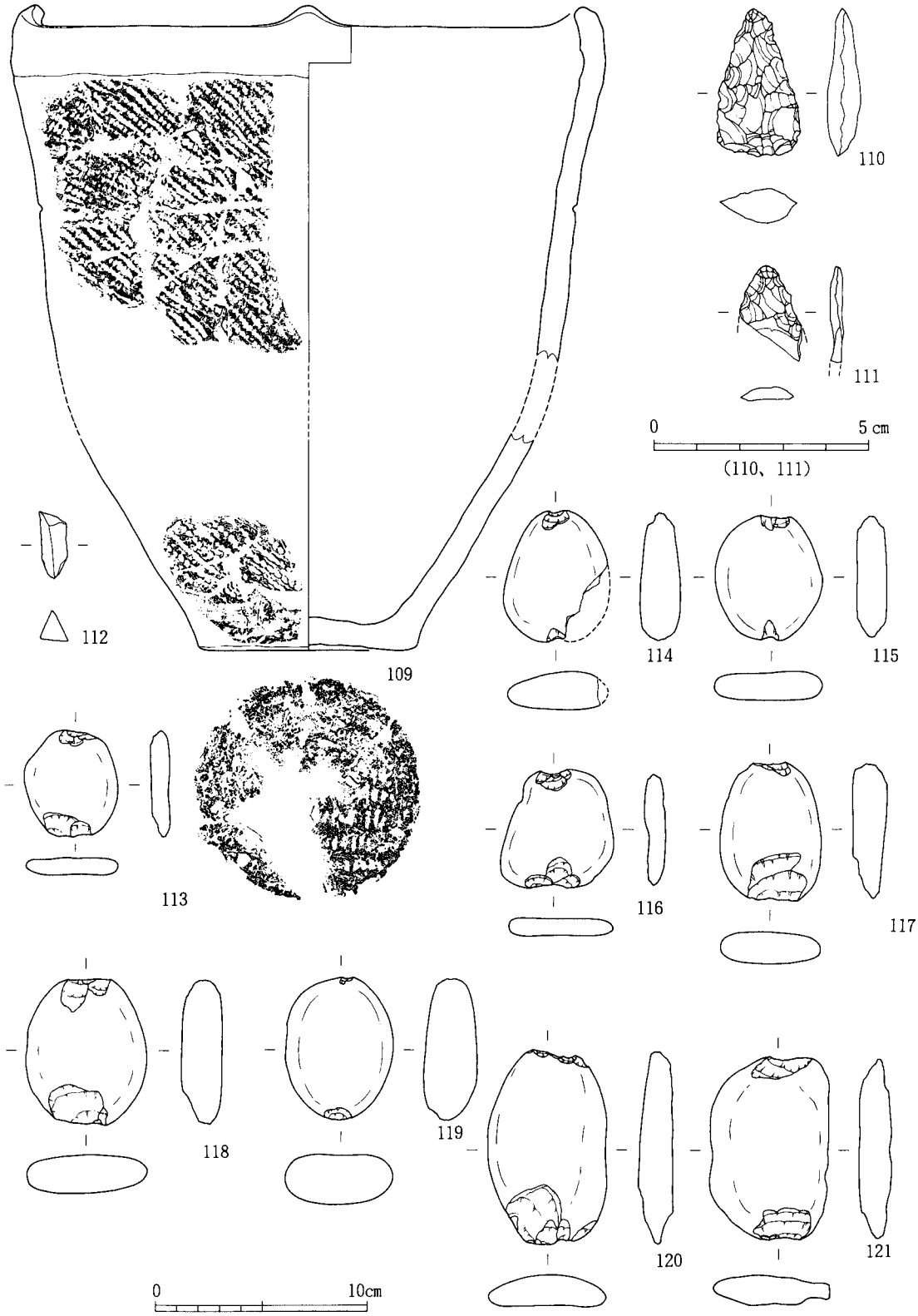
107・108は粗粒砂岩製の砥石で、扁平で板状のものを素材とするが磨痕は概して不明瞭。石鏃としては110・111の２点が検出されており、全形のわかる前者は平基無茎である。112はヒスイの小剝片で三角柱状をなす。

113～123は石錘で、いずれも礫の両端を打ち欠いたもの。124～136は形状・大きさから石錘の素材と思われる礫。このうちの130～136が床面上で集積された状況で出土したのは先述のとおり。

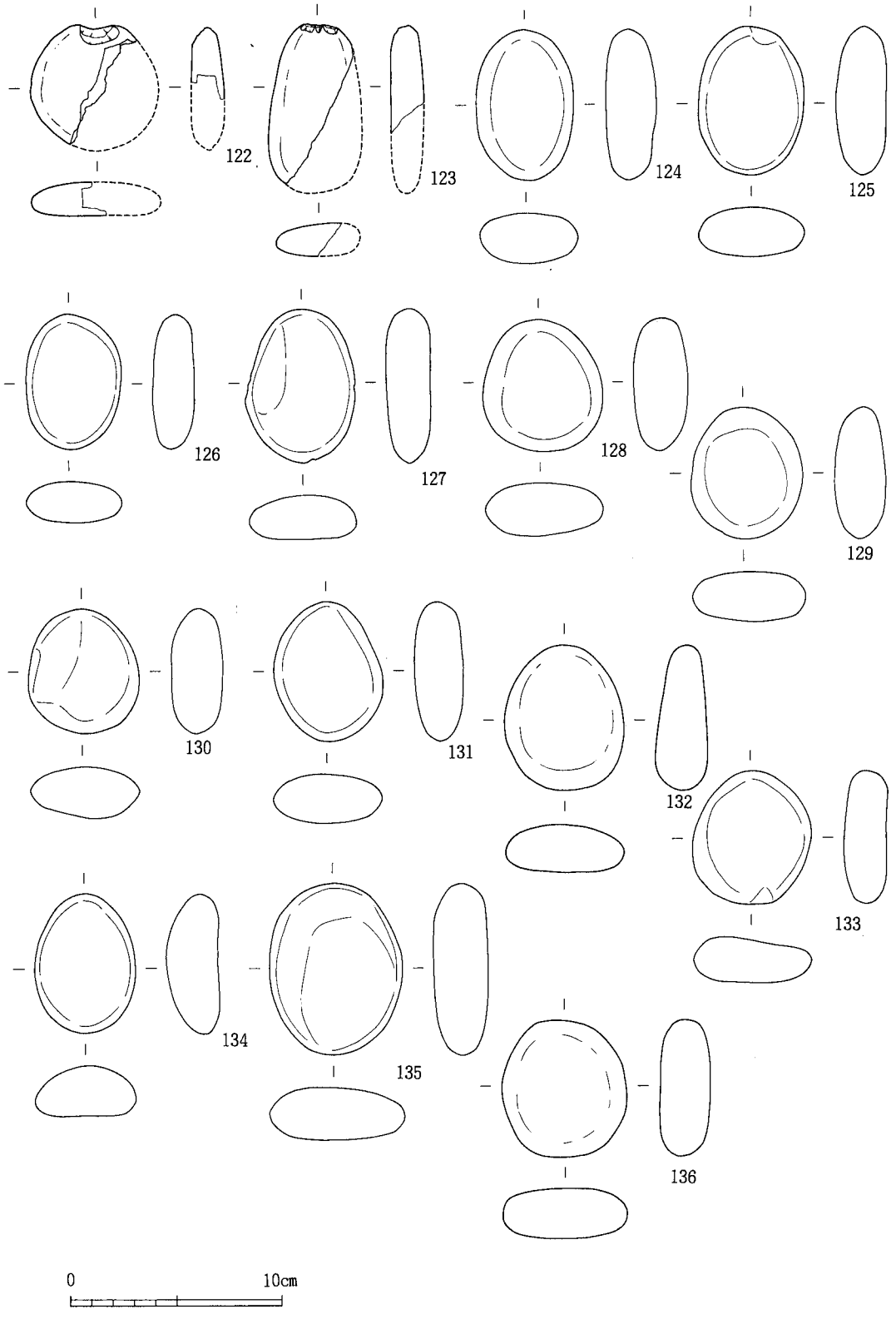
図化しなかったものでは、石錘一点、すべて流紋岩で占められる石核４点・剝片53点、石錘の素材と思われる礫22点を教えることができる。石核については、樫田分類に基けばＥ類が１点、



第26図　K３号竪穴住居跡出土資料１（１／３）



第27図　Ｋ３号竪穴住居跡出土資料２　　（１／３、２／３）



第28図　Ｋ３号竪穴住居跡出土資料３　（１／３）

G類が１点、Ｉ類が２点となる。22点の石錘素材礫のうち17点は床面から10cm以上浮いた状態で出土している。

２．遺物集中

小松市教育委員会による既応の発掘調査においては、竪穴住居跡３軒とともに22箇所の遺物集中の検出が報告されている［樫田・望月・石田　1988］。同書によれば、遺物集中のうちの10箇所は「竪穴状遺構をもつ遺物集中」で、残る12箇所はもたないそれとなる。今回の調査でも竪穴状遺構を伴わない遺物集中が１箇所確認されており、Ｋ１号遺物集中とした。

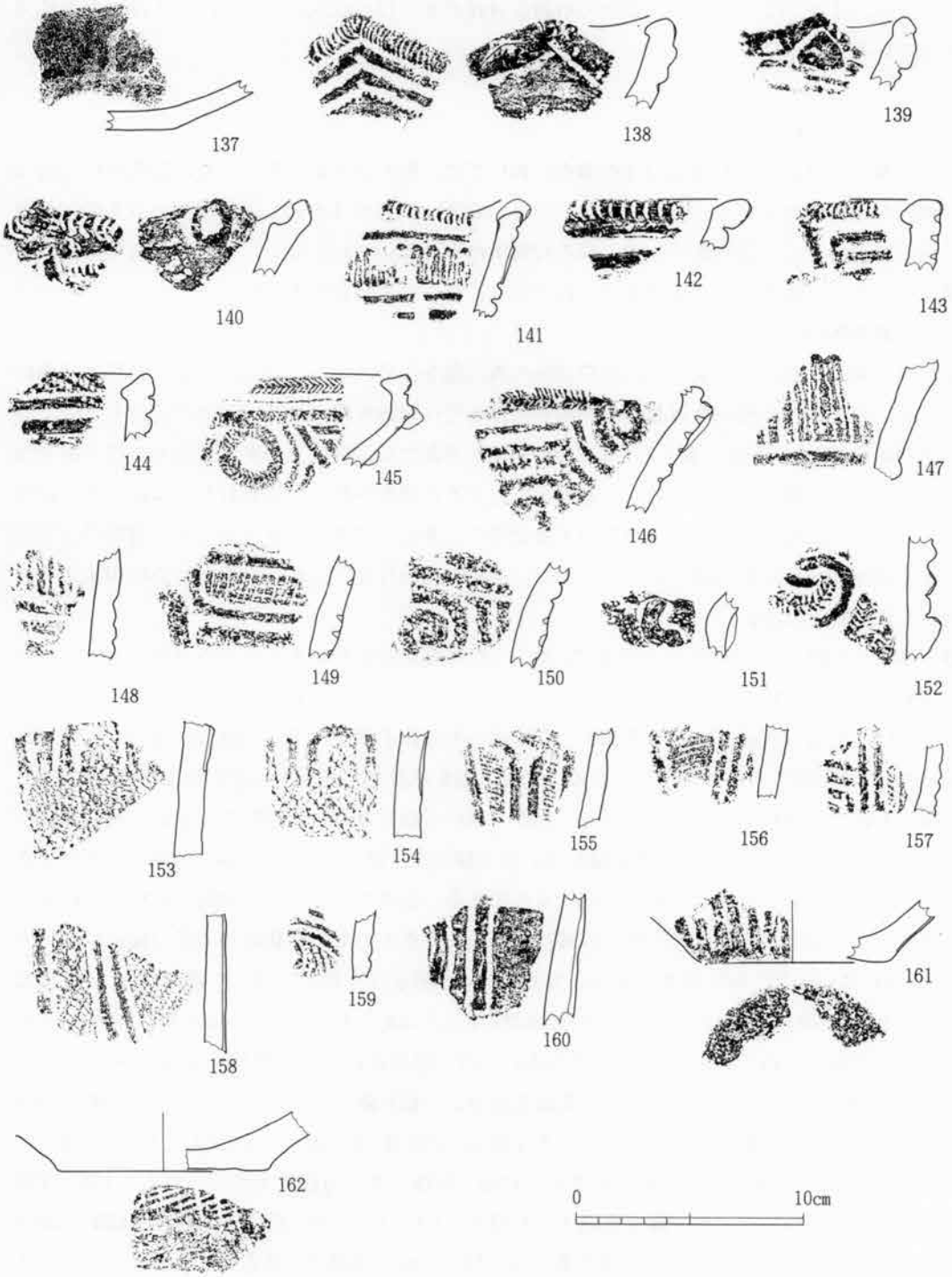
Ｋ１号遺物集中

分布（第５図）　G15区の東半部からG16区の西半部を占め、南端はH15区北東・H16区北西に及ぶ。Ｋ１号竪穴と小松市教育委員会が調査した３号住居跡を結ぶラインのやや東寄りといえよう。土器が約190点、石器・剥片等が約230点が検出されたが、その分布密度は周囲の包含層部分と比較して明かに濃い。何らかのかの遺構と関連する可能性が高いと思われたので注意深く掘り下げを行ったが、結局のところこの周辺では遺構らしきものは確認できなかった。遺物の大半が地山より15～20cm浮いた状態で出土しており、往時の地表付近で行われた廃棄行為に由来するとの解釈も成り立とうか。

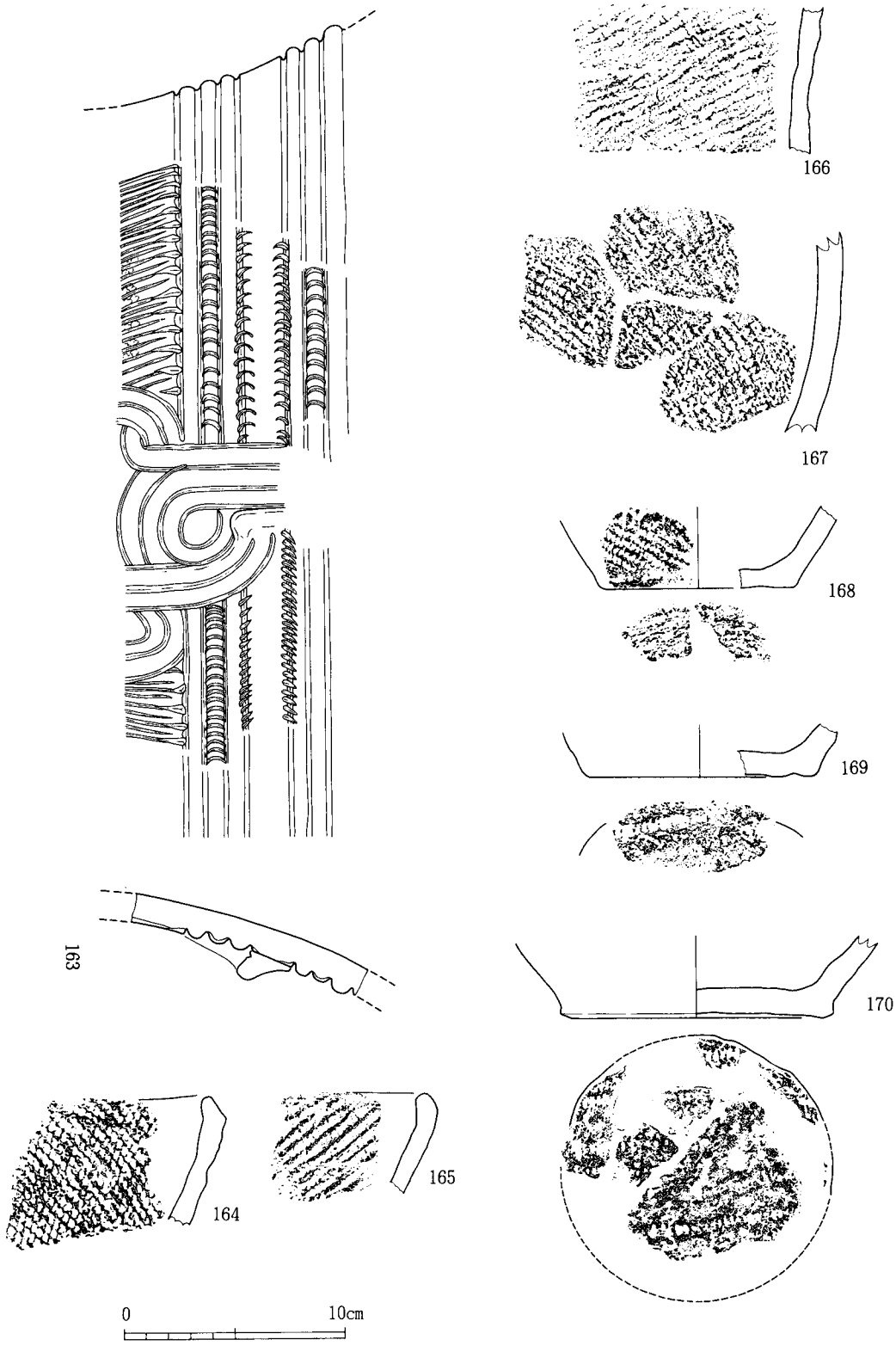
土器（第29・30図）　137は浅鉢の底部で、胎土中には細かな砂粒を多く含み内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。

138～163は有文の深鉢。このうち138～140には山形の波頂部を伴う。139には三角形の突出部、140の内面には円環状の貼付文がみられる。弁の上端を爪形文で表現する蓮華状文が施される141の口縁にも低平な突起が伴うようである。142～144は平縁をなす口縁部片でいずれも口縁端部に内傾する面を有する。143では半隆起線を用いた文様帯の一部が、144の上端では縄文が観察できる。145・146はいわゆる複合口縁状をなすものである。前者では上端と円環状の貼付文上に綾杉文が施される。後者でもやはり隆帯上に綾杉文がみられるとともに幅狭の無文帯の縁辺に刻目文が伴う。147は口辺部下端に粗雑なタッチで弁の長い蓮華状文を描く。同じく蓮華状文を有する148は163と同一個体かと思われる。149～152は頸部付近にあたるだろう。149は斜行ぎみとなる楕円形状の区画内に格子目文を配し、150においては半隆起線による渦巻状の文様がみられる。また、151は縄文地文上に貼付文、152は先端を巻き込む綾杉隆帯を伴っている。153～160は胴部片である。153・154は縦位の半隆起線による文様の下端が胴部の縄文部に及んでいる。前者は163との間に胎土・色調における類似が認められ同一個体である可能性も考えられる。155～157は半隆起線間を斜行する平行沈線で充填するもので、156・157は同一個体であろう。158・159では縄文上に、160では無文上に半隆起線を配する。161・162は底部で、後者の外底面ではスダレ状圧痕が看取される。

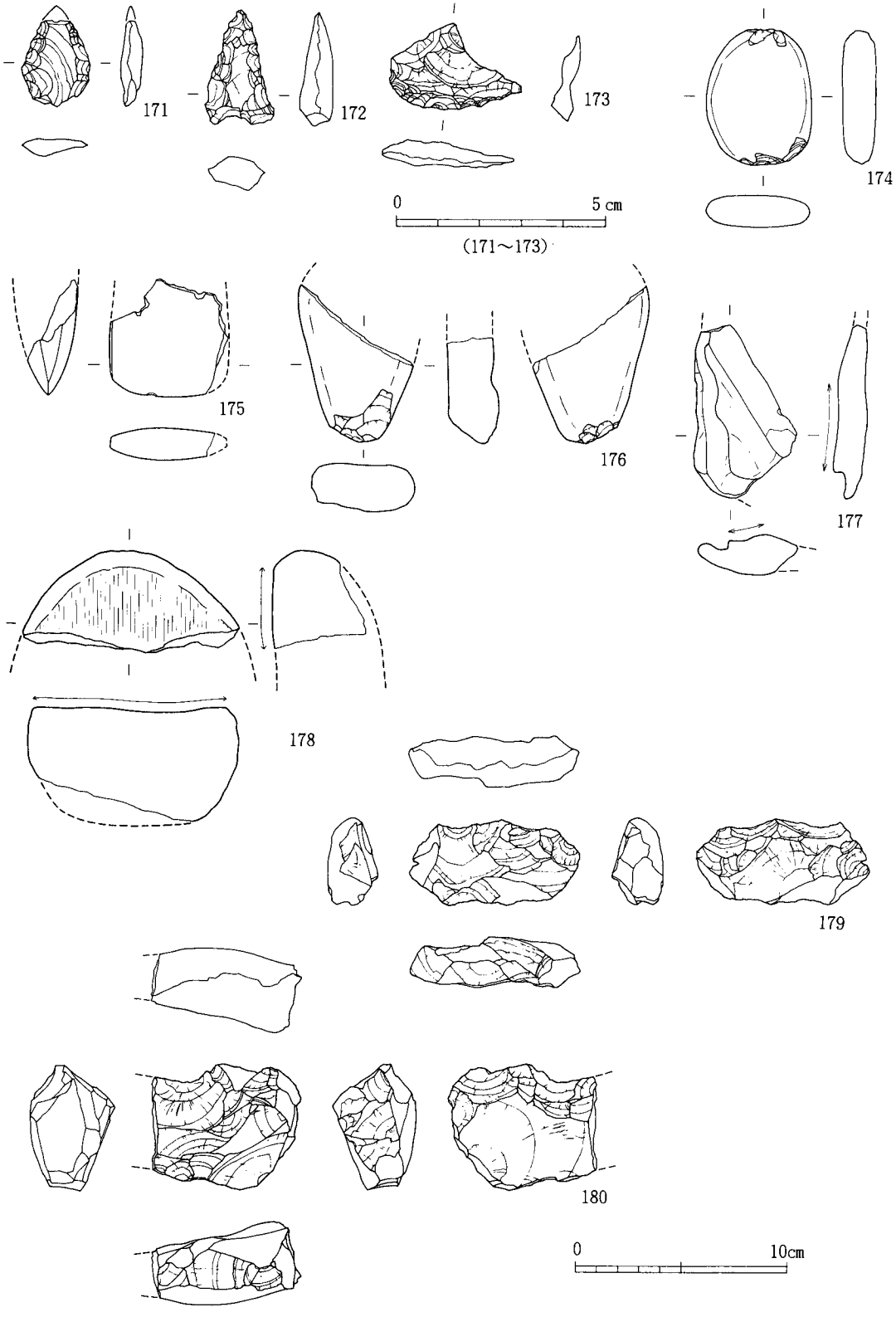
円筒状の器形を呈する163は口径が50cm近くに復原される大型品。下端にはキザミと沈線で描かれた粗雑なタッチの蓮華状文がみられ、そこには一部に縄文ものこる。加えて半隆起線・爪形文を伴う半隆起線を交互に配する中間に横位の無文帯が設けられ、その上下両縁辺には楔形刻目



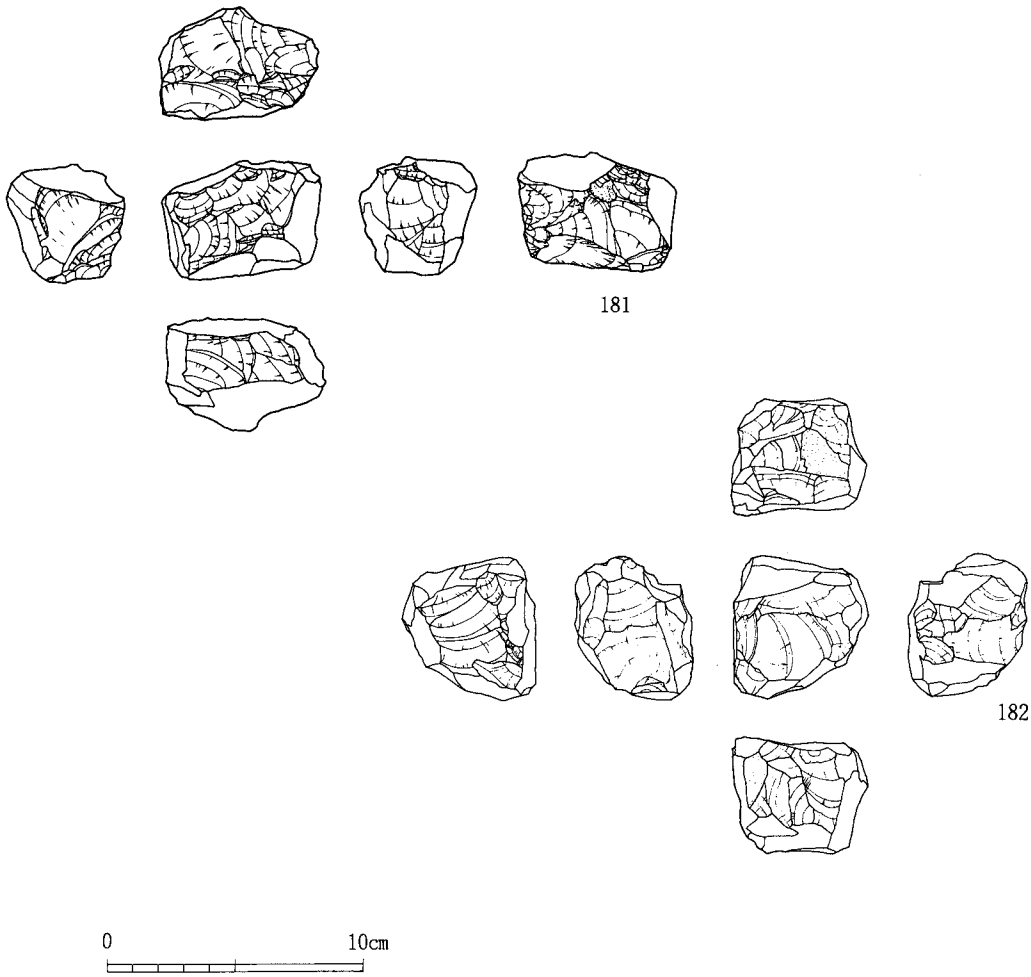
第29図　Ｋ１号遺物集中出土資料１（１／３）



第30図　Ｋ１号遺物集中出土資料２　（１／３）



第31図　Ｋ１号遺物集中出土資料３　（２／３、１／３）



第32図　Ｋ１号遺物集中出土資料４（１／３）

文が施されるが、左側においてそれが爪形文となる。また、これら横位に構成された文様を分割するように一部に突起も伴った半隆起線を主体とする文様も縦位に配されており、渦巻状・入組状のモチーフもみられる。

164・165は縄文のみの深鉢の口縁部、166・167は縄文のみしか遺存しない胴部片である。底部168～170のうちの後二者の外底面に網代状圧痕が残る。

石器（第31・32図）　171・172は石鏃、173は一側縁に調整加工を施すスクレイパー様のもの、174は石錘、175は磨製石斧の刃部、176は敲石、177は粗粒砂岩製の砥石、178は石皿の一部である。このうち171については未製品である可能性が残る。179～182は石核で樫田分類に従えば179がB類、180が恐らくE類、181・182がG類に比定されるだろう。

その他、図示しなかったものなかには石核17点・剥片209点などが含まれる。これらのほとんどが流紋岩で占められるが、石核のうちの1点は鉄石英、剥片のうちの9点は黒色頁岩である。なお、これらの石核の樫田分類による内訳については最終段階の残核に近い資料も多く判断に苦しむ部分もあるが、概ねB類1点・D類2点・E類5点・G類3点・I類6点ということになろうか。住居跡覆土でみられた石錘素材と思われる礫はここでは確認できなかった。

3．包含層出土資料

以下の資料の出土区については各図中に記してある。

土器（第33・34図）

浅鉢（183～186）

横長の楕円形区画の内側に楔形刻目文や上下に向き合う小さな三角形の刺突を配する183は、内面に丁寧なヨコナデが観察されごくわずかに赤彩も残る。186と同様に口縁が内屈する185では、文様帯内に鋸歯状の綾杉隆帯を有するとともに半隆起線や楔形刻目文も加わる。

有文の深鉢（187・190～221）

187・190～193は口縁部片である。爪形文が施された山形の波頂部である187の内面には浅鉢12と同様の短い平行半隆起線が走る。口縁直下に爪形文を施した隆帯が鍔状に廻る190には突起がみられ、その上面は円形に尻尾が付いたオタマジャクシのような形状となる。この突起の下では鍔状の隆帯は前方へ舌状に張り出し、その上面にも短い平行半隆起線が配される。同一個体である191・192では口縁上端に綾杉文がみられ、楕円形区画の内側の刻目は列点状となる。やや斜行ぎみに綾杉隆帯が縦走する193では蓮華状文もみられる。

163と同様に蓮華状文に縄文が残る194は口辺部の文様の一部であろう。195・196は口辺部と胴部の境付近と思われ、前者には綾杉隆帯もみられる。197・198では斜行する無文帯の縁辺に刻目文を施すが、後者のタッチはきわめて雑といえる。199の三角形の無文部の縁辺には爪形文による刻目が伴う。雲母と思われるものを多く含んだ特徴的な胎土である200では山形の半隆起線の下にJ字状のそれが加わる。201の爪形分は押引き状のものである。202・203は縦位の無文帯の縁辺に刻目文を伴う。204・205は半隆起線に囲まれた部分を三叉状に彫去する。206～208は胴部片で、半隆起線で文様を描く。206では一部に縄文が残り、207は半隆起線で囲まれた部分を平行

沈線で充填する。無文地に描かれた208の半隆起線のタッチはぎこちない。K2号住居跡出土の29と同一個体である209は隆帯上及びそれに囲まれた部分に爪形文を施す。遺存する隆帯は区画文の一部と思われ、瘤状の隆起も認められる。210では縄文地文上に断面三角形の隆帯が貼付され、その両脇にキャタピラの轍状の連続的な刺突がみられる。これは南久和氏が「連続刺突沈文」[南　1977]と呼称するものである。211は文様としては口辺部下端の半隆起線1条が遺存するのみのだが、下ぶくれとなる胴部形態が観察できる。

縄文のみの深鉢（189・212～217・224・225）

遺存部に縄文だけしかみられないものもこれに含める。

波状縁で口縁上端に幅狭の無文帯が設けられている189は内面に小さな楕円形の浮文がみられる。平縁の212・213でも口縁上端に無文帯が設けられている。214には横位の押圧縄文がみられ、216でもそれを有する可能性があるがはっきりしない。214の押圧縄文の原体は棒巻きと思われる。215は口縁が大きく開く形態になる。217は胴部片。224・225には無節縄文が施されている。

無文の深鉢（188）

入字状の波頂部を伴う188は遺存部でみる限り無文で、わずかに口縁形に沿った入字状の沈線がみられるのみ。

底部（218～220）

219・220の外底面には網代状圧痕が残る。ただし後者では不明瞭。

中期末の土器（221～223）

小波状縁の221、隆帯下に渦巻文がみられる222は大杉谷式系統に、粗い長石粒を含んだ明橙褐色の胎土で貝殻腹縁による刺突を施す223はこの地域では出土例の稀な串田新式に位置付けられよう。

八日市新保式の土器（226）

今回の調査における出土はこれ1点のみであるが、小松市教育委員会による既応の調査でも若干量みられるようである［樫田・望月・石田　1988］。

石器（第36～39図）

石鏃（227・228）

小型で凹基無茎の前者は完形で、周辺からの押圧剥離が全体に及ぶ状況が表裏両面において観察できる。大型の後者は基部を欠損する。これも全体にわたり押圧剥離がみられる。

石錐（229～232）

229・230は先端部の断面の形状から石錐に含めてよいと思われる。231も鋭さを欠くが何らかの種類のドリルと考えられる。これらに対して232は典型的といえる。なお、230については未製品の可能性が残る。

打製石斧（233～237）

基部から刃部にかけて緩やかに開く撥形の形状を呈し、表裏ともに自然面を残さないものが主流を占める。素材となる剥片への二次加工は周辺に限られる。縄文時代晩期の手取川扇状地の諸遺跡から多量に出土する片面に大きく自然面を残す打製石斧に比して小型であるとの印象を受け

る。片面の一部に自然面を残して上端の面も自然面となる237については本器種としてはやや特異といえるが一応これに含めておく。

石錘（238～258）

すべて自然礫の両端を打欠いたものによって占められる。

磨製石斧（259）

定角式で刃部が欠損する。恐らく使用時の破損であろう。

磨石類（260～264）

260・261は上下両端に敲打痕を有する敲石で、前者の両面で磨痕がみられ、後者上端の敲打痕は不明瞭。262・264は両面に各１箇の凹みを有し、後者では加えて表裏両面で磨痕、側縁全周で敲打痕が観察される。以上は自然礫を素材とするのに対して263は片面に大きく自然面を残す剝片を素材とする263では表面に浅い凹み２箇を伴う。

砥石（265～267）

いずれも扁平な板状の粗粒砂岩を素材とするが、周囲が破断面となる例が多く元来の形状を把握するのは難しい。

石皿（268・269）

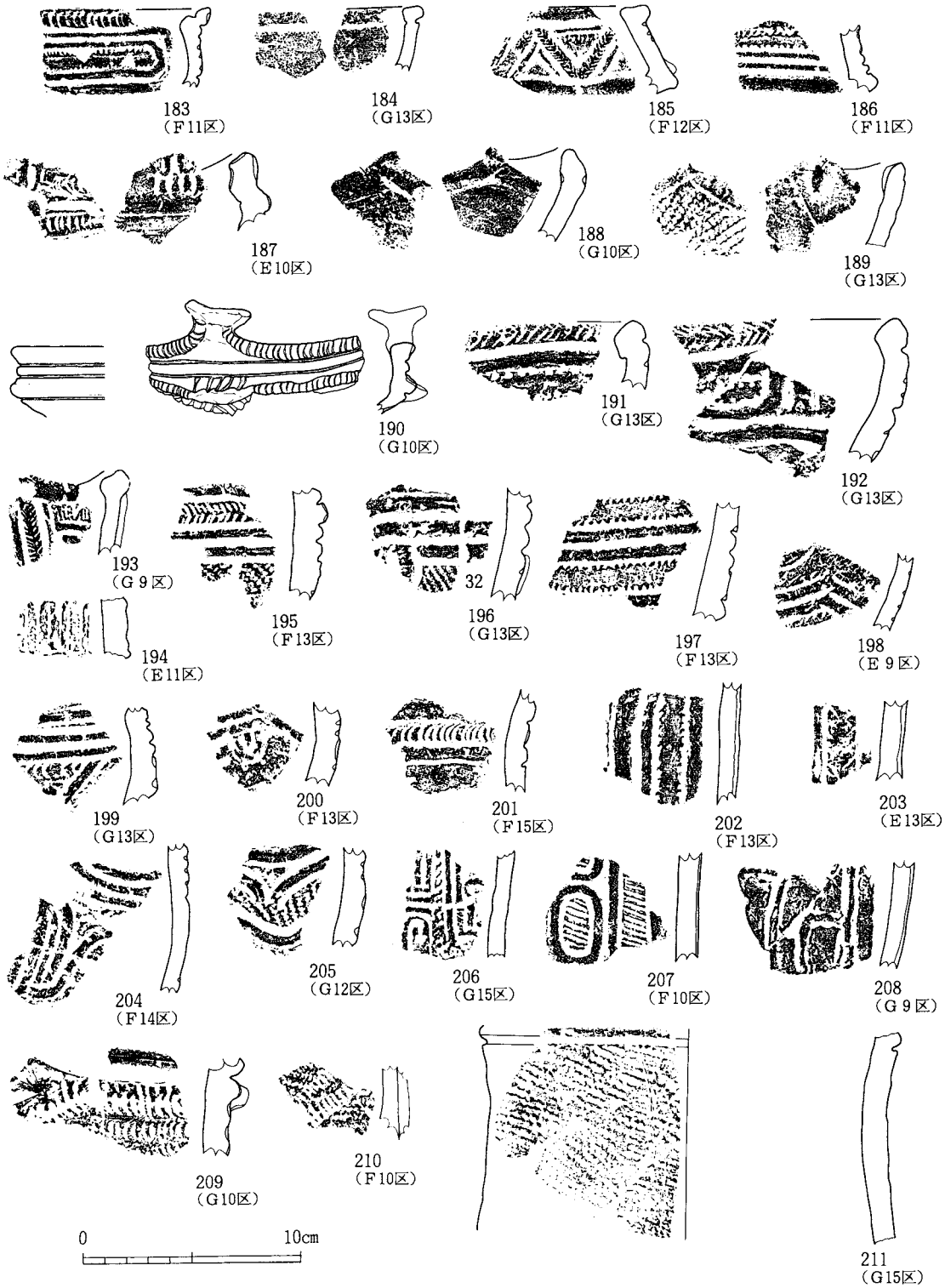
いずれも断片的資料に過ぎない。前者の磨面は中凹みとなる。ともに風化が激しく使用痕は不明瞭。

石核（270・271）

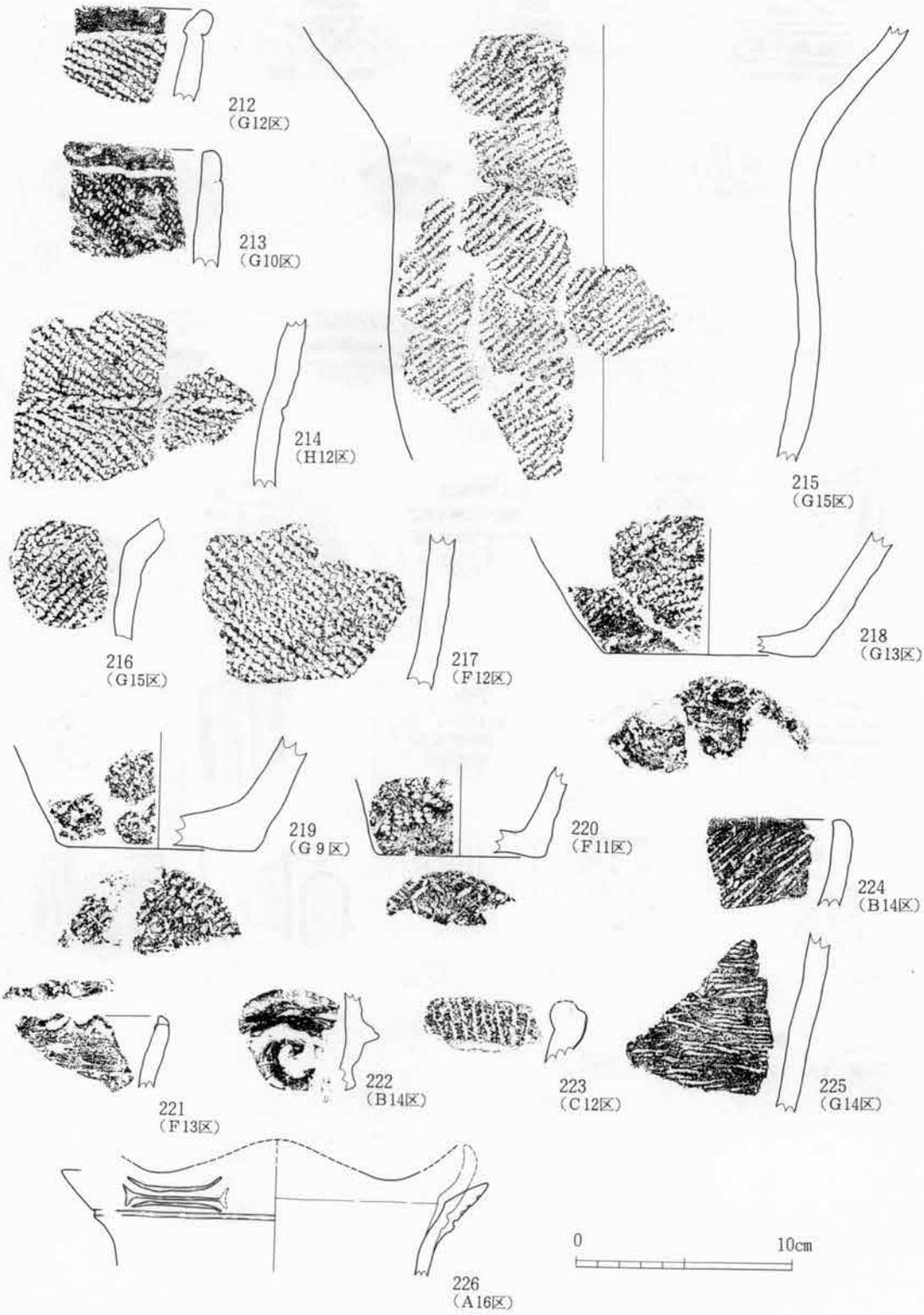
立方体に近い271は樫田分類Ｇ類に比定されよう。これは縄文時代の資料として問題なかろうが小型の逆三角錘状の形態で稜線付近の１箇所で剝片生産が行われた形跡が認められる270については細石核の可能性も考慮され、今後とも検討を要する資料である。表面に油膜状の光沢を有するものは石核ではこれ１点のみであることにも留意する必要があろう。

未図化資料

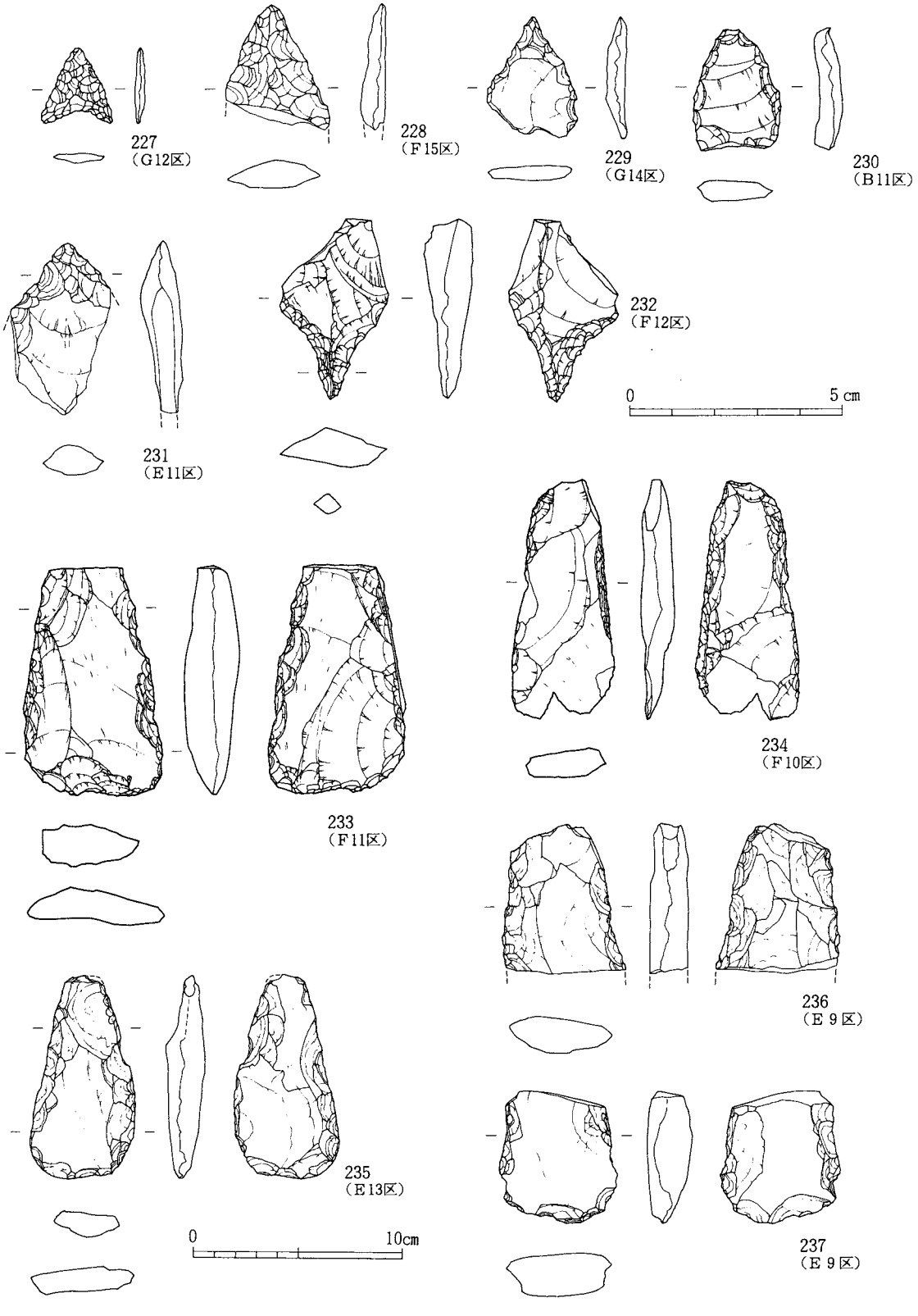
定型的な石器としては石錘の破片２点と磨石と思われるもの１点をあげることができる。石錘素材と思われる礫は21点を数える。石核・剝片についてはほとんどが流紋岩製のもで占められており、それを用いた石核が28点、剝片は約230点にのぼる。石核の内訳は樫田分類のＡ類の３点・Ｂ類１点・Ｄ類２点・Ｅ類１点・Ｇ類12点・Ｉ類９点となり、剝片には二次加工を有するもの３点が含まれる。その他の石材は蛋白石５点・メノウ４点・含鉄フリント３点・凝灰岩２点・輝石安山岩・ハリ質安山岩・玉髄・珪質凝灰岩各１点で全体の１割に満たない。以上のうちに蛋白石・珪質凝灰岩の各１点が石核である。



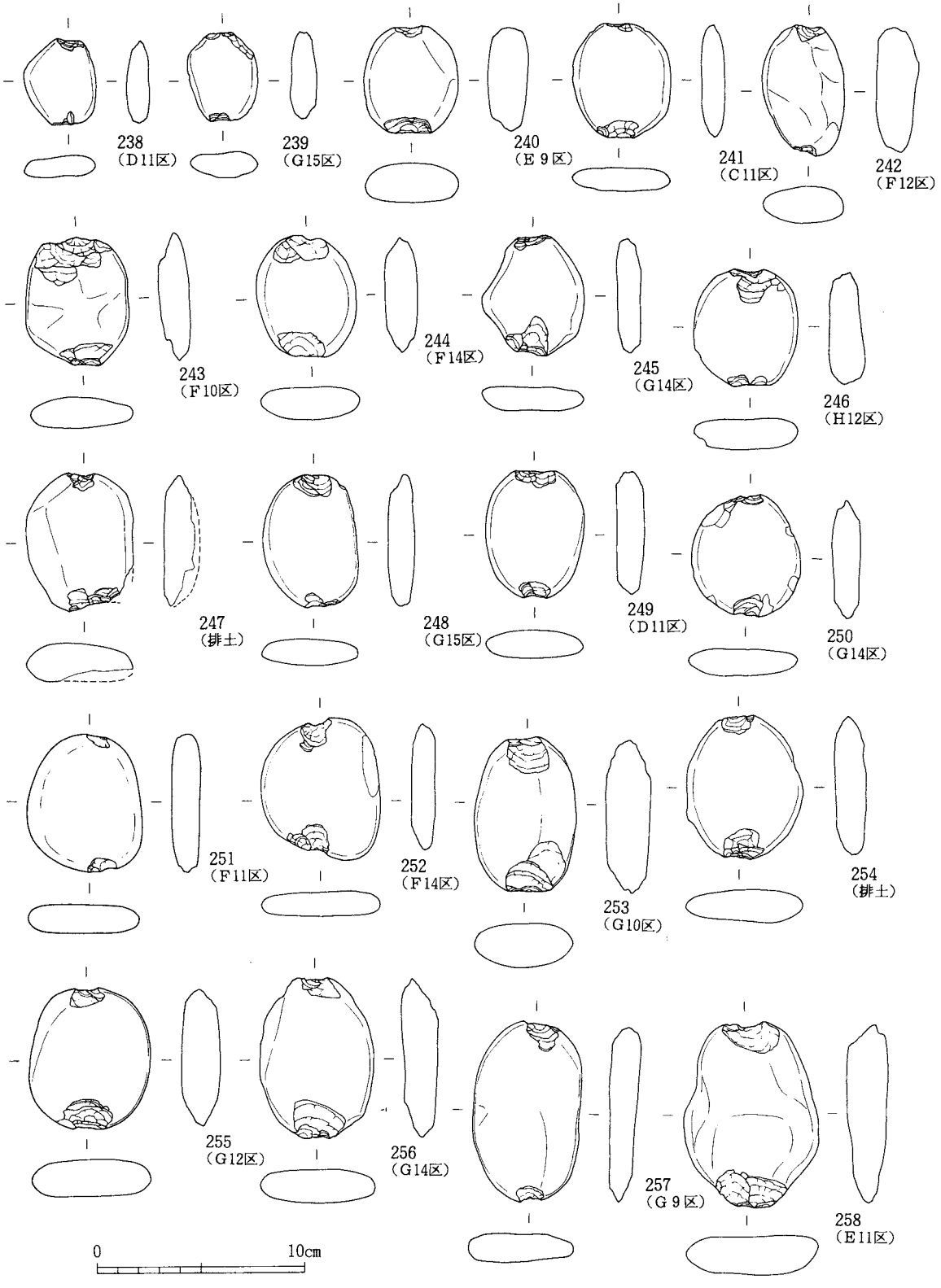
第33図　包含層出土資料１（１／３）



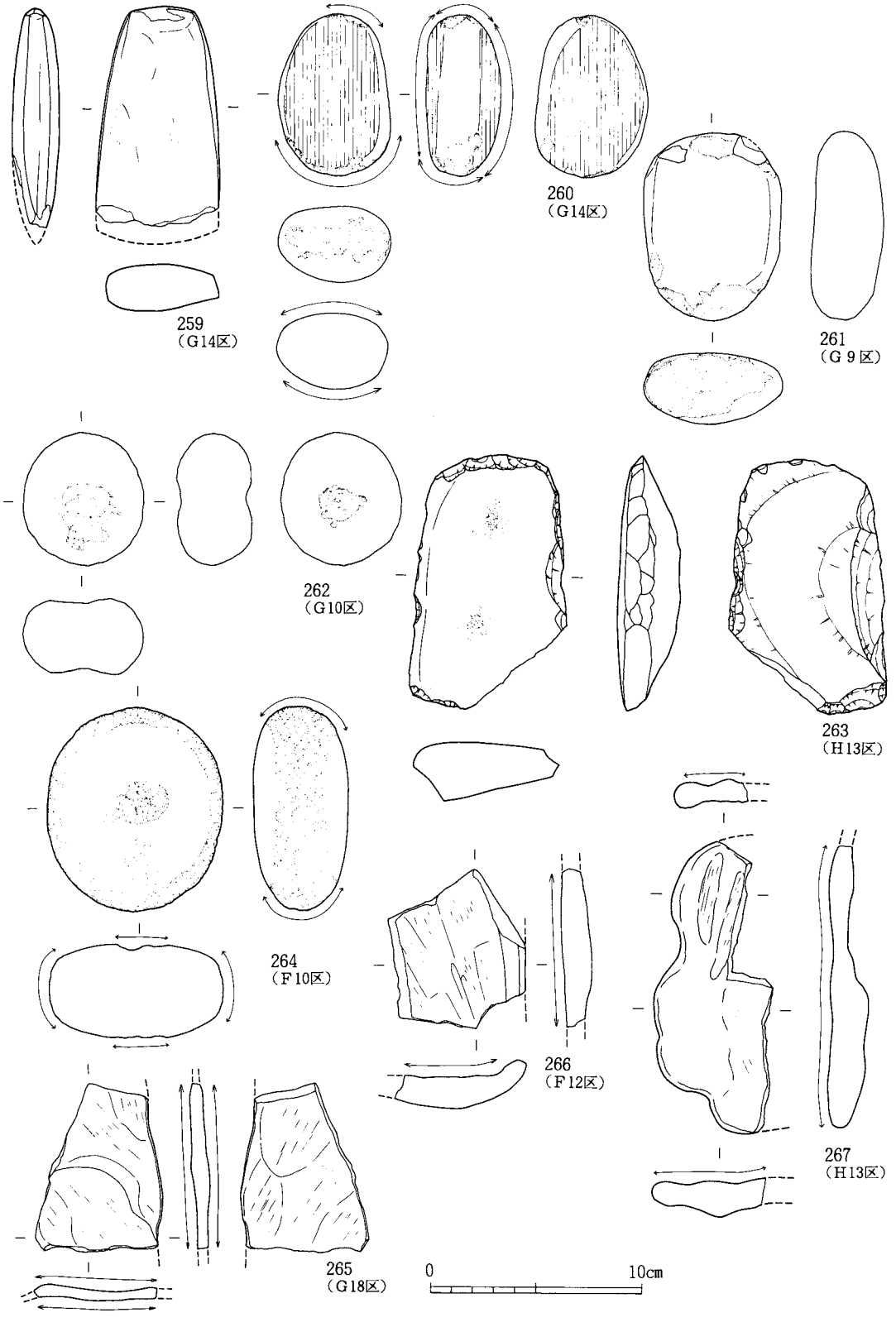
第34図　包含層出土資料２（１／３）



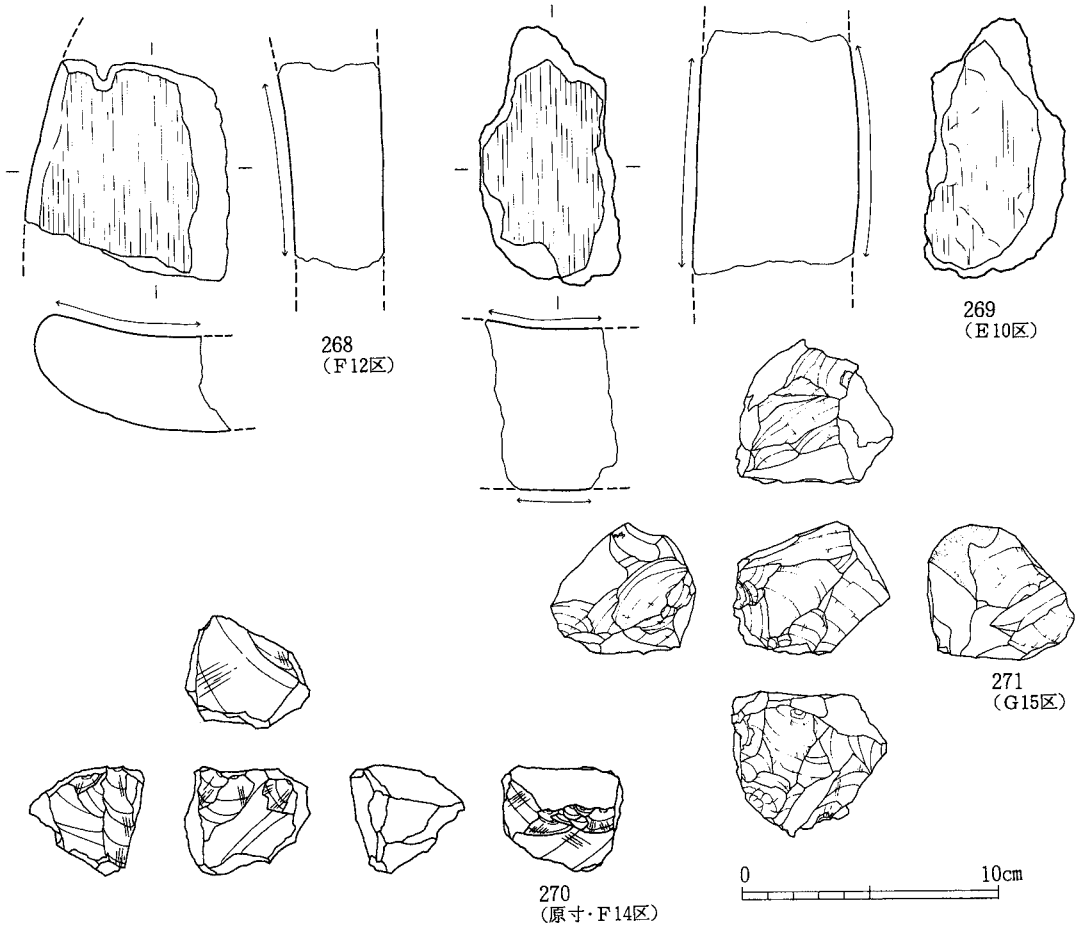
第35図　包含層出土資料３（２／３、１／３）



第36図　包含層出土資料 4



第37図　包含層出土資料 5



第38図　包含層出土資料６（１／３、１／１）

第2節　古墳時代以降の遺物

須恵器（第39図272～274）　272は瑤であり、古墳時代のものであろう。外面に平行タタキ・カキ目、内面に同心円状の当具痕のみられる273及び壺底部と思われる274は古代に位置付けられよう。

越前焼（同図275～277）　口縁部276の内外面・肩部277の外面に暗赤褐色の釉が施されるが、すり鉢で内面におろし目を有する275ではそれがみられない。

陶胎染付（同図280）　肥前系と思われ、碗である。

染付（同図281～285）　281・282は唐草文及び5弁の花の文様が描かれ、呉須の発色は明るく鮮やかである。外面に二重網目文を有する284は波佐見の製品であろう。285は外面が青磁となり、見込みには5弁のコンニャク印判がみられる。

白磁（同図286）　286は紅皿であろう。

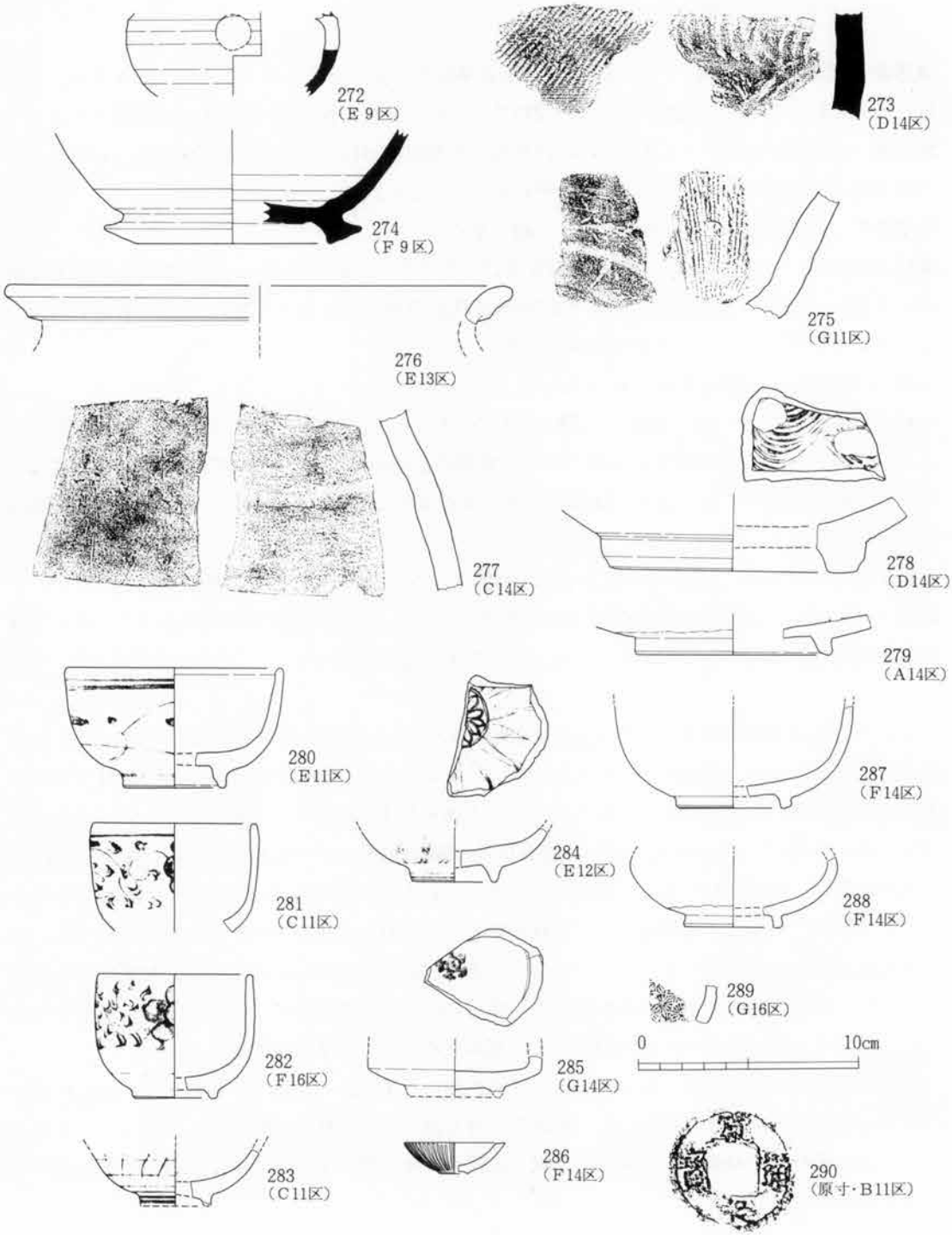
陶器（同図278・279・287・288）　278はいわゆる刷毛目唐津の鉢で、砂目で（あるいは砂胎土目）が観察できる。279も鉢であり高台内面の底部の器厚が薄くなる。287には灰釉が、288には茶褐色の鉄釉が施されるが、前者では高台内側にまでほどこされるのに対して後者では外面底部付近は無釉となる。

瓦質土器（同図289）　菊花文のスタンプで加飾される289は細片につき器種不明。

銭貨（同図290）　江戸時代に鋳造された「寛永通宝」でいわゆる新寛永に含まれよう。細い字体で重量感がなく薄っぺらな印象をうける。そのためか遺存状態も悪い。

以上の資料は谷斜面の流土から出土した290を除いて、かつての耕作土であった地表近くの土層から出土しており、図中に記した出土区についても二次的な移動の結果である可能性を払拭できるものではない。とはいえ、これらのうちで主体をなすのは近世の遺物であり、若干古手に属するであろう278もみられるものの、須恵器以外の陶磁器類の大半は18世紀以降、概ね江戸時代の後半に製作・使用されたとして大過ないと考えられる。調査参加した木戸浦五作氏（串町在住）によれば、かつてこの周辺に江戸時代の終わりまで存した串村の分村が明治時代初年に一村あげて北海道倶知安方面へ移住したとのことであり、近世遺物の出土は氏の談話を裏付ける結果となった。調査区内の状況からみれば、その串村の分村は近世当初すでに成立していたものではなく、恐らく18世紀代のいずれかの時点で開拓が進められたとすべきであろう。

周囲を加賀三湖で囲まれており、しかも標高が10m以下であったにもかかわらず、念仏林遺跡付近の台地は水利に恵まれなかったため近代以降も遅くまで森林や荒蕪地として残ることになった。上記の資料はそのような悪条件下で繰り広げられた大聖寺藩領の農民の苦闘と挫折の歴史の一端を物語るものといえる。



第39図　古墳時代以降の遺物（1／3、1／1）

第2表　K1号竪穴出土石器属性表

挿図番号	器　種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石　質	出土地点	備　考
4	敲石	7.8	4.3	3.1	135.0	石英安山岩	覆土	
5	石錘	(6.3)	5.3	2.2	71.5	安山岩	〃	
6	〃	7.0	4.5	2.0	78.2	〃	〃	
7	礫	5.5	4.8	1.7	60.6	石英安山岩	〃	石錘素材？
8	〃	6.3	4.9	1.8	65.6	〃	〃	〃
9	〃	7.5	5.4	2.4	119.7	〃	〃	〃
10	砥石	(11.5)	(8.6)	3.5	(280.3)	粗粒砂岩	〃	

（　）は遺存値

第5表　K1号遺物集中出土石器属性表

挿図番号	器　種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石　質	出土地点	備　考
171	石鏃	(2.0)	1.6	0.5	(1.1)	流紋岩	——	
172	〃	2.7	1.7	0.8	2.4	〃	——	
173	スクレイパー？	2.1	3.2	0.6	2.2	ハリ質安山岩	——	
174	石錘	6.5	5.0	1.6	83.5	安山岩	——	
175	磨製石斧	(5.6)	(5.7)	(1.5)	(65.5)	蛇紋岩？	——	
176	敲石	(7.5)	(5.6)	(2.5)	(89.9)	石英安山岩	——	
177	砥石	(8.3)	(4.9)	1.9	(50.0)	粗粒砂岩	——	
178	石皿	(4.7)	(10.3)	(5.4)	(205.5)	安山岩	——	
179	石核	4.2	8.2	2.4	71.8	流紋岩	——	
180	〃	6.1	7.1	4.0	170.5	〃	——	
181	〃	4.7	4.7	6.2	140.5	〃	——	
182	〃	5.7	5.3	4.7	172.7	〃	——	

（　）は遺存値

第3表　K2号竪穴住居跡出土石器属性表

挿図番号	器　種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	出土地点	備　考
50	石鏃	3.5	1.7	0.7	2.8	流紋岩	覆土（上層）	
51	〃	3.0	1.8	0.7	3.2	蛋白石	〃（〃）	
52	〃	2.3	1.3	0.5	1.1	流紋岩	〃（〃）	
53	〃	2.9	1.6	0.7	2.3	〃	〃（〃）	
54	〃	(1.9)	1.3	0.4	(0.7)	〃	〃（〃）	
55	〃	(2.1)	(1.4)	0.5	0.8	〃	〃（〃）	
56	石錐	3.7	2.1	0.8	4.6	〃	〃（〃）	
57	両面加工石器	3.8	2.4	0.9	9.1	〃	〃（〃）	
58	石錐	4.2	3.2	1.4	8.1	〃	〃（〃）	
59	石錐？	5.8	4.8	1.3	20.8	〃	〃（〃）	
60	磨製石斧	(2.1)	(3.4)	(1.5)	(10.7)	(石英質)	覆土	
61	敲石	6.4	5.1	4.1	229.4	石英斑岩	〃	
62	〃	9.9	5.9	4.5	400.1	石英安山岩	〃	
63	〃	10.7	9.7	5.5	802.8	〃	〃	
64	石錘	6.1	5.0	1.4	44.6	〃	住居内土坑	
65	〃	6.6	5.4	1.8	112.6	石英斑岩	〃	
66	〃	7.5	5.2	1.8	80.0	石英安山岩	〃	
67	〃	8.1	6.6	2.6	183.7	〃	〃	
68	〃	7.8	6.6	2.2	157.7	〃	〃	
69	〃	4.6	3.9	2.1	44.6	石英斑岩	覆土	
70	〃	6.5	5.9	2.0	100.8	片麻岩	〃	
71	〃	7.0	4.9	1.4	70.9	砂岩	〃	
72	〃	6.1	5.8	1.7	79.0	石英安山岩	〃	
73	〃	6.6	5.6	1.4	65.2	〃	〃	
74	〃	6.5	6.0	2.6	142.5	安山岩	床面	
75	〃	7.6	6.0	2.1	129.9	石英安山岩	〃	
76	〃	8.0	7.0	1.8	135.6	石英斑岩	覆土	
77	〃	7.1	6.3	1.0	59.2	石英安山岩	〃	
78	〃	7.2	6.0	2.7	166.5	〃	床面	
79	〃	(3.2)	4.4	1.5	(21.1)	〃	覆土	
80	礫	7.3	5.9	2.7	159.5	石英斑岩	床面	石錘素材？
81	〃	6.8	5.3	2.4	107.3	〃	覆土(浅鉢12の下)	〃
82	〃	6.9	6.3	2.3	148.1	〃	〃（　〃　）	〃
83	〃	8.7	5.8	2.0	134.1	安山岩	住居内土坑	〃
84	砥石	(19.5)	12.5	2.4	(489.1)	粗粒砂岩	覆土	
85	〃	(6.2)	(8.9)	1.4	(73.8)	〃	床面ピット	
86	〃	17.9	10.5	4.1	608.1	〃	覆土	
87	〃	(14.3)	(8.9)	1.75	(180.6)	〃	〃	
88	〃	8.5	(6.4)	1.4	(68.6)	〃	〃	
89	〃	16.8	12.2	4.6	569.6	〃	住居内土坑	
90	〃	(10.7)	(9.2)	3.9	(358.7)	〃	覆土(浅鉢12の下)	
91	石核	4.4	4.9	4.9	86.6	流紋岩	〃（　〃　）	
92	〃	8.4	9.0	6.0	470.2	〃	〃（　〃　）	

（　）は遺存値

第４表　Ｋ３号竪穴住居跡出土石器属性表

挿図番号	器　種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石　質	出土地点	備　考
107	砥石	(6.7)	8.7	1.3	(66.0)	粗粒砂岩	床面	
108	〃	(6.1)	6.5	1.9	(59.0)	〃	覆土	
110	石鏃	3.5	1.9	0.8	3.9	流紋岩		
111	〃	(2.3)	(1.4)	(0.3)	(0.7)	〃	床面	
112	剝片	3.2	1.4	1.4	7.3	ヒスイ	覆土	
113	石錘	5.1	4.4	0.9	27.2	石英安山岩	〃	
114	〃	6.3	(5.0)	1.9	(69.9)	安山岩	〃	
115	〃	5.9	5.0	1.4	65.5	片麻岩	床面	
116	〃	5.7	4.9	0.9	38.3	石英安山岩	覆土	
117	〃	6.6	4.7	1.6	69.4	〃	〃	
118	〃	7.0	5.8	1.9	115.5	〃	〃	
119	〃	6.8	5.1	2.5	113.8	〃	床面	
120	〃	9.3	5.5	1.5	83.4	凝灰岩	覆土	
121	〃	8.8	5.4	1.6	102.5	石英安山岩	〃	
122	〃	(5.7)	(3.5)	1.6	(35.1)	〃	住居内土坑	
123	〃	(7.5)	(4.0)	1.6	(47.3)	〃	〃	
124	礫	7.2	4.6	2.4	110.3	〃	〃	石錘素材？
125	〃	7.1	5.0	2.4	124.5	〃	〃	〃
126	〃	6.4	4.5	2.0	83.1	安山岩	〃	〃
127	〃	7.3	5.2	2.1	111.6	〃	柱穴Ｐ11	〃
128	〃	6.3	5.7	2.6	130.9	〃	床面	〃
129	〃	6.3	5.4	2.4	115.7	石英安山岩	〃	〃
130	〃	7.0	5.2	2.5	113.6	〃	床面一括	〃
131	〃	6.6	5.2	2.4	118.0	安山岩	〃	〃
132	〃	6.8	5.6	2.5	135.5	石英安山岩	〃	〃
133	〃	6.4	5.7	2.2	103.2	安山岩	〃	〃
134	〃	6.6	4.8	2.4	99.6	〃	〃	〃
135	〃	8.2	6.4	2.6	202.1	石英安山岩	〃	〃
136	〃	5.5	5.9	2.4	141.7	〃	〃	〃

（　　）は遺存値

第6表　包含層出土石器属性表

挿図番号	器　種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石　質	出土地点	備　考
227	石鏃	1.8	1.7	0.2	0.4	珪質凝灰岩	G12区	
228	〃	(3.0)	(2.5)	(0.7)	(3.6)	流紋岩	F15区	
229	石錐	(2.9)	(2.2)	0.5	(2.1)	〃	G14区	
230	〃	2.9	2.1	0.6	2.5	〃	B11区	未製品？
231	〃	(4.2)	(2.4)	1.0	(8.2)	〃	E11区	
232	〃	4.4	2.6	1.2	7.6	〃	F12区	
233	打製石斧	11.1	6.7	2.6	190.3	凝灰岩質砂岩	F11区	
234	〃	11.6	4.9	1.6	80.7	〃	F10区	
235	〃	9.8	5.1	1.9	82.9	〃	E13区	
236	〃	(7.3)	(5.9)	1.8	(92.8)	〃	E 9区	
237	打製石斧？	6.5	5.7	2.2	97.9	〃	〃	
238	石錘	4.2	3.5	1.1	21.7	石英安山岩	D11区	
239	〃	4.3	3.4	1.3	22.9	石英斑岩	G15区	
240	〃	5.2	4.6	1.9	72.0	〃	E 9区	
241	〃	5.5	4.8	1.1	48.1	安山岩	C11区	
242	〃	6.4	4.0	2.1	58.7	〃	F12区	
243	〃	6.3	5.1	1.5	58.5	石英安山岩	F10区	
244	〃	6.0	4.8	1.6	65.6	安山岩	F14区	
245	〃	5.8	5.0	1.2	44.7	石英斑岩	G14区	
246	〃	5.7	5.0	1.7	71.5	〃	H12区	
247	〃	6.7	5.2	1.9	65.1	安山岩	排土	
248	〃	6.5	4.6	1.3	59.4	〃	G15区	
249	〃	6.2	4.8	1.5	40.2	石英斑岩	D11区	
250	〃	5.9	5.3	1.4	58.4	安山岩	G14区	
251	〃	6.7	5.6	1.4	88.1	〃	F11区	
252	〃	6.9	5.8	1.2	66.1	安山岩	F14区	
253	〃	7.5	5.0	2.2	125.2	石英安山岩	G10区	
254	〃	7.0	5.6	1.5	76.2	石英斑岩	排土	
255	〃	6.9	5.8	1.9	109.1	安山岩	G12区	
256	〃	7.9	5.5	1.8	102.6	石英斑岩	G14区	
257	〃	8.9	5.2	1.5	100.2	安山岩	G 9区	
258	〃	9.2	6.5	2.0	134.1	石英安山岩	E11区	
259	磨製石斧	(10.5)	(5.9)	2.3	(217.4)	蛇紋岩	G14区	
260	敲石	7.7	5.4	3.6	212.7	石英安山岩	〃	
261	〃	9.0	6.5	3.4	290.1	〃	G 9区	
262	凹石	6.4	5.7	3.8	163.4	石英斑岩	G10区	
263	〃	12.2	7.5	2.9	309.4	安山岩	H13区	
264	〃	9.8	5.3	4.5	542.0	〃	F10区	
265	砥石	(8.1)	(6.0)	1.0	(43.9)	粗粒砂岩	G18区	
266	〃	(7.6)	(6.5)	(1.5)	(75.4)	〃	F12区	
267	〃	(14.0)	(5.6)	(1.8)	(98.4)	〃	H13区	
268	石皿	(8.6)	(8.1)	(4.3)	(296.5)	安山岩	F12区	
269	〃	(10.3)	(5.5)	(6.6)	(528.3)	〃	E10区	
270	石核	1.4	1.6	1.5	3.1	珪質岩	F14区	細石核？
271	〃	5.4	6.2	5.8	171.0	流紋岩	G15区	

(　　)は遺存値

第5章　まとめ

（1）　縄文集落の構成について

今回の調査区は念仏林遺跡のうちの「A地区」の北端部を占める。「A地区」の主要部分については短期大学建設に係り小松市教育委員会により発掘調査が行われ、その成果はすでに報告されている［樫田・望月・石田　1988］。また、同教育委員会の試掘によって範囲が確認された短期大学南側の「B地区」についてはグランドとして盛土保存がはかられるところとなった。この「B地区」については、出土した土器の様相から「A地区」に比してやや古い時期に属する集落跡の存在が想定できるとのことである。

ここでは小松市教育委員会と当センターによる数次にわたる発掘で、拡幅前の市道部分を除いてほぼ全貌が明らかになった念仏林遺跡「A地区」について、双方の調査結果をつき合わせることによって判明した点を中心にみてゆきたい。基準杭の方向が異なったため接合に難しい面があったが、双方の調査で検出された遺構を一枚の図に表現したのが第4図である。上記の小松市教育委員会の報告書で空白地を中心に竪穴住居跡及び竪穴状遺構をもつ遺物集中が馬蹄形に配された状況が指摘されているが、つき合わせしたところK2号竪穴住居跡から9号遺物集中まで長さ約90m、1号竪穴住居跡から3号竪穴住居跡まで最大幅約70mの範囲に竪穴住居跡5軒、竪穴状遺構をもつ遺物集中10箇所が構築されている事実が理解できた。今回の調査で検出されたK1号竪穴（竪穴状遺構をもつ遺物集中）はこれらより北東に約25m離れた地点に孤立する。竪穴住居跡・竪穴状遺構をもつ遺物集中に囲まれた空閑地は既存の市道部分及び調査結果未報告の同拡幅部分に係る北部の状況が不明ではあるが、長さ40m以上、幅約20mの楕円形を呈すると推定される。このように広場とも思える空閑地を取り囲むように竪穴住居跡群や竪穴群が構築された背景には何らかの企画性が存した可能性が高い。少なくとも集落が営まれた時期を通じて広場の共同性は意識されていたのであろう。

次に竪穴は確認できたが柱穴・住居内土坑などが検出できなかったもの、すなわち望月氏のいう「竪穴状遺構をもつ遺物集中」の問題についてみてゆきたい。今回の調査区におけるK1号竪穴は柱穴や住居内土坑を有するK2号及びK3号竪穴住居跡に比して明らかに小形で、しかも平面プランも楕円形とはならず隅丸正方形を呈する。この点から竪穴住居跡とは性格を異にし、そうであるがゆえに機能面では相互補完関係にある建物、例えばテント風の小屋などを想定するのも一案であろう。断定はできないが住居内土坑に貯蔵穴としての性格が考えられること、また深く掘り込まれた柱穴が一定期間の居住に耐え得る上屋構造を築くために必要であったと想像されることなどを勘案すれば、やはり竪穴住居跡が居住の単位あるいは消費の単位として集落の主たる構成要素を占める事実に変わりないが、だからといって建物としてはそれのみしか存在しなかったと決めつける必然性はどこにもないといえる。柱穴・住居内土坑が検出されない点や覆土中に廃棄された遺物が含まれた点を強調するのではなく、それよりむしろ竪穴という遺構の存在を重視していく方向が必要とされよう。何を目的として竪穴の掘り込みが行われたかという理由

を探った場合、遺物廃棄のためのゴミ穴ではなくあくまでも何らかの上屋構造を築くためである可能性が最も高いと思われる。したがって柱穴が検出されなかった竪穴にも一応は建物の存在を想定し、発掘で得られたデータをもとにその推論の正否を検証してみる作業も必要とされてこようか。

なお、「A地区」では柱穴・住居内土坑を伴う竪穴住居跡が5軒、それらを伴わない竪穴が11基を数え、その比率はおよそ1：2となる。これらに1988年に市道拡幅に係り小松市教育委員会が発掘調査した際に検出された遺構（未公表）を加えることができる。第4図にみられるとおり、それらを伴わない竪穴が南側に偏る傾向が指摘できる。このことは性格・機能を異にする両者がある程度占地の違いを意識しつつ構築されていた状況を示しているのかもしれない。小松市教育委員会調査区における後者の形状等に関しては、報告書で知ることができる3基についてみる限り前者のようにプランが大形の楕円形とはならず、いずれも長径6m前後の不整な隅丸長方形を呈するようである。また、前者の配置については、1号、2号と3号、K2号とK3号の少なくとも3ブロックが存在することが理解され、既存の市道部分及び市道拡幅部分など中間部分の状況が不詳ながら、それぞれのブロックは相互に35～45mの距離をもって分布する。

（2）　石器組成について

この点はすでに樫田誠氏により考察がなされており［樫田・望月・石田　1988］、今回の調査結果も生業面で内湾性漁撈にウェイトを置く集落とする氏の考えを補強するところとなった。各遺構ごとに出土した石器をいまいちど記せば以下のようになる。

K1号竪穴

石錘2・同素材礫2・敲石1・粗粒砂岩製砥石1

K2号竪穴住居跡

石鏃6・石錐2・両面加工石器1・磨製石斧1・石錘18・同素材礫16・敲石3・粗粒砂岩製砥石7

K3号竪穴住居跡

石鏃2・石錘12・同素材礫35点・粗粒砂岩製砥石小片7

（K1号遺物集中）

石鏃2・スクレイパー？1・磨製石斧1・石錘1・敲石1・石皿1・粗粒砂岩製砥石小片3

（包含層）

石鏃2・石錐4・磨製石斧1・打製石斧5・石錘23・同素材錘21・敲石2・凹石3・磨石1・石皿2・粗粒砂岩製砥石6

この数量から漁網錘と考えられる石錘や同素材が組成において卓越し、樫田氏が釣針や銛などの骨角器の製作に使用された可能性を指摘する粗粒砂岩製砥石も普及した状況が認められる。したがって、かつて入江であった柴山潟が砂丘によって海と遮られつつなおも海水の流入が続いていた状況をも想定すれば、氏が論じた内湾漁撈を生業の中心に据えた集落像はまさに正鵠を得たものといえる。

しかし、翻ってここで検討課題とせねばならない点は、石皿や磨石類、さらには土掘具と推定

される打製石斧など、植物性食料の獲得や加工に関する道具の極端な少なさである。同じく南加賀の能美郡辰口町宮竹地内で、当センターが平成4年度より調査を実施している庄ケ屋敷A～D遺跡においては、新崎式を中心とする時期の竪穴住居跡が数十棟検出されたが、ここで看取される石器組成は石皿、磨石類が顕しく卓越するものである。ほぼ同時期の海辺部（念仏林遺跡）と丘陵部（庄ケ屋敷遺跡群）に立地する遺跡間で認められる堅果類・根菜類の加工に供されたとされる石器の組成差の問題には今後とも留意していく必要があろう。漁撈のムラと堅果類採集のムラが集落間分業に基いて交易を行ったのか、あるいは集団の領域（テリトリー）が我々が一般に想像するより広く海辺部から丘陵部までを包括するものであったのか、これに生業の季節性（シーズナリティ）の観点も加味した議論がなされることが期待される。

なお、県下における該期（念仏林遺跡「A地区」の時期）の内湾性漁撈の面では、河北潟周辺の宇ノ気町上山田貝塚［高堀・小島他　1979］、邑知潟周辺の羽咋市四柳貝塚［高堀　1978］、旧福野潟周辺の志賀町堀松貝塚［高堀他　1955］、赤浦潟周辺の七尾市赤浦遺跡［高堀・四柳他　1977］などで貝層の形成という現象がみられ始めるようであり、この時点に漁撈文化上の画期を設けることができるのではないかと思われる。樫田誠氏が骨角器の製作との関連を論じた粗粒砂岩製砥石が上山田貝塚でも出土している点、直良信夫氏が堀松貝塚出土の魚骨の一部に銛などの骨角器による刺突痕を指摘している点などにも留意すべきであろう。

（3）土器について

結論から先にいえば、出土土器にみる集落の形成時期については、小松市教育委員会調査会調査区の状況［樫田・望月・石田　1988］と大差ないと思われる。望月精司氏は念仏林遺跡「A地区」で集落の形成がみられた時期の資料を概ね新崎Ⅱ式から上山田Ⅰ式に位置付けたが、今回の調査区の状況も基本的にはそれと変わらない。しかし、新崎式と上山田式の境界をどこに設けるかといった問題ではいまだに研究者間の一致をみていないのが実情であって、念仏林遺跡「A地区」の主体が両者のうちのどちらであるかと問われても苦笑するほかない。したがって、個々の土器について安易に「新崎」或いは「上山田」の語を用いることも門外漢の筆者には憚られるので、研究の歴史が長く資料的にも蓄積が進んだ地域である北加賀・能登出土の有文深鉢をもとに浅学非才な筆者なりに段階設定を試みることにしたい。改めておことわりしたいが、以下に記す作業は新崎式と上山田式をどこで区切ればよいか理解できない筆者の頭の中の整理のためであって、あくまでも編年的研究を意図したものではない。

1988年に刊行された『縄文土器大観3』において小島俊彰氏は、上山田式の深鉢の器形の指標として「複合口縁」をあげるが、その複合口縁がいかなる器形的変遷のうえに成立してきたかを考えてみたのが第40図である。文様の問題を度外視して祖型を求めた場合、消去法的にA・Bとした口辺部主文様を楔形刻目文を伴う無文帯とする一群が浮かび上がってくると思われる。この段階では口縁はいまだ内湾基調であるが、後者では屈曲のきざしが認められる。続くC段階では口辺部主文様上端付近における器形の屈曲が明瞭となるとともに、胴部の形態でもC′のようにふくらみをもたないものがみられるようになる。口辺部文様帯に前段階と同種の文様を有するものも念仏林遺跡1号住居跡［樫田・望月・石田　1988］や富山県朝日町下山新遺跡第1地点東区

［富山県教育委員会　1973］出土資料などに見受けられるが、ともに胴部がふくらむ器形となる。この段階における口辺部文様帯に注目するならば、やはり従来は胴部文様帯の構成要素ではずの格子目文の口辺部への採用という現象を重視するべきであろう。その他にも長弁化した蓮華状文も口辺部で用いられたと考えられる。

さて、さらに次のDとした段階では口辺部文様帯が幅広となり、前段階に比して相対的に口辺部文様帯の器面全体に占めるウエイトが高まるようである。その一方で、かつて口辺部文様帯下端部があわせもっていた器形上の変換点としての意味が急速に失われようで、C・C′では口辺部下端を境に器形が大きく外反するのに対して、Dではそのことが指摘できなくなってきている。そして、口縁部形態についてもかつてのキャリパー状のそれの雰囲気を残しつつも同時に複合口縁の萌芽を認めることができる。文様面では新崎式以来の蓮華状文がここに至ってDのごとく本来の意味を失って形骸化する。以上がこの段階の諸特徴であるが、一旦確立したかにみえた幅広の口辺部文様帯もこの段階の末には10のように下端の境が曖昧となり多段化する傾向が看取できるものもあらわれてくる。

第40図に示した最後の段階はE・Fとした複合口縁の確立した段階であり、バケツ形器形の系列においても12のように口縁上端にもう一段付加して複合口縁化するものもあらてくると考えられる。ここに上記の流れとは系譜を異にするもう一つの流れの存在を指摘することが可能といえるが、これはあくまでも主流とはならず、先述のA～Dの系列における変化の影響を受けた事象と評価できるのではなかろうか。

以上、複合口縁の成立過程に関する自論を述べてきたが、A・Bを第Ⅰ段階、C・C′を第Ⅱ段階、Dを第Ⅲ段階、E・Fを第Ⅳ段階として位置付けることにする（第40図）。第Ⅰ段階については口辺部の主文様や胴部の形態から新崎Ⅱ式に含めて問題ないものと思われ、第Ⅳ段階は典型的な上山田式といえる。また、新崎式の残影からの脱却が完了しつつあり、複合口縁の萌芽が認められる第Ⅲ段階についても、上山田式の古い部分と判断して差し支えないものと思われる。Dとして掲げた11の金沢市加賀朝日遺跡出土の深鉢を報告者の高堀勝喜氏が「第2群土器」、すなわち「新崎式の系譜につながる上山田Ⅰ式」とする見解を表明している［高堀　1987］ことや、上山田・天神山式土器様式を論じた小島俊彰氏が「複合口縁深鉢が、完全に主流となる」とされる「第Ⅱ様式」の前段階として「第Ⅰ様式」を設けている［小島　1988］こととも矛盾しない。最も問題となるのが第40図に第Ⅱ段階とした段階の扱いであり、従来の新崎式の崩壊過程として位置付けられるとともに、同図に示さなかったが新道式系とされる外来系土器の流入の時期にもあたっている。新保・新崎式土器様式を論じた加藤三千雄氏は、「上山田Ⅰ式なのか新崎様式末期であるのか」、或いは「残された問題は、諸型式をどのようにふりわけ、新道系土器（深鉢E形式）をどの段階につけるかである。」と問題提起されながらも、規格崩れの新崎式土器群に新道系土器が伴うことを目安とする土器群を新保・新崎式土器様式の「第Ⅶ様式」として新崎式の終末に置く。しかし、一方、南久和氏は北陸における新道式系土器出現の意義の重要性を指摘［南　1977］するとともに一貫してその出現期以降を新崎式から切り離す立場をとり、近年は上山田Ⅰ式に含めて考えられている［南　1985］。また、高堀勝喜氏は『七尾市史』における赤浦遺跡の記

出土地：KY＝上山田貝塚、M＝真脇遺跡、KA＝加賀朝日

縮尺不同

第40図　北加賀・能登における複合口縁の成立

述のなかで新道系土器及び規画が崩れつつある新崎式系統の土器を「上山田古式」と呼び［高堀 1970］、加えて加賀朝日遺跡出土資料の報文においても規格くずれの新崎式系統の土器と新道式系統の土器が「上山田Ⅰ式」であることを再言されている［高堀　1987］。

第40図で第Ⅱ段階とした段階（加藤氏の「第Ⅶ様式」に相当か）については、たとえ新崎Ⅱ式の系譜をひく土器が残存しようとも、やはり新崎式から切り離して考えるべきだと思われる。画期の設定は残存する要素よりもむしろ新しく出現した要素に着目してなされねばならず、文化的背景においても内湾性漁撈の面で画期を見い出し得ると考えるからである。また、高堀氏が新道式と勝坂式の併行関係に触れており［高堀　1987］、これも重要な観点となろう。

では、同段階が新崎式でないとしたら何式になるのであろうか。かつて四柳嘉章氏は新崎式と上山田式との中間型式として「赤浦式」を提唱したことがある［高堀・四柳他　1977］。現在でも新崎・上山田両型式の境界が判然としない状況が続いており、氏の提唱の主旨・根拠には首肯すべてき点が多く、中間型式の有効性は認められる。しかし、編年研究の趨勢をみるなら現時点における中間型式の設定は余計な混乱を招くだけであり避けるべきであろう。やはり上山田Ⅰ式に含めて論じるのが最上の策といえる。

上山田Ⅰ式初頭に位置付けられる規格くずれの新崎式系統の土器の器形で留意すべきはバケツ形器形と波状縁であろう。加藤氏が加賀朝日遺跡出土のバケツ形の土器について、たとえ横帯する蓮華状文など新崎式の伝統を忠実に継承した文様を残すとはいえ、より新しい時期に置いている点［加藤　1988］はまさに卓見である。また、同遺跡にみられる波状縁の資料については、報告者の高堀氏はそのほとんどを上山田Ⅰ式に含めており［高堀　1987］、氏はこの問題では時期差を主眼としているように思える。これに対して望月精司氏は念仏林遺跡「A地区」などでみられる波状縁の頻度が高いという現象を、南加賀の地域性として評価している［樫田・望月・石田 1988］。南加賀における波状縁の出現・多様の画期については、新崎Ⅱ式期の集落跡の存在が予想される念仏林遺跡「B地区」が未調査のため不詳といわざるを得ないが、この問題については今後とも時空両軸からの検討が必要とされよう。

新崎式と上山田式の境界についての私見をいささか冗長に述べてきたが、念仏林遺跡「A地区」の出土資料は、南加賀地域であるため北加賀方面との直接対比が困難な部分が多いものの、概ね新道系土器の流入と、いわゆる規格崩れの新崎式系統の土器に代表される時期を上限とし、下限は複合口縁が深鉢で主流となる段階まで及ばないと考えらる。第40図で第Ⅱ・第Ⅲとした段階に相当しよう。ただ、上限については南加賀における新崎Ⅱ式の様相がいまひとつ不分明なため保留部分が残る。また複合口縁の確立という現象は、南加賀では加賀市藤ノ木遺跡の「第Ⅱ群土器」［中村他　1985］の一部や能美郡辰口町莇生遺跡の「第1群土器」［西野　1978］中に見い出せるのではないかと思われる。

したがって、念仏林遺跡「A地区」は上山田Ⅰ式期を主体とする集落跡である。なお、上山田Ⅰ式（あるいは「赤浦式」といってもよかろう）という型式名称は、新道式系土器の流入から複合口縁が未確立な段階（第40図の第Ⅱ～第Ⅲ段階）を限って用いるべきだと私個人は考える。

参考・引用文献

青木豊昭　1988　「横山古墳群について」『六呂瀬山古墳群』　福井教育委員会。

赤塚次郎　1994　「尾張の土器と埴輪」『継体天皇と尾張の目子媛』　小学館。

樫田誠・望月精司・石田和彦　1988　『念仏林遺跡』　小松市教育委員会。

樫田誠　1992　『矢田野エジリ古墳』　小松市教育委員会。

加藤三千雄　1988　「新保・新崎土器様式」『縄文土器大観３』　小学館。

北野博司　1983　「箱形粘土槨の再検討と横穴式木室との関連性について」『北陸の考古学』　石川考古学研究会。

久保智康　1991　「越前・若狭における在地窯の出現」『北陸古代土器研究』創刊号。

小島俊彰　1988　「上山田・天神山式土器」『縄文土器大観３』　小学館。

古墳文化を学ぶ会　1992　「加賀・能登の古墳測量調査」『石川考古学研究会々誌』第35号　石川考古学研究会。

田島明人他　1978　「江沼古墳群分布調査報告」『石川考古学研究会々誌』第21号　石川考古学研究会。

高堀勝喜　1970　「原始時代」『七尾市史』資料編第４巻　七尾市役所。

高堀勝喜・四柳嘉章他　1977　『赤浦遺跡』　七尾市教育委員会。

高堀勝喜　1978　「羽咋の縄文遺跡」『羽咋市史――原始・古代編――』　羽咋市役所。

高堀勝喜・小島俊彰他　1979　『上山田貝塚』　宇ノ気町教育委員会・石川考古学研究会。

高堀勝喜　1987　「金沢市加賀朝日遺跡出土の縄文土器」『石川考古学研究会々誌』第30号　石川考古学研究会。

近間強　1988　「小松丘陵窯跡群分布調査報告Ⅰ（遺跡編）」『石川考古学研究会々誌』第31号　石川考古学研究会。

富山県教育委員会　1973　『富山県朝日町下山新遺跡第１次発掘調査概報』　富山県教育委員会。

中司照世　1977　「加賀における古墳時代の展開」『古代文化』第29巻９号　古代学協会。

中村準一他　1985　『藤ノ木遺跡』　加賀市教育委員会。

西野秀和　1978　『莇生遺跡』　辰口町教育委員会。

能登健　1991　「畑作農耕」『古墳時代の研究』４　雄山閣。

橋本澄夫　1966　「弥生文化の発展と地域性　北陸」『日本の考古学３』　河出書房。

真脇遺跡発掘調査団　1986　『真脇遺跡』　能都町教育委員会。

南久和　1977　「北陸の縄文中期にみられる連続刺突沈文について」　『石川考古学研究会々誌』第20号　石川考古学研究会。

南久和　1985　「北陸の縄文時代中期の編年について」『北陸の縄文時代中期の編年』　転形書房。

宮本長二郎　1988　「縄文の家と村」『縄文人の生活と文化』古代史復元２　講談社。

望月精司　1990　「南加賀古窯跡群成立期の様相」『二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡』　小松市教育委員会。

藪谷栄一　1978　「貝塚と葉脈状文」『加賀市史通史上巻』　加賀市役所。

吉岡康暢　1987　「弥生・古墳時代」『辰口町史――前近代編』　辰口町役場。

あとがき

念仏林遺跡は小松市街地の南西、低平な月津台地の一角を占地する縄文時代中期前葉末から中葉初頭にかけての集落跡である。この地に遺跡が存在することは古くは小松高校地歴クラブの活動により昭和20年代より知られていた。

今回の調査区では西側を中心として地表部に赤土の地山による盛土がみられた。これはいよいよ本土空襲も懸念されるようになった大戦末期、昭和19年頃の臨時滑走路の遺構であるという。万一、小松飛行場が爆撃で使用できなくなった場合に備えて、当時の予科練生が100人以上で谷の向こうの台地からトロッコで土を運びつき固めたもので、飛行機は周辺の林の木陰に隠す手筈となっていた。このようなきな臭い歴史もあった遺跡周辺も戦後は再び平和な牧草地と森にかえった。

しかし、ＪＲ北陸本線粟津駅や国道８号線に近接して交通条件に恵まれたこの地の静寂は長く続かなかったようで、昭和の末年には遺跡をすっぽり包み込む広大な牧場は売却され、再開発で文教地区や工業用地として新しく生まれ変わる運びとなった。

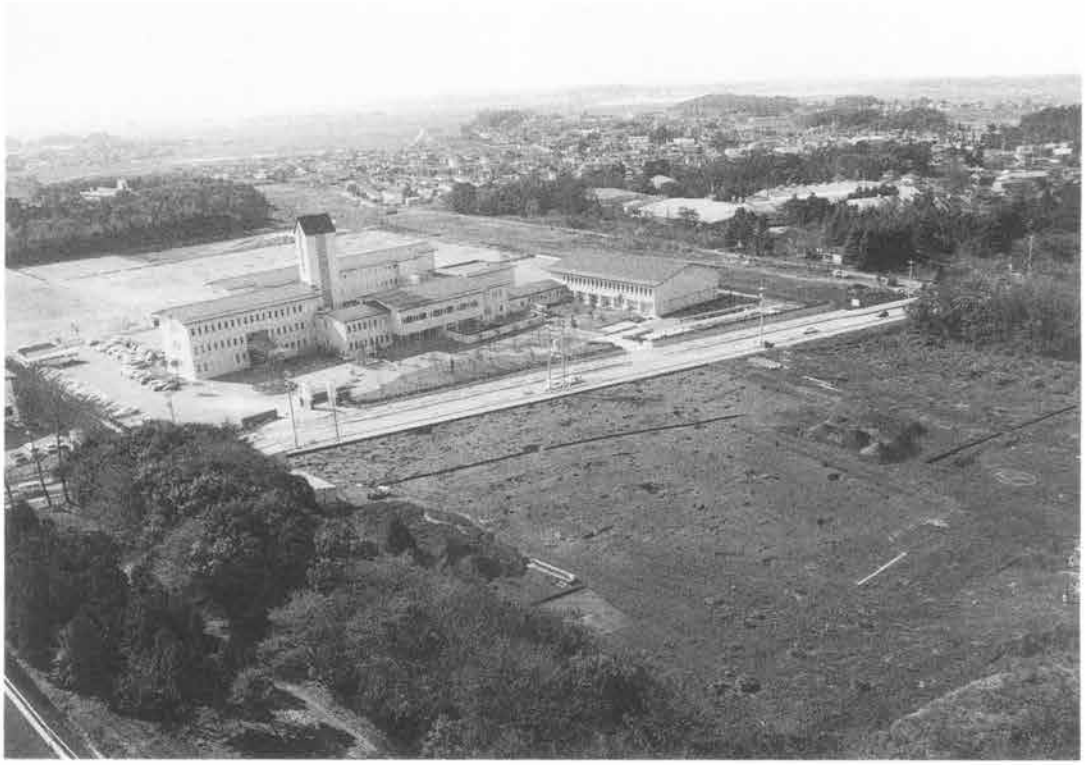
念仏林遺跡「Ａ地区」の大半は新規に開設される短大の敷地として、また市道を挟んだ北端部は石川県土地開発公社の串町用地の一部として造成後に分譲地として利用される計画がまとめられ、ほぼ全面が発掘調査の対象となった。縄文時代の一つのムラの跡がまるごと調査されたのは、小松市内でもこれが初めてのケースとなった。

まず先鞭をきったのは前者についての小松市教育委員会の調査で、関東の地で旧石器時代の研究法を学んだ樫田誠氏は、全点ドットにより遺跡の構造・動態の解明をめざした新しい調査方法をいち早く導入された。土器の編年作業それ自体が自己目的化した観のある北陸の縄文時代研究の現状にあって、異なる一つの新たな地平を開拓し得る画期的な業績と評価されるものである。

筆者が後者の原因に係り本遺跡の調査に臨んだ時点では、すでに小松市教育委員会による調査成果は報告書として刊行されるに至っていた。現在でも石器研究や遺跡の構造論を語る際のバイブルともいえる高い水準を示したものである。それゆえに筆者は大きなプレッシャーのもとに後続の調査にあたることになり、ただ恰好だけ真似して一応は全点ドットによる遺物取り上げをおこなってみた。しかし、意味を理解しない模倣は所詮は猿真似に過ぎないことは、本書を一読すれば明らかであり、データを生かしきれなかった自らの凡庸さを反省し今後の糧としたい。

「多そうで少ないのが新崎式である。」とは、昭和の最後の年に刊行された『縄文土器大観３』における加藤三千雄氏の言葉である。平成に入り、いしかわサイエンスパーク関連の発掘調査などで新崎式期の集落跡が全面調査されるケースが増加し、それも今昔の感がある。平成２・３年度には小松市六橋遺跡において本田秀生氏が全点ドットにより縄文集落の構造把握を目指した調査法を採用し、また、縄文集落を卒論のテーマとした布尾和史君が当センターの新しいスタッフとして加わった。本書で果たせなかった課題が克服される日も近いと予感される。

最後となったが、夏の炎天下も作業に従事された皆様に心から感謝したい。作業員の皆様のお陰で発掘調査を成し遂げることができたのである。



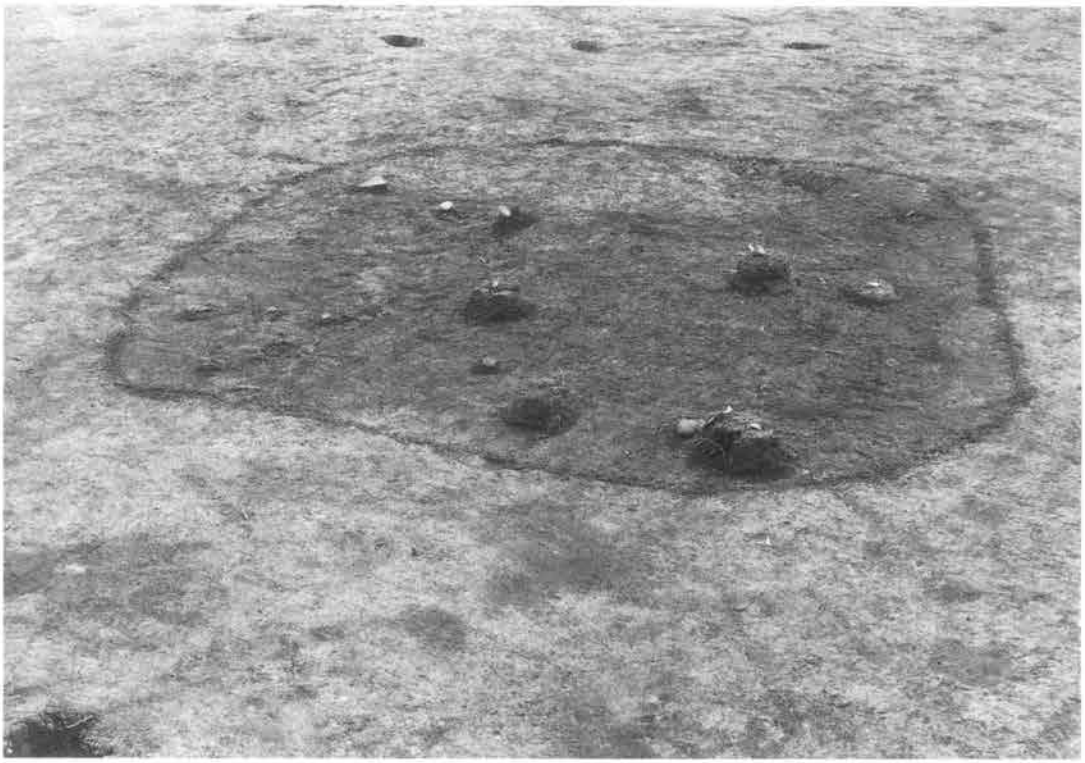
(1) 全景（北東から）

(2) 調査区南部（西から）

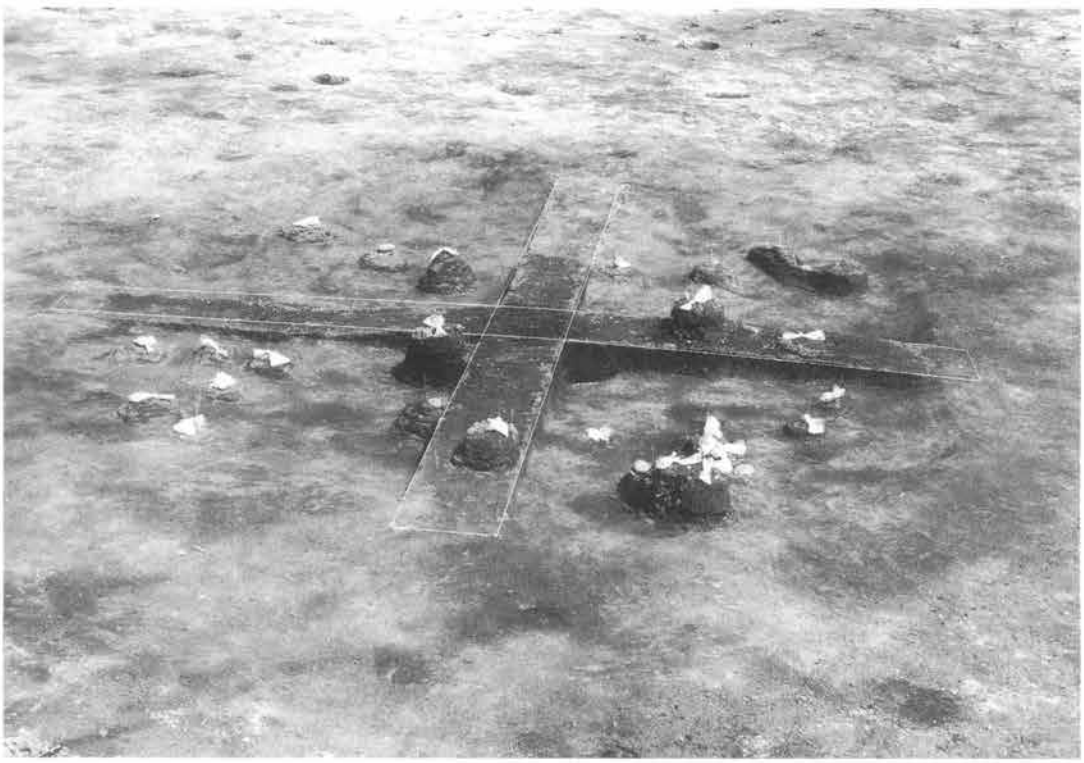
図版第2

(1) 表土除去風景

(2) 調査作業風景

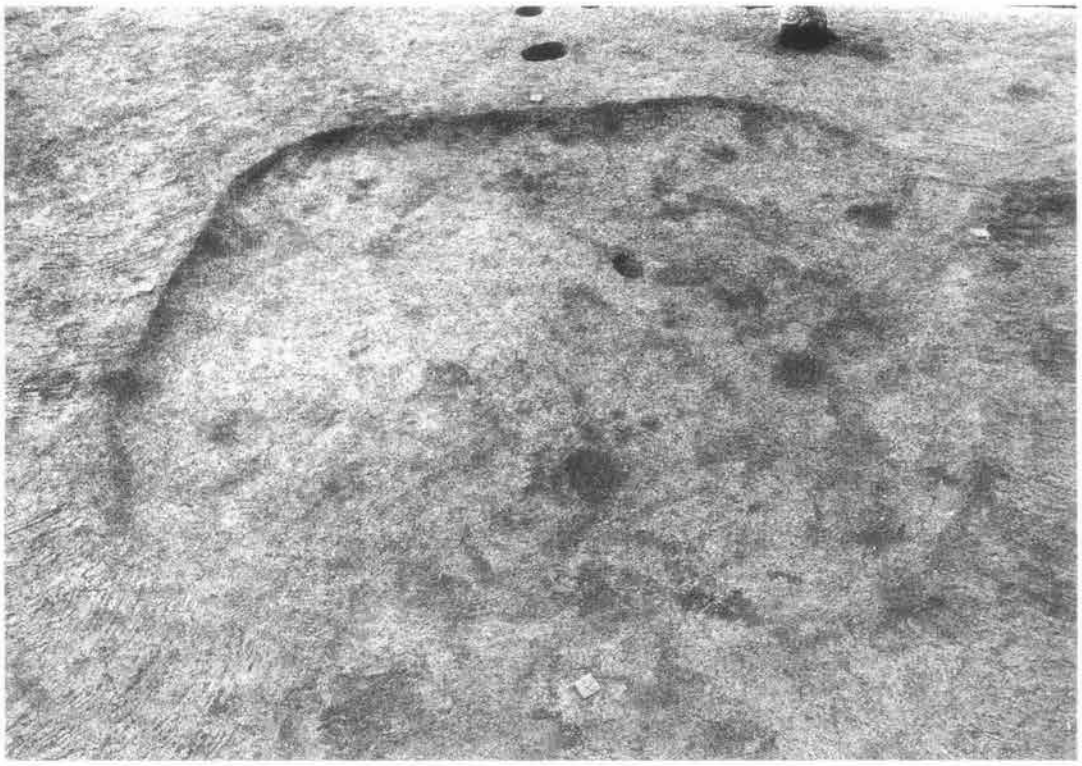


(1) K 1 号竪穴（検出状況）



(2) K 1 号竪穴（土層断面）

図版第4

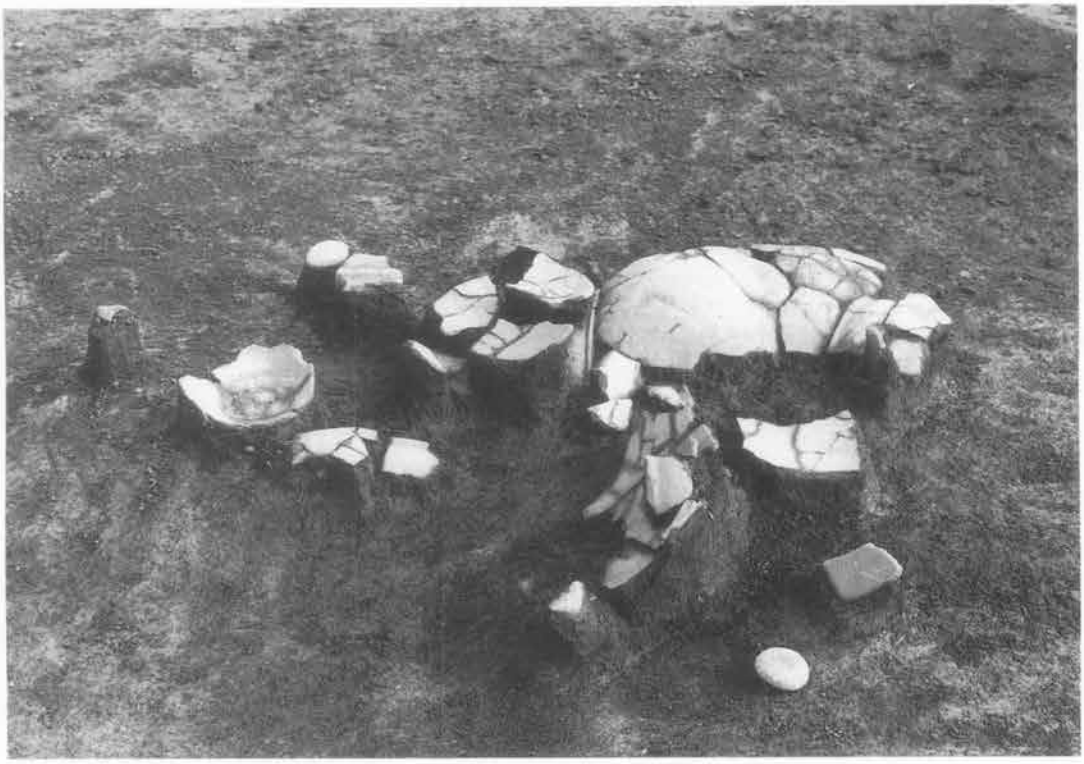


(1)　K 1 号竪穴（完掘状況）

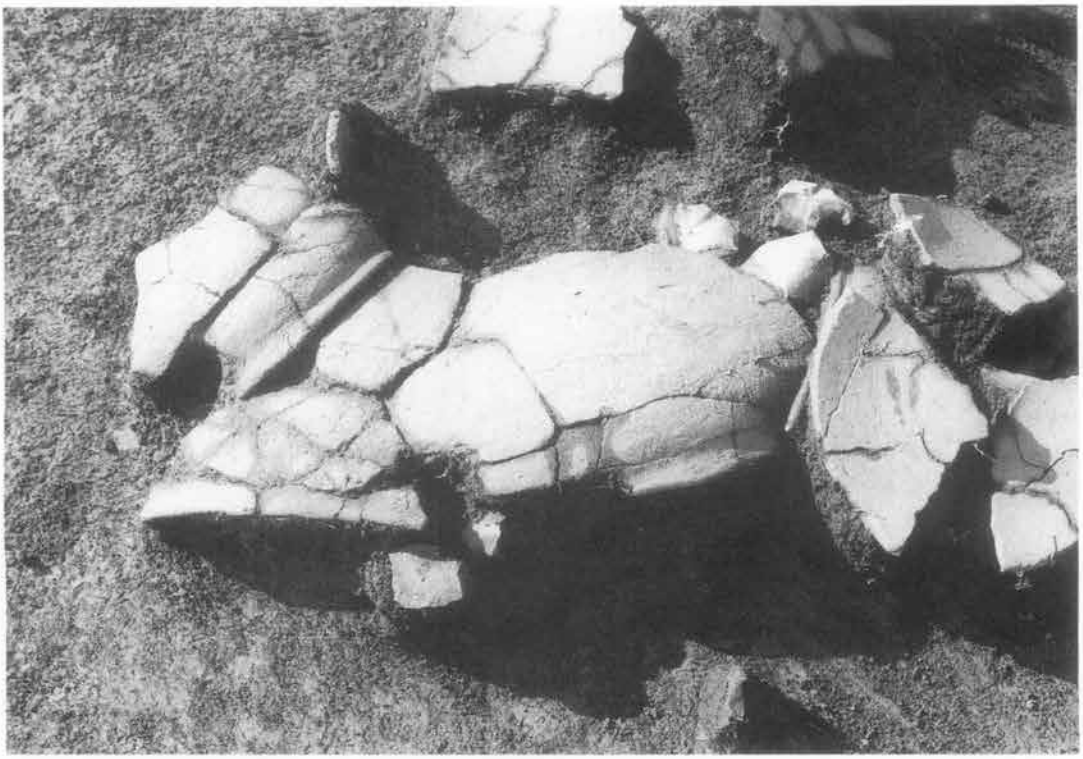
(2)　K 2 号竪穴住居跡（柱穴等検出状況）

(1) K 2 号竪穴住居跡（西から）

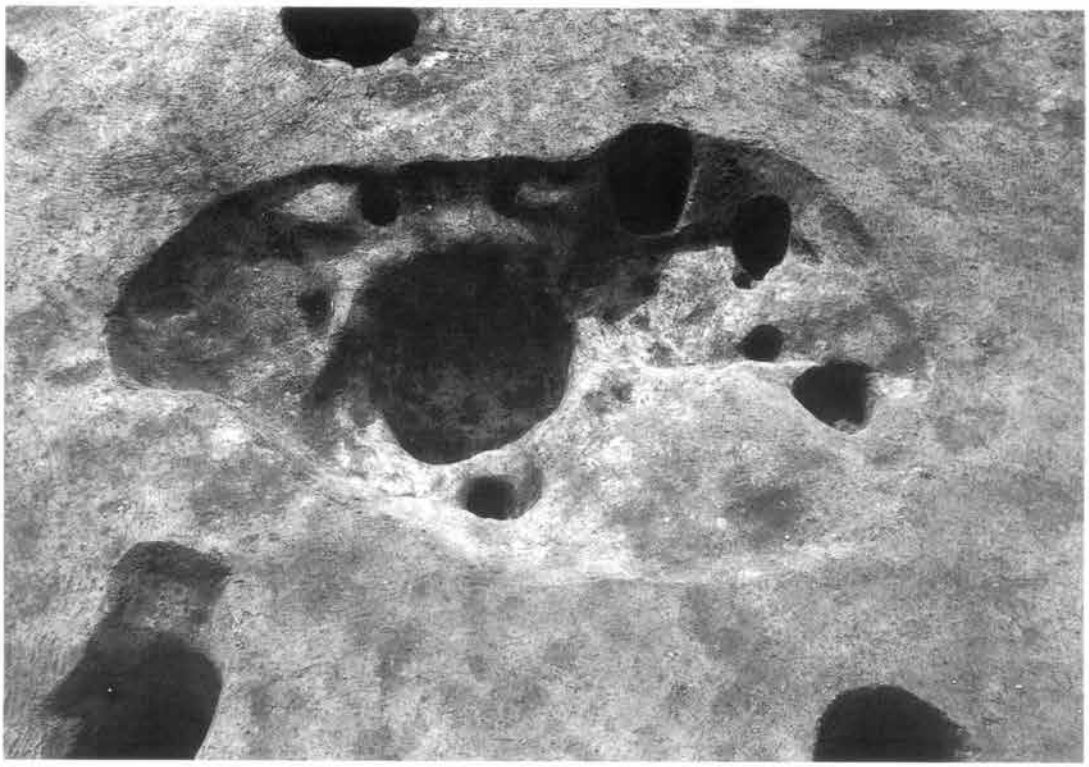
(2) K 2 号竪穴住居跡（北から）



(1) K 2 号竪穴住居跡（遺物出土状況）

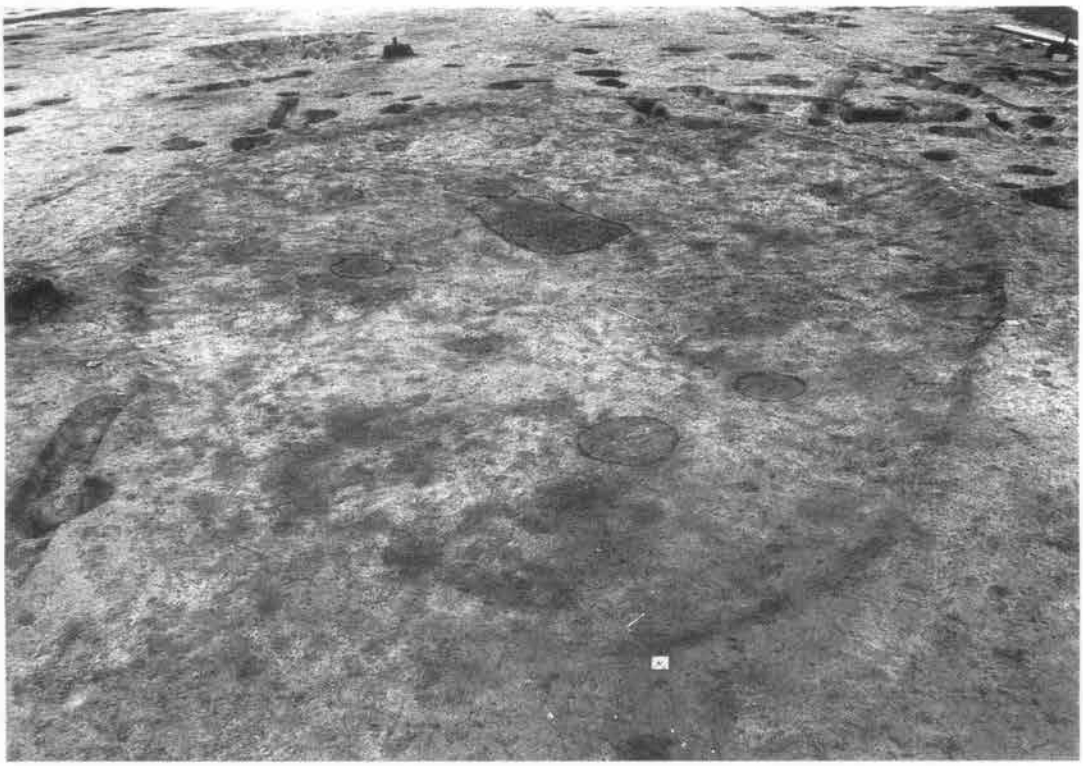


(2) K 2 号竪穴住居跡（遺物出土状況）



(1) K 2 号竪穴住居跡（住居内土坑）

(2) K 2 号竪穴住居跡（住居内土坑遺物出土状況）

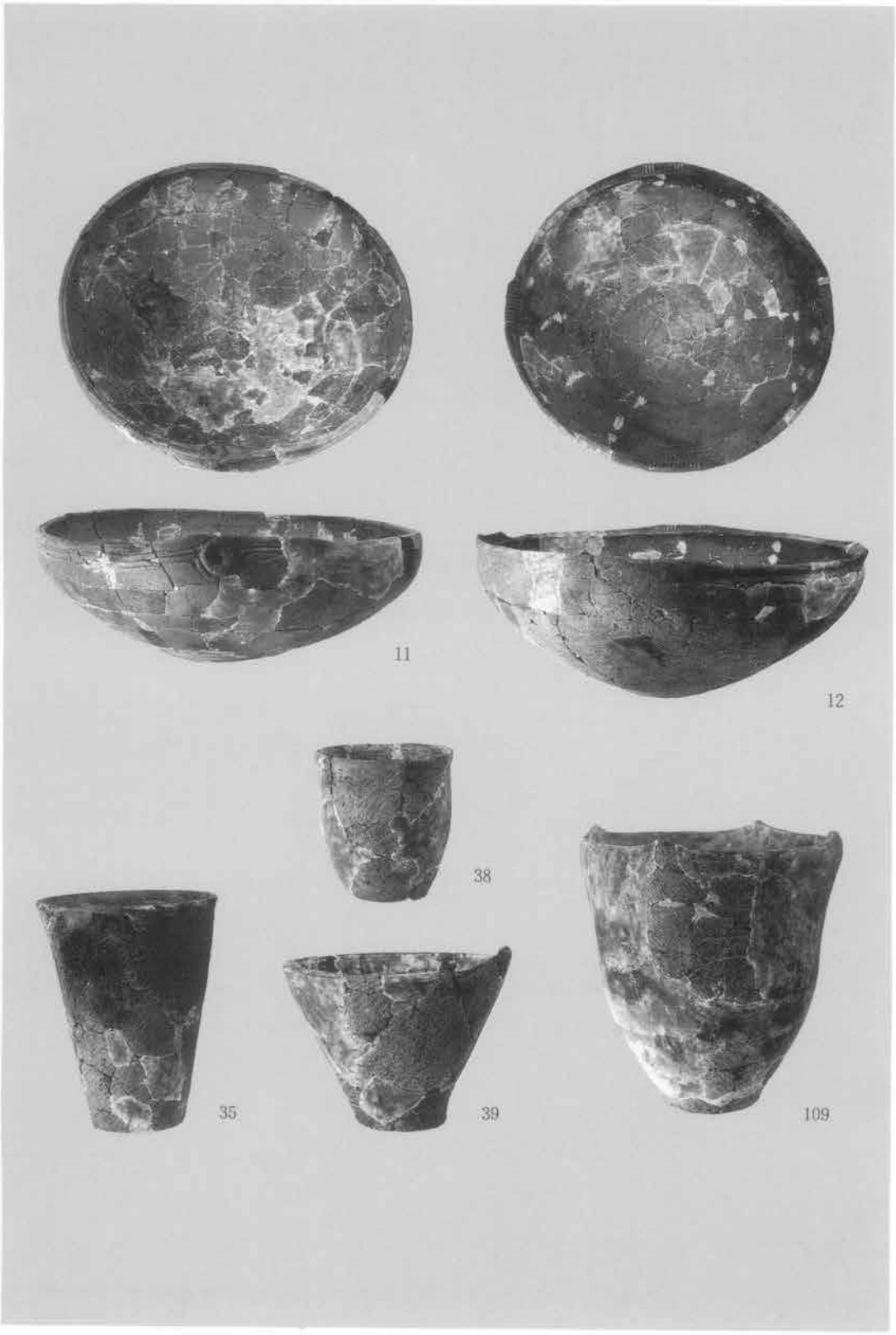


(1)　K 3 号竪穴住居跡（柱穴等検出状況）

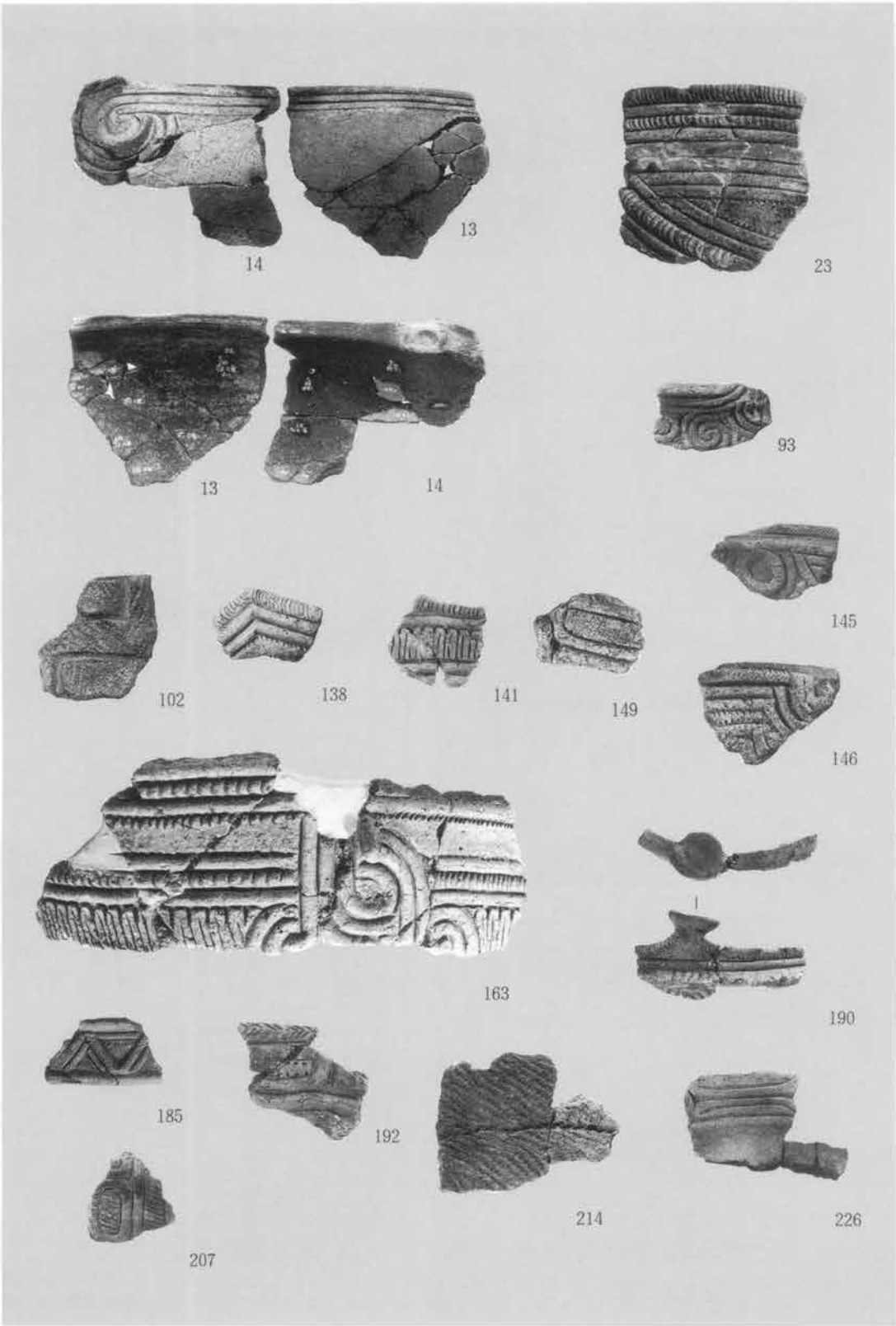
(2)　K 3 号竪穴住居跡（西から）

(1) 住居跡調査風景

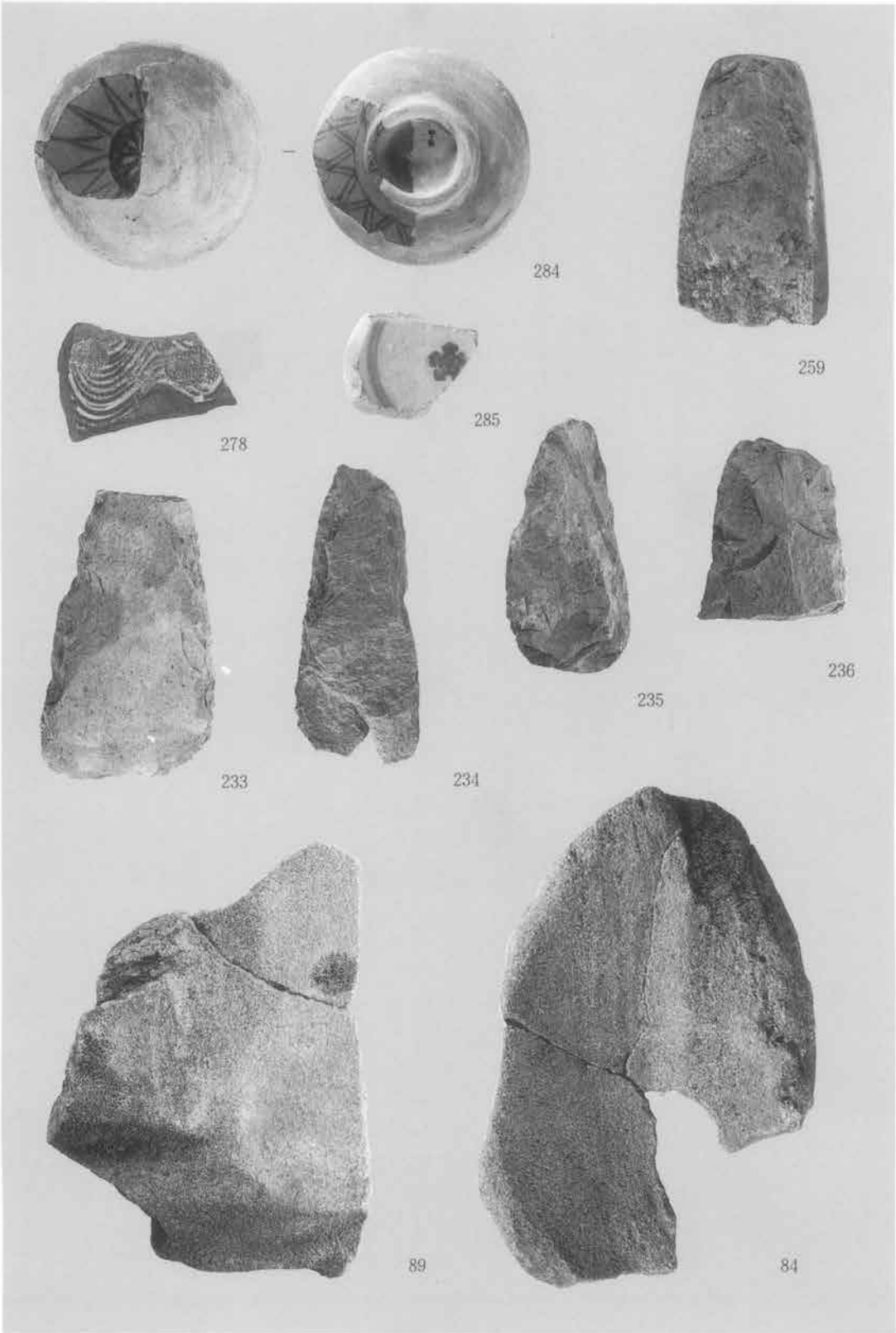
(2) K 1 号遺物集中



縄文土器(1)


14
13
23
13
14
93
145
102
138
141
149
146
163
190
185
192
214
226
207

縄文土器(2)



近世陶磁器・縄文時代石器

念仏林遺跡

石川県土地開発公社串町用地
整備事業に係る発掘調査報告書

平成5年 3 月 20 日 印刷
平成5年 3 月 30 日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921 電話（0762）43－7692番㈹

印　　刷 能登印刷株式会社